

325  
499

6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

始





28. 8. 13



25-497

**Jens Johannes Jørgensen**

**St. Frantz of Assisi**



Quasi ad tempus vernale  
perdusit universum."

Tres socii.

28/5/6





知られたる最も古き聖フランシスの肖像（畫家不詳）

私の愛する母に、よろこびの日と  
かなしみの日の思ひでのために。

譯  
者



## 緒言

このよき書の原著者 イェンス・ヨハンネス・ベールゲンセン Jens Johannes Ju Gensen は一八六六年十一月にデネマルクのスエンドボルグで生れた。彼ははじめ動物學などを研究して自然科学に志してゐた。けれど彼のあたへられたる才能は詩人としての仕事に於いてあらはれた。彼の二十一歳のとき第一の詩集「詩」は公にされ、ついで「春の傳説」(1888)「他郷の人」(1890)「夏」「情調」(1892)「生命の木」(1893)「郷愁」(1894)が出た。

これらには彼の同國人なるイェンス・ベール・ヤコブゼンの影響は痕つけられることができる。デネマルクの文學に一つの特色をなすものといふべき清新な、けれど一種の光を缺く悲しさのやうな憂鬱と自然と人に對する抒情詩的な温情はヨエルゲンセンに於いて代表的に現はれてゐる。

一八九三年から五年のころ彼は文藝雜誌「塔」トムネットを編輯してゐた、それは當時ブランドスとその徒の代表してゐたレアリズムに對してフランス象徴派の思想を宣傳した、ことにゼルレーヌとホイスマンスはヨエルゲンセンの著しい愛慕を示した詩人であつた。「智慧」サジエツスの詩人とそして「途上」アシュイトの惱める人のとつたみちは、これらの二人に於けることき矯激と冒険とをもたなかつたとしても、またヨエルゲンセンみづからのふむべきみちであつた。「塔」の時代は彼にとつてはまた回心コンヴァルションの時期であつた、彼はドイツやイタリアの旅に於いて多くの修道院をおとづれ、そしてカトリックの宗教生活のなかにみちてゐる生きた力を感じ



た、それは彼の「旅の書」(1885)「地獄の敵」(1887)「ブエーロン修道院」(1888)「生活の眞實と生活の虚偽」(1891)「詩集」懺悔」(1892)等のなかに鑄られたる彼のたましひの大いなる閱歴である。彼はこれらに於いては一種の宗教的詩人哲學者である。そして彼の思想は週刊雜誌「カトリック」に於ける主張と論駁に於いて叙べられ、そして更にのちにいたつてより大いなる著作に於いて美しき、善きものをあたへる基礎を形つくりつゝあつた。

彼の小説の一例、「最後の日」(1886)「回心」(1889)「デネマルクの聖母」(1900)「エッ」(1901)「使徒」(1900)「聖とき火」(1902)、またホイスマンス風な「寓話」(1903)を経て、そして彼の仕事は「だいに歴史的研究の安定に深くなつたやうに見える、すなはち、「ローマの書」「ローマの聖徒畫」「順禮記」(1903)等である。その最後のものは更にのちに出た「アツシジの聖フランシス」の準備、そして序曲として見るべきものであられるけれどもそれみづからにもイタリヤの自然と人の生活の美しくそして理解深き叙述として、「聖フランシス」のなかにも不十分ではない背景をさらにより強く詩人的に描いたものであつてアツシジの聖者を研究せんとする人には多くのものをあたへることができる。けれども彼の生活と著作に冠するものはやはり「アツシジの聖フランシス」であつて、そのなかにはたゞ詩人のみが現はしうる直接な同情をもつて理解された聖者の生活が生きた描寫と解釋を得、そして遠き時代がふたゞび私たちの目のまへに自から語るがことき親しきをもつて再現されてゐる。それは十九世紀の半ばより以後に新たにせられたこの聖者に對する研

究の世界的な熱心にむかつてなされたる感謝すべき寄與の一つである。聖フランシス研究の事業は殆んど全ヨーロッパに行はれてゐる状態にあり、そしてあまたの學者たちは彼らの生涯をこれにさゝげてゐるのである。それらの人々の共同の事業として、聖フランシスについての史實はますます「精確なるもの」を得、そして讀みかたの忘られた譜本の記號をふたゞび釋くことによつてある遠き昔の歌がふしぎな新しきさをもつて響きいづるやうに、聖フランシスの生活はますます「新しき力ある全體として生きてくる觀がある。ヨエルゲンセンの著書もそのやうな新しき演奏の一つである。ことにそれが先だつて出た他の傳記よりはよりよく中世の人として、純にカトリックなる聖フランシスを現はしてゐることはこの書の特質である。

私にはヨエルゲンセンの著書はやさしい慰さめと明るい力づけを與へつゝけた、その感銘と教訓に對しては私のいかなる感謝も十分であることはできない。私はまた忘れてはならない、私がはじめてヨエルゲンセンの名を知つた機會を、それは一九二二年三月末に讀賣新聞の日曜附録に載せられた藤井某氏の「詩人ヨエルゲンセン」なる一つの紹介であつた——私はそれを一高の寄宿舎の窓べにすはりつゝ、うらゝかな春の朝に讀んだ——私は私の知らないこの人にはじめてこゝに私の感謝をつける。私は一九一三年の夏にこの書の翻譯を、英語の譯本によつて、はじめた。そしてそのうち、多くはドイツ譯に従ひつゝ、時々手を加へてつひにやうやく全くして公けにすることゝなつた。そのあひだ私に親しいはげましを與へてくれた友だちはこの完了について悦んでくれるであらう。また私は私の「小さな花」の翻譯について私に好意をお



くられた人々に負ふ感謝を表明する、彼らにこの書がまた新たなよろこびと智慧と力の泉であらうことを希ひつゝ。

この書に入れた挿繪は決して原本にあつたのではない。私は自分でこの書の内容にふさはしいものを選んだけれど、それらは決して聖フランシスを題材とするものもすぐれた作品のみではないかもしれない。私はそのうちで二つ——聖フランシスのもつとも古い肖像（註）およびジョットーの「聖フランシスと貧しさとの結婚」——については短かい解説を書くことをふさはしいと考へた、そしてそれを附録として添へることとした。一九一六年十月

M.  
K.

### 原著者の序より

……私は決してこの書の後半をそこで書いたフラウエンベルクの園の夏の夕を忘れないであらう、私たちがうちつれて往きつかへりつ散歩し、太陽が大きく赤く木々のうしろにしづむとき、そして私は友であり専門家である人に私のその日の仕事をひろげて、そしてかれこれの難點について彼の意見をもとめたときのことを。

アツシジの聖フランシスの傳記を書くことは一つの特別なことであり、たゞ牧師の手がそれを敢へてすべきものである、とかつて私の父のごとき友ビューロンの修道院の長職たるブラチドウス・ラルテルが私に謂つた。そして聖者みづから「完全の鏡（註）」のなかに何と曰つたであらう？「皇帝シャルル、ローラン、オリギエその他の圓卓の貴とい騎士たちは異教徒に對しての戦ひに彼らの命を賭け、そして彼らを攻め伏せ、または聖とい殉教者となつてキリストの信仰のために戦つて死んだ。今日では彼ら英雄たちの功業を物語ることのみをもつて名譽と好遇を人々に得んとするものがはなはだ多い。またおなじやうにして、聖者たちの業について説教することのみ



をもつて名譽と讃へを收めんとするものが多くある。」

深くそして眞に聖フランシスは謂つた、「人はたゞ實に爲せるだけのことを識る。」  
*Tantum homo habet de scienti, quantum operatur.* 知識の終極の目的はこゝにある、それが生命に役たち、生命を進めしめ能ふところにある。知ることは生命とならなければならぬ。

それ故にまたすべての古しへの傳記者たちの著作的勤勉のうしろには一つの實踐的・道德的な目的があつた。そしてもしも一つの近代的なフランシス傳がアツシの聖者の精神をもつて荷負はされてあるべきためには、それもまたむかしの僧房の兄弟たちの著作のそれとおなじ言葉にひよくことができなければならぬ、*secundum exemplar*・模範にしたがひて作せ。フランシスから學べ、諸ろの理想はたゞ實現されむがためにそこにあることを。

# 欠







除は再び閉されて、彼は室のなかの静かに心安いうす暗さのなかに晝寝するのである。彼がさめるとき、そしてふたゝび光へと開かれるとき、太陽は窓から去つてゐる、けれど床のなかで身を起せば、彼は平野のむかひに山々が青く覆衣に包まれるのを見ることができ、そしてまもなく緋のやうな秋の暮の夕ばえは西の空に燃える。暗が速やかに落ちかゝれば、彼は小屋の中に追ひ入れられつゝ鳴く羊のさせるもの音や、羊飼ひや羊飼ひの少女たちが野から家に歸りくるみちで歌ふ聲を聞く。病む人の聞いたのは、かのウムブリヤの民謡のあやしく心にしみる歌であつた——その歌は今に至るまで民の唇に上つては、そのゆるやかな、ふしぎに憂はしい調べにたましひをあふれるばかりの哀れさとするべき苦痛にかきくれさせる。つひにすべての歌は沈黙し、そしてそれはまつたく夜となる。遠い山々のうへにたゞ一つの大きい星が光る。それが見えるときは、窓をさとして、夜のためのランプをとすときである——そのランプ、熱に悩む永い夜な夜な、彼のくるしき夢が彼をなやませた永い時をとほしてたえず守つてゐたその燈を。いつしか今日はそのすべてが變る日であつた——今日こそはつひにはじめて彼の床を離れることを許されるのであつた。

他の室々へ入つて行つて、そしてそのやうに久しく見なかつたもの、あるひは彼が殆んど永久にそれらに別れやうともした物のすべてを眺めて、それに手をふれるとき、彼はいかにうれしいであらう。彼はそのとき店のなかへまで出て行つて、そして人々が來て賣買ひのはじまるのや、そして手代らが立派なトスカナ織物の尺をとつて、そしてきらきらする貨幣を鳴らすのを見なければならぬと思つた。青年がこれらの夢みに耽つてゐたとき、恰かも戸は開かれた。それは——彼のいたつきのあひだの朝ごとにしたやうに、彼の母が入つてきた。彼女が窓を開いて光を入れたとき、彼は母が彼の朝の食事を運び入れるときに、男の着物を腕にかけて持つてきてゐるのを見とめた。

「ね、フランチェスコや、私はおまへに新しい着物を作らせて上げましたよ、」彼女は寢臺の裾へそれを置きながら曰つた。

彼が食べ終へて、着物を着るあひだ、彼女は窓のそばにすわつてゐた。

「まあ、いゝ朝のお天気なこと、」彼女は獨りごとするやうに曰つた。「あの太陽のきら／＼と光ること！こゝから廣い平地があるのだけれど、まあベツトナの家は残らずはつきりと見渡せますよ、そして、緑の葡萄畑の真中にイゾラ・ロマネスカが川のなかに島のあるやうに一つ離れてゐるのがよく見えます。あれ、どの煙突からもしづかな煙がまつすぐに上つてゆく——まるでお寺の香爐からたつやうに。あゝ、フランチェスコや、今朝のやうなときには、天も地もまるで祭りの日のお寺のやうに美しい、ね、さうではないか、ありとある被造物はみな神様をほめたゝへて、神様を愛して心から感謝してゐるのですよ。」これらの言葉にフランチェスコはたゞ沈黙をもつて答へた。

けれど暫らくして彼は着物を着替へつゝじつとしたとき突然に曰つた——「まだ元氣がない！」



母は話の題と調子を變へた。

「わづらつてみたあとはだれでもさうなのですよ、」彼女は生き生きと曰つた。「床に寝てゐるあひだは、どんなことでもできるやうな氣がしてゐてもね、床から出て立つてみるとさうぢやないのよ。私だつて覺えがあります、だから私は氣をきかしておまへに杖をもつてきてあげましたよ。」

さう曰つて彼女は戸口まで戻つて、象牙の把手のついた美しい研かれた杖をもつてきた。まもなく母と子はともに病室を去つた。

\*

半時ばかりたつたとき、フランスはひとり故郷の市門のそとに歩み出た。そのまへに彼と母とはいくつもの室々を見回つた。二人が店まで出て行つたとき、店のものは心をこめてそして悦ばしげに彼らに挨拶した。「お早うございます、マドンナ・ピカ！ お早うございます、若旦那様、フランチェスコ、お芽出たうございます！」けれどフランスは室々や店のなかよりもつと遠くへ、家のなかよりもつと遠くへ行かなければならなかつた——彼はそとへ出なければならぬ、野や葡萄畑に、自由な空に、そしてひろい豊饒な平野のはるかな眺めに再會の挨拶をするために。

そして今彼はモンテ・スバシオの麓に沿うてフォリーニへゆく道のうへに、市門のそとに立つた。こゝに彼は立ち止つて、杖に身を支へて四方を眺めた。たゞちに彼のまへには葡萄畑が連つてゐる。葡萄樹は

各のの間に蔓を美しくうねらせて、重い紫の房は大きい葉の下に垂れてゐる。まもなく葡萄摘みと醸造の美しい季節が来る。さらに遠く丘の下に傾斜にそつて橄欖の茂みが平野へと連なつて、平野のうへに銀灰いろの絹の覆ひをかけてゐる。こゝかしこに白い家々や農夫の小家が、ま晝ちかくなつて地からたちそめる霧の覆ひの下にあらはれた——そのもつとも遠い家々は小さい白い石よりも大きくは見えなかつた。

フランスはそのすべてを眺めやつた、けれど彼が待ち設けてゐたその心持はなかつた。かつて風景の柔和な色彩と、あかるい空を劃る山々の織こまかい線の眺めが彼に感じさせた、かの溢るゝばかりの歡こびはもはや彼から去つた。それは恰かもそのときに若々しく力つよく胸に跳つたかの心が、にはかに老いたかのやうであつた——彼にとつては、彼はもはや永しへに、何ごとかに楽しむことができなくなつたことを感じた。日なたにゐると彼はあまり熱く感じた、そして彼は一つの壁のかけに退いた。——日かげではまたあまりに冷たく感じた、そして彼は再び日なたに出てきた。丘を下りてゆくにも彼の膝は疲れた、彼はまた空腹を感じた、そしてあこがれるやうにおいしい晝食と善き一盃の葡萄酒を夢みてゐたのであつた。そのとき彼のうちには一つの心地が戦慄のやうに過ぎた、彼の青春は過ぎてしまつた——そして彼がかつては永しへに彼に歡こびであると思つた事物がいまは彼にすこしの悦びをもあたへなくなつた。いつまでも奪はれることのない寶のやうにしてゐたものはみな、日の光、青い空、そして緑の野へ——すべて彼が回復期のものうい日々と夜々に、流された王がその領國を慕ふやうに、苦しいまでにあこがれたものすべ



て——それはみな彼の手にとつて見れば、今は價なきものとなり、朽ちて、灰となつてしまつた、それはさながら「棕櫚の日照日」のホザナの棕櫚の葉が焼かれて灰になり、それを司祭たちが聖灰水曜日ドマニカデレパルマに信徒たちの頭に散らして、悲しいそしてまことな言葉、「人よ、忘る勿れ、汝は塵の身にして塵へと汝はまた歸りゆくを、」をいふに似て。

あゝ、塵、塵、そしてすべて塵にほかならなかつた——塵とそして灰、うつろひと死と、無常と空しさ——あゝ、みな空しさ！

フランススは永いあひだそこに立ちどまつて、そして茫然としてゐた——彼は存在するものが目のまへに褪ろひゆくのを見る心がした。しづかに彼は歩みをかへして、重々しく杖にすがりながらアツシジへ歸つて行つた。

「われは爾のふむ道に荆棘を布かむ、」主が豫言者によつてかく告げ給ふたその日が彼に來たのであつた——不可思議な手が宴の廣間の壁に死と無常の言葉を記すその日が。

けれど、回心のみちに最初の歩みをすゝめた人のたれもするやうに、青年は彼自らの過ちと同じくたゞちに他の人々の過ちのことを思つた。彼の心のうちにいかなる變化が起つたかを見るとともに、彼の思ひはうちつれてこゝに立つて美しい山河を愛でた彼の友だちのうへに及んだ。「亡びゆくものを愛する彼らは愚かなものではないか」彼は心のうちに一種の優越の心をもちながら、町の入口の方へ歩いて行つた<sup>1</sup>。

<sup>1</sup> Thomas de Celano. Vita prima cap. 1. 2, St. Bonaventura. Legenda Major cap. 1. 2, Acta sanctorum. Oct. II, p. 563) の心理的敘述の材料は、單純に、しかしながら十分明瞭に以上のものと見えてゐる。

## 二 幼時、青年時代

フランチェスコ——汎くはフランススと呼ばれる——はその朝あたかも滿二十二年の齡になつた、彼はアツシジのもつとも富める家の一つ、織物商ピエトロ・ディ・ベルナルドネの長子であつた。

家族はもとからのアツシジのものではなかつた——ピエトロの父ベルナルドネはルッカから來たもので、織匠と商人の家で名だかいルッカの一族、モリコニ家に屬するのであつた。フランススの母のピカ夫人はそれよりもまた遠い生れであつた。セル・ピエトロはあるとき商用の旅ですぎた美しい、物語に富んだプロヴンスで彼女と相知つた、そして彼女をば彼の花嫁としてイタリアのスパシオの山のふもとの小さい町へ伴ひかへつてきた。

アツシジはイタリアの最も古くからある町の一つである。プロレマイオスの書籍にさへもそれはアイシジオンと呼ばれてゐる、そして紀元前四十六年にラテン詩人プロペルチウスはそこで生れた。基督の教へはこのあたりへ聖クリスポリトッストッス(クリスボルド)によつてまづ弘められた——彼は、傳説によれば聖ペテロ



の弟子であつた、またスポレトの僧正聖ブリチウスは、紀元五八八年に聖使徒の君の命によつて、聖クリスボルドをゾットナ、今のベットナの僧正に任じて、南はフォリニから北はノチュラまでのあひだを管らせたと曰ひ傳へられてゐる。皇帝ドミチアヌスの迫害に逢つて、聖クリスボルドは殉教者の死を受けた。同じ運命はのちになほ三人のウムブリヤの傳道者たち、聖キクトリヌス(二四〇年ころ)、聖サビヌス(三〇三年)そしてアッシジの導師聖ルフィヌスに及んだ。

をはりに擧げた一人のために、アッシジには十二世紀の半ばにサンルフィノの美しいロマネスクの禮拜堂がグッピオのジョヴァンニの設計に従つて建てられた、そしてそれが完成したとき、僧正の住家のかたはらにある極めて古い會堂——サンタ・マリア・デル・エスコヴドに代つて、それは市の大寺院となつた。

このサンルフィノの寺に今もなほ存するロマネスクの洗禮の泉は、セル・ピエトロとマドンナ・ピカの初子が一一八二年の九月のある日(それは二十六日であつたと曰はれる)聖とき洗禮の水を受けたところである。

ある十五世紀より古くはない傳説には、マドンナ・ピカの産の時がきても、嬰兒は容易に生まれることなういたく苦しんだと曰つてゐる。そのとき一人の順禮は戸を敲いた、そしてそれを開いた人に曰ふには、産婦がその美しい寢室を去つて、そして厩の一隅に藁を布いて臥すまでは、その見は生れることができなう。それは行はれた。そしてその移徒が果されるとまもなく、せつない母のうめきは止んで、彼女は一人の

男子を生んだ、そしてその最初の搖籃は、救世主のそれと同じやうに、厩のなかに藁をみたした一つの秣槽であつた。

十四世紀のをはりに書いてみたビザのバルトロメオは、その著した“*Tiber Conformitatum*” にイエスキリストと聖フランシスの類似を求めるところから出發したのであるが、彼はこの話を知らなかつた、けれどそれは彼の著書の目的には全く著しく適してゐたであらう。また一方には、ベノツォ・ゴツォリは一四五二年にモンテファルコなる聖フランチェスコの寺の壁に、厩のなかの誕生を畫いた、そして一六一三年にアントワープで“*Historia Seraphica*”を著したセドゥリウスは、彼がアッシジでその厩が禮拜堂になつてゐるのを見たといふことを語る。

なほ今日でもこの堂はアッシジにある。それはサン・フランチェスコ・イル・ピッコロと呼ばれて、その扉のうへにはつぎのやうな銘が讀まれる。

*Hoc oratorium fuit bovis et asini stabulum*

*In quo natus est Francisus mundi speculum.*

「この堂は牛と驢馬の厩なりき、このなかにて世の鏡フランシスは生れたり。」

この堂は今聖フランシスの父の家の示されるところや、十七世紀以後は新寺院がバロック風の壁を聳やかしてゐるところから遠くない。ボランディストたちは、その堂がもとピエトロ・ディ・ベルナルドネの家の一



部であつて、のちに家族はまだフランスの幼かつたところに、外に移つたのであらうといふ説をだした。あるひは堂の名、「小さきフランス」がこの傳説の成りたつ動機となつたのであらう。

ワッディングによつてはじめて與へられた他の傳説も既に於ける誕生のそれと同じ性質のものである。これによれば、かの厩への移徙について効果ある助言をした順禮はまた誕生のちもなく、嬰兒の洗禮のときには寺にきてゐて、そして兒を洗禮泉から抱きあげた。いまなほサン・ルフィノの寺には、そこを訪れる人に足の痕に似たものの見いだされる一つの石が示される。その石を見せる案内者は、その順禮

——或は順禮の姿した天使は、聖フランスが洗禮されたときこの石の上に立つてゐたと語るのである。

この話が芽をだした種は、すでに「三人の兄弟の話」のある寫本に存在する話であることは疑はれない。

それにはかく語られてある。生れたばかりのフランスが洗禮されたとき、一人の順禮が来て、戸を敲いて、そして幼兒を見ることを乞うた。戸を開いた婢女は勿論この願ひを拒んだ、けれど見しらぬ人はこの願ひの果されぬうちにはこゝを去らないと曰つた。セルビエトロは家にゐなかつた、そして人々は家の女主人に始終を語つた。すべての人が驚くまへに彼女が順禮の乞ふごとくせよと命じた。幼兒はそこに出された、そして旅人は幼兒を見たとき、老つたシメオンが神の嬰兒を抱いたやうに兩手にかきあげて、そして曰つた、「けふこの町には二人の子が生れた、その一人、即ちこの男の子は世界のうちで最も善き人々の一人となるであらう、けれど他の一人は最も悪しき一人であらう。」<sup>1</sup>

ビザのバルトロメオはこれに附け加へた、順禮が小さき子の右の肩のうへに十字を畫いて、そして乳母にこの子をよく護るやうに誨へた、それは悪魔はその生命を取らうとしてゐるからである。そして旅人がこれを謂ひをはつたとき、彼はすべての人の目のまへで消えうせた。

洗禮に於てセル・ビエトロの子はジ・ヴァンニの名を受けた。子の生れたとき父はフランスの旅に上つて家にゐなかつた。そして彼が歸つてまづ爲したことの一つは長子の名のジ・ヴァンニを改めてフランチェスコとするのであつた。この名はそのときまだ稀であつた、とは曰へ決して新奇なものではなかつた。それはアシジのすぐ近在に、サン・サルヴトレ・デリ・パレティ(今のカザ・ガルデイ)から町の西側を経てサン・ダミアノに終る街道の名、*サン・フランチェスコ*として用ゐられてゐた。この街道の名は法王インノケンツ三世のある文書にも見えてゐる、その公布されたのは一一九八年五月二十六日である、そしてフランスはわづか十五歳で、街道に彼の名をつけるほど名高きはなかつたときである。何故ビエトロ・ディ・ベルナルドネが彼の子の名を更めたか、その理由についてさまざまの憶測が出た。プロヴンスから歸つてきたばかりの商人のフランス好みはその重なる動機であつたに違ひない。彼はその子の氣風も作法もほんとうのフランス人らしくありたいと思つてゐた。彼の妻によつて選ばれた名をつけることに反對した考へもいくらかそれに與つてゐたのであらう。聖ボナゼントゥラはジ・ヴァンニといふ名は母によつてつけられたことを明言した。「駱駝の毛衣、洗禮のヨハネは望まない、私は品の好いフランス人が欲しいのだ、」父が名を改めさせたときの



考へはこんなものであつたらうと思はれる。

ほかに、その「フランス人」といふ名は彼が生ひたつところにフランス語に巧みであるためにつけられたのであると主張する人もある、けれど彼がそれを決して誤りなく話すことができなかつたのを見ると、それほどまで巧みではなかつたであらう。

いづれにしても青年は、やくからフランスの言葉に親しくなつたのである。彼はまたラテン語を學んだ彼の教育のこの方面は、近くにあるサン・ジュルジの寺の僧たちによつて爲された。

聖フランスの最初の傳記者、チュラノのトマソはこの時期に於ける教育についてはなほだ心もちわるき描寫をした。彼の語るごとくならば、兒童は乳を離れるや否や、年長の人々によつて不道理なことを曰つたり爲たりするやうに誘惑された、そして人々に對する氣がねからたれも敢へて正直に振舞ふものはなかつた。そしてそのやうな悪い芽生からは善い健全な木の生長することのできないのは自然であつた。腐敗した少年時代のあとには放埒な青年期が続いた。基督教は若い人々には名のみであつた、そして彼らのあらゆる功名心は唯一つの方向に、彼らのあるよりもなほ悪しきものと思はれやうとすることに向つた。<sup>2</sup>

チュラノのトマソは詩人でありそして修辭家である、彼の言明にどれだけの重さが加へられるべきかを知るのは容易いことではない。あるひは彼は己れの少年のときの故郷アブルツィのチュラノに於ける状態のことを思つたのであらう。他の傳記著者のうちではたゞスパイエルのユリアンが同じ筋で曰つてゐること

があるだけである。そしてそれはすべてトマソのから寫しとつたものであつた。

早くからフランスは、今でもイタリアに行はれてゐる慣はしに従つて、店に出て父の手助けをはじめた。まもなく彼は商賣に適してゐる才能を示した——「彼の父よりもなほ敢爲に」と上に引いたスパイエルのユリアヌスはこのことについて曰つてゐる。彼は熟練した敏捷な商人となつた、そしてたゞ一つの特徴が缺けてゐた——けれどこれがはなほ根本的なものであつた——彼は儉約でなかつた、否、彼は寧ろ全くの浪費者であつた。

この浪費の原因を理解するには、この若い商人の生ひたつた時代を一瞥する必要がある。

それは十二世紀の終りと十三世紀のはじめであつた、換言すれば、それは騎士と騎士道の花ざかりの時であつた。全ヨーロッパの理想はプロヴンスの戀愛の宮廷やシチリアのノルマン諸王のもとに榮えたことき騎士とその生活であつた。イタリアに於てもエステやゼロナやモンテフェルラトの小さい宮廷はフィレンツェやミラノの大きい共和市と競つて、いづれが最も花々しい試合や競技を催ほし得るかを争つた。フランスの名だかい巡歴詩人<sup>トルストゥル</sup>たち、ランボード<sup>ドゥクエイラ</sup>、ピエール・ギョーダ<sup>ル</sup>、ベルナルド<sup>ドゥワンタドル</sup>、ペロル・ドール<sup>ニユ</sup>らは宮廷より宮廷に、祭りより祭りに、終りなき旅をして半島を隈なく巡つた。いたるところにプロヴンスの「武功の歌」<sup>シャンドン</sup>はさゞめき、寓話や譚歌は歌はれ、いづこにもアーサー王と圓卓の騎士の歌は聞かれた。小さい町々に於てさへも戀愛の宮廷はつくられて「樂しき學術」<sup>ガチンツア</sup>に浮身をやつした。<sup>3</sup>



ピエトロ・ディ・ベルナルドネの「フランス風」な息子も、あたかもあらかじめ定まつてみたかのやうに、この運動に擒はれた。彼は父のごとき、儉約な満足しやすき、金を得ることのみで足りるイタリア人のみではなかつた。フランスの血管にはまた生を樂しむプロヴンスの血が流れてゐた——彼はその金によつて快樂を得なければならなかつた、彼は金をば飾りと悦びに換へようと欲した。

かくてフランスはその地のもつとも富める青年として、自から、町の今日ならば交際場裏の中心と曰はれるべきものになつた。彼は金を儲けることは巧みであつた、けれどそれを使ひはたすときには極めて無謀であつた、とチュラノのトマツは記した。彼がまもなく一群れの友だちをアッシジのみならず近くの村から彼のまはりに集めるやうになつたのはふしぎではなかつた、彼はのちにかなり遠いグッピオの町にまで一人の友を求めたことがあつた。

これらの青年たちが一しよに集まつたときに何をして時を費したであらう？ 今日に至るまでのすべての青年たちと同じやうに——ともに會食して、よく食ひ、よりよく飲み、そしてはては高まつた元氣をもつて町の道を聲のかぎりをはりあげて歌ひながら、住民の眠りを妨げつゝ、互に腕をくみあはせて練つてあるくのであつた。嚴格なチュラノの小さきフラテは我々のためにこれらの粗放な青年たちの罪を數へた——「彼らは戯言を曰ひあひ、頓智に富み愚かなる話のみをして、そして柔かい女のやうな衣服を着てゐた」——著者は二三年まへの五月のある日、サビノの山なるスピャコの五月の日を思ひ出す。私はサグロスベコ

の聖ベネディクトゥスの名だかい隠栖の洞穴とその聖スコラスチカ僧院をおとづれた。私はマンデラを経てローマにゆく汽車で歸るまへに路傍の宿屋オステリアへ入つて簡單な食事をした。

私の食事は一つの高い岩の上に位置を占めた園亭のなかで供へられた。そして私は園亭の藤格子の開いたあひだから一つの無花果樹の畑のうへに、黄金いろの太陽にてらされた潤い葉の梢を眺めわたした。無花果の樹々のあなたに私は谷の方を眺めた、そこにはアニオの川は銀いろに光つて青黒い岩の岸のあひだを走つて行つた、そして遠くはなれてスピャコの町の誇らしい尖塔は城のやうに山の頂に立つてゐた。

この晴れやかな、誇りやかな五月の緑りと太陽の歡ばしい周囲のなかに私と同じ宿屋で午餐をしてゐた一群れの若き人々の集まりがあつた。一つの開いたエランダのうへからは山々のあひだに何よりも美しい眺めのあるところに、彼らは一つの長い卓子を据ゑさせた——私は輝やいてゐる白い布や、傲然とした壘や、赤葡萄酒の杯や、そしてマカロニの大きな皿をもつて往來する給仕などを見てゐた。そして笑ひさゝめく聲や歌ははじまつた、けれど決して制しがたき叫喚とはならなかつた、そして彼らのなかからは己が席に立ち上つて演説をするのがあつた、話のあとではコルネットが奏でられた。

私はひとり思つた、ピエトロ・ディ・ベルナルドネの子が笏を手にして王として、祝ひのあつまりの王、一日と一夕の王となつてゐた宴はこれのやうに、イタリア風に禮儀正しきものであつたらう。そしてもしもかのチュラノの老いたフランスカンが北方の青年の荒々しい詩味を失つた酒宴や、またドイツの美神の子



たちの "Salamander-Heim" に通じてみたならば、私は思ふに、彼はこれらの宴——そのたのしきはウムブリヤの丘に熟す黄葡萄酒のやうにやさしい、清らかな宴に非難をするにももつと手柔かであつたらう。けれど彼はそれを知らなかつた、そしてそれ故に彼は我々にフランスはそれらの陽氣な若者のなかで最も悪しきもの——他のものを導びきそして誘惑した人であると語るのである。アッシジの陽氣な青年らは宴から宴に赴いた、そして夜は彼らが町々を過ぎて琴やギョラにあはせて歌ひながら、あたかも巡歴詩人か旅藝人のさまよふ一群れであるかのやうにして行くのが聞かれた。まつたくフランスはプロヴンスの「樂しき學術」を好むあまりに、はては巡歴詩人の二色に染めわけた衣裳をつくつて、友だちのあひだではそれを着てみたくらゐであつた<sup>4</sup>。

すではやくからフランスの父はその子を商賣の助手にしてゐたらしかつた、とにかく、若者は莫大な額の金錢を自由にすることができた。彼の儲けたものはみな快樂のために費された、時として見かねた父は黙つてゐることはできなくなつた、「汝は貴族の子みたやうだ、だれも汝をこんな質素な商人の子だと思ふものはあるまい。」けれどそのとき目の生ものはだれもフランスのしてゐる生活を咎めようとしなかつた、そして近隣の女房たちが悪氣なしにマドンナ・ピカに向つて彼女の粗暴な子息のことを告げたときにも、彼女はやさしく斯う答へるばかりであつた、「私は希望をもつてゐます、彼でもやがては神様の子供になりませうよ。」

彼がなにか眞の悪しきことをはたらいたといふことはできない、彼が異性に對する關係についても實に模範的であつた、彼のまへではたれも慎しみなき言葉をいふことのできないことは、友だちのなかにもよく知られてゐた。もしそのやうなことがあれば、彼の顔は直ちに眞摯な、殆ど冷酷な色を帯びて、そして彼は何も答へなかつた。すべての心の純き人々のやうに、フランスは人生の繁殖の神祕には大なる畏懼を抱いてゐた<sup>5</sup>。

彼は、全體としては、彼のふるまひに於いて中庸を得てゐた、彼の兩親のころをいためることはたゞ一つあつた——それは彼があまりに彼の友だちのことにまかせて、家で食卓にすわつてゐるときでも、彼らから使ひが來れば、彼は飛んで立つて、食事をそのまゝにして、そして歸つてこないことであつた。

一面に於て彼は賞讃すべきところがあつた、これは貧民に對する彼の心づかひであつた。彼の散財は彼らにも及んだ。彼は、乞食に與へる金は一錢もなくしてシャンパンの酒宴には悦んで百圓を費す普通の社交の人ではなかつた。彼の考へかたはつぎのやうであつた、「もし私が友だちのために金を惜しまない、否とめどなく費つたところで彼らが「ありがたう」といふか、でなければ返禮に他の酒宴に招くくらゐのことならば、喜捨をするといふことはもつと理由のあることでなければならぬ、それには神様が自ら百倍にして酬いるとお約束なさつたではないか！」ここにはたらいてゐるのは中世の勢力ある生活の思想であつた、その天台的に文字どほりな、ナイヴな聖書のことばの解釋、「これらわが小さき兄弟に汝のなせしことは



汝はわがためになせしなり。」フランシスは中世のすべてのものが知つてゐたやうに、冷たい水の一杯も主の弟子の一人に與へられたときに、主によつて支拂ひされず酬いられないことを知つてゐた。

それ故、ある日店には多くの人々が集まつて、そして彼がその人々に應接するのに忙しかつたとき一人の乞食を追ひやつたことは、心を貫ぬいた一つの痛みであつた。彼は心に謂つた、「もしこの人がだれか私の高貴な友だちのところから來たのであつたならば、某伯爵か某男爵からよこされた人であつたならば、彼はきつと望むだけを受け取ることができたであらう。(友だちはフランシスから金を借りることがあつた。) 今彼は諸の王たちに王たるものより、諸の領主たちの主たるものよりここへ來た、そして私は彼を手を空うして去らしめた。私は彼に罵りの言葉さへ與へた。」そして彼はその日から彼に神の御名に於て *Per amor di Dio* (とイタリアの乞食は今でも曰ふのである) —— 乞ふものにはだれにでも必らず與へようと決心した。

貧しきものに對する親切の一つの結果は恐らくは、これ、ボナエントラの語るごときものであつたであらう。村の名物の一人、ある白痴かまたは全くの狂人が町や横道をさまよひまはつて、いつでもフランシスに逢ふたびに彼の上衣を脱いで、それを地のうへに布き、若き人にその上を歩んで行くことを乞うた。あるひはこれはアッシジの町々をさまよつてはたえず呼んで、*Pax et bonum!* 平和と幸福をと呼んであるいたふしぎな人、中世に於て多くあつた漂泊の痴人の一人と同じものであつたかもしれぬ。フランシス

の悔い改めののちこの呼ぶ聲は止んだ、それは説話のなかには偉大な聖者の來るまへの一種の先觸れとして理解された。<sup>6</sup>

最後にフランシスは自然に對して生き生きした感情を授けられてゐた。今は文學に於けると同じく生活にもまつたく先天的のやうになつたこの情緒は、一世紀のちにプロヴンスに出たかのペトラルカの著作のなかに、古代以來はじめて文學的に表現されるを得たそれである。けれどプロヴンスの血のまじつたフランシスには、それはすでに完全に發達してゐた。「野の美しさ、葡萄園のはなやかさ、すべて目を樂しますもの」は彼を悦ばせたとチェラノのトマソの記述はいふ、<sup>7</sup>「そしてこの情緒をフランシスが母から傳へたものゝ一部として考へても誤まりはないであらう。この情緒はそれみづから彼の人格の一つの本質的な部分となり、そしてたゞ悔い改めに先だつたたましひの危機にあつて一時曇らされてゐたものであつた。すべて育つべき善きものゝつねとして、彼の性格のこの一面も刈られなければならなかつた、まつたくその根にいたるまでも、——けれどそれはたゞもつと美しい富める冠を戴くために。何となれば、ドイツのある神祕家の曰つたやうに、「まづ神の愛のために、被造物を捨て去り、それは彼のために死に去り、彼はそれのために死んだものでなくては、たれも被造物に對するまことの愛を所有することはできない。」

1. *Legenda trium sociorum* cap. 1.n.2. (Vatican 寫本 7339.)

2. *Thomis de Celano, Vita Prima* I. cap. 1.



3. Paul Sabatier... Via dev. S. Francois. 32 ed. p.10.
4. Legenda trium sociorum cap. I, n. 2.
5. Ditto, cap. I, n. 3.
6. St. Bonaventura... Legenda major cap. I, n. 2, Tres scilicet VIII, 26.
7. Celano, Vita prima I, cap. II.

### 三 時代の歴史

フランスは戦争の時代に生ひたつた。皇帝は法王に、公侯は王に、市は市に、庶民は貴族に向つて争つてゐた。フランスがまだ子供であつたころフリードリヒ・バルバロッサはレニャノ(一一七六年)の戦ひに法王の後援をもつてゐるロンバルディア諸國に破られて、彼らの克ちえた特權をすべてコンスタンツの和議(一一八三年六月二十五日)に於て彼らに與へなければならなかつた。バルバロッサのつぎに立つたハインリヒ六世(一一八三年より一一九六年)はそのあひだに再び帝權をイタリアに確立した、アッシジはすでに一一七四年にドイツの王室祕書官大僧正クリスチアン・フォン・マインツによつて支配されてゐた、けれど一一七七年には再び固有の議員とそして共和的な自由を得てゐた、このときになつてそれはまたも自治の特權を失つて、そして帝權によつてのスポレトの大公爵兼アッシジの伯爵、イルスリンゲンのコンラードのま

に跪まづかなければならなかつた。

ハインリヒの死んだのち一年を経て、インノケント三世は法王の位にのぼつた、そしてこの力つよい教會の大公は直ちにイタリア諸市のことをすべて己れの強い手に收めた。コンラード大公はナルニに赴いて自らを法王にさげなければならなかつた。そして彼の不在を利用して市民はたゞちにドイツ人の「ツッキンダブルヒ」を襲つた、その城は市を嚇かすやうにサツ・ロツの頂に立つてゐた。城は攻めとられて、全く破壊された、そして法王よりの密使が聖ペテロの所有としてそれを引き取りにきたときにはもはや廢墟のみとなつて、今でもアッシジを見下すその姿になつてゐた。この果敢な行動の惹き起す結果に備へるために市民は町のまはりに城壁を築くことに決した、すべての人は奮つて労働についた、そして信じがたいほどの短かい期間にアッシジの人々は城壁と、今に至るも旅人にかめしく映ずる物見の塔門とを築いた。このときフランスは十七ばかりであつた。そして彼がのちにサン・ダミアノやボルチウクラで働らいたときに役に立つた石材や漆喰の使用の知識はこの時に得たのだといふことは、サバチエも云ふやうに、決して理由のない憶測ではない。

仕事の大部分、即ち崩したり築いたりすることは勿論下級の民たち——一般の習慣で *Minors* と呼ばれたもの——によつて爲された。かくて平民は彼ら自の力を意識した、そして外敵たる壓制的なドイツ人を倒したのち、彼らは内部の敵、市内の小さき壓制者たち、即ち市のかなたこなたにあたかもものちのフラン



ダースの市々の「ステーン」のごとく城のやうに築いた住宅をもつてゐる貴族らに向つて抗つた。一つの階級戦争はこゝに破裂した、貴族の家は圍まれ、その多くは焼かれ、そして貴族の滅亡は避けがたく思はれた。そのときアッシジの貴族らはこの窮迫した場合に、アッシジの舊敵に——近隣にある強大なベルジャに救ひを乞うた。アッシジの貴族よりの使節らほしベルジャが救ひに来るときには、市に對するその優越なる力を承認することを約した。

ベルジャの共和市はそのときその権力と大きさの最高點にあつた、そしてアッシジをその配下とするに適したこの機会を失はなかつた。その軍隊は圍まれた貴族らの應援として戰場に進んだ。アッシジの市民は勇氣を失はなかつた、貴族のうちの幾部分が先祖の町に對する忠義を存してゐるのと共に、市民はベルジャの兵と二つの町の間なる平地で、サン・ジョヴァンニの橋で會戦した。勝利はベルジャ人に歸して、多くのアッシジの戦士は捕虜となつた——そのなかにはフランススもゐた。彼の容貌の氣高いために、若い商人の子は他の市民と同じ獄には入れられなかつた、あたかも多數の古代のフランスの町々でかの *les bourgeois honorables* のために設けた法律であるやうに、彼は貴族のものと同じ運命を願つことを許された。

ポンテ・サン・ジョヴァンニの敗戦は一二〇二年のことであつた、ベルジャの囚はれは一年のあひだつゝいた、そしてそのあひだフランスは共に囚はれてゐる人々を彼のたえざる快活さをもつて驚かした。たとへ樂しくあるべき理由の多くないときでも、彼は常に歌つたり戯れたりする聲が聞かれた、そしてもしも他の人が嫌な顔をして、あるひは怒つて彼を咎めるとき彼はたゞ答へた、「あなた方は大きな未來が私を待つてゐることを知らないのですか、そして全世界がひれふしそして私に跪拜するであらうといふことを？」これが彼の運命の固い自信を語つた最初であつた、輝やかしき未來が彼のものであるといふしづかな信念はこの青年時代に於ける聖フランスにことに著しかつた。

一二〇三年の十一月、平和は二つの争つてゐた黨派のあひだに結ばれた。條件としては、アッシジの市民はその貴族の所有財産に加へた損害を賠償することゝ、そして貴族は市の許可なくしてはいかなる同盟をも結ぶことができないことゝであつた。フランスは今他の捕虜とゝもに許された、彼はそのあひだで、ただ楽しさの使徒であつたのみならず、また平和の使ひの役をつとめたのであつた。囚はれた戦士のなかにある一人はその傲慢と頑愚のためにすべての人から疎まれてゐるのがあつた。このむづかしい人を避けることをせずして、フランスは大いなる忍耐をもつてその伴侶にならうとした、そしてこのことは成就して、つひに幽囚の終るまへに、頑な囚はれ人は變つて、もと彼が自ら距てた友の群れに再び迎へられるまでに至つた。

長いあひだ貴族の囚はれ人たちとともにゐたことは若い商人の子の心に貴族の生活とそのふるまひに對する愛着をかたくしたやうに思はれた、そしてそれは囚はれののちの年(一二〇三——六年)には目に立つてきた。いまや彼はプロヴンスの「樂しき學術」の徒となつた、彼は宴樂や遊興の渦まき身身を投じた、そ



して二十三年に彼を死の門に近く導いた彼のいたつきははじめて彼をその渦巻から救ひ出した——けれどもなほ全たくではなかつた……

#### 四 フランシス軍人となる

何となればこのときとなつたけれど、彼はまだ悔い改めのみちには遠く離れてゐた。彼は己がたましひの空しさを感じた、けれど彼は何ものも、それを満たすべきものを見出すことができなかつた。彼の病ひの快癒は進んで、彼が再び力づくで、それに従つて彼は現世的な生活に歸つて、そして病ひのまへと同じみちに再び歩みを入れた。たゞ一つの差別は、彼が今なすつゝある生活に彼はすこしも悦びを感じなくなつたことであつた。彼の心には一つのさだまらぬ不安があつて、すべての平和は奪はれた、それは彼のたましひにいつまでも彼を促してやまない刺であつた。そしてめざましい偉業やふしぎな冒険や、遙かな異國で奇怪な成功をすることなどを夢みるが多くなつた。

そしてふたゝび騎士の生活は彼のまへに彼のたましひのなにとなきあこがれがひたすら高きものに達しやうとのぞむのを満たすたゞ一つのものゝやうに見えてきた。少年のときから彼はアーサー王や圓卓の騎士の物語に親しんでゐた。彼もまた聖盃の騎士の一人とならう、彼もまたひろい世界に赴いて、そしてい

と大きなるもの、いと聖きものゝために彼の血を捧げよう、そして——彼は決してこのことを忘れなかつた——彼は永へに死なぬ譽れを戴いて故郷へ歸ることができやう。

あたかもこのときにあつて、皇帝と法王のあひだに永くたえなかつた争ひは一つの新しい場面に展げられた。皇帝ハインリヒ六世の未亡人は法王インノケント三世に帝嗣、後のフリードリヒ二世の後見たることを委ねた。死んだ皇帝の將軍らのなかにももつとも元老である一人、名はマルクワルトといふものはこのとき、彼こそは遺言によつて當然王國と王位の後見たるべきものであることを主張した、けれどインノケントは己が計畫を棄てる心はなかつた、そして彼は兵器に訴へて彼の利益を護らなければならなかつた。戦ひは南イタリアに起つた、即ち皇帝の寡婦コンスタンツアはノルマン王家の相續者として同時にシチリアの女王であつたからである。インノケントは久しいあひだ敗戦に敗戦を重ねて、苦しみのあまりつひに彼の軍をブリアンヌの伯爵ワルテル三世に委ねた、そしてワルテルは彼のノルマン家なる妻アルビニヤの名に於てタレンツムの領有を要求した。この赫々たる將軍はドイツ人を連まに破つた——カプアに、レッツェに、バルレッタに——そしてその名はイタリア全國に唱はれて、ひろく國民の元氣を鼓舞した。ドイツ人らはいづこに於ても憎まれ、シチリアでは、ドイツ人といふことばは粗暴、野鄙、不義を意味するに至つた。フランスの巡歴詩人ピエル・シュ・ダルはロンバルディアをさまよつてドイツ人に對して諷刺的な歌を歌つた——「たとへ貴族となるとてもフリースランドには棲むを願はじ、かしこに人の語るをきけば、鵝鳥



のむれてさわぐごとく、人の語ることばとは思はず。「イタリアにありとある若き、屈せざる、貴きものは外邦の羈絆に反抗して起つた、そしてワルテルの名は法王に祝福されたる軍旗のごとくに、奮ひつた民衆のうへに翻へつた。」

この國民的なインスピレーションはアッシジにも及んだ、そこでは一人の貴族は武装を整へて、わづかな一隊を率ゐてアプリアにワルテルの軍に投ずるために行つた。これを聞いたときフランスには燃ゆるやうな昂奮が湧いた。こゝに彼がかばかり永いあひだながつてゐた機会がきた、こゝに彼は捕へなければならぬ利那がきた、今、然らざればつひに時はなかつた——アッシジの貴族はフランスをその軍に伴ふであらう、そしてワルテル伯爵は彼を騎士に叙する！

あらゆる熱心をもつてフランスはこの計畫を實現することを考へた。彼は人生の新しい、そして望むらくは美しい生活の時期のために準備をするときに覺えるかの漲るやうな歡こびに囚はれた。一種のWanderlustは彼を囚へた、彼は町をあゆむといふよりも走るやうにして行つた。彼の友だちは彼の平生の元氣よさが過度な高さのほつたのを見た、そして彼らがその謂はれを問へば、彼は目を輝して答へた、「私は知つてゐる、私はいまや一人の大いなる公侯になるべきものである。」

曰ふまでもなく、若い商人の子が軍に赴く用意には何物も惜まれなかつた。彼の傳記者の一人はいふ、彼の衣服はすべて珍らしく、また價たつときものであつた。これは浪費の好きな、華美を愛する富める若

者から期待さるべきことである。けれどまた一つ彼にまつたく似合はしく見える一事は、つぎのごとくである、恰かも出發のまへにあつて、フランスは共に旅に出る伴侶たちの一人なるある貴族に逢つた、そしてその友が貧しさのために相應な装ひや武器を用意することができなかつたのを見て、フランスは高價な彼の装ひをすべて與へて、その代りに貴人の貧しい武器を得た。

かくて彼は目のまへにある新しい生活に心をみだされてゐた、彼は夜な夜な戦ひや劍戟を夢みた。その貧しい騎士に對してそのやうに情深くした日の夜にあつて彼を一つの夢がおとづれた、そしてその夢は彼にとつては他のいづれよりも意味深く思はれた。たとへば、彼は——恐らくは暇乞ひするため、父の店に立つてゐた。けれどつねには床から天井まで棚ごとく充滿になつてゐる巻絹や商品のかはりに、そこには何處を見ては輝やく楯や、磨かれた槍やきららしい甲冑があるのを見た、そして彼が驚き怪しんでゐるとき彼は聲をきいた、「これはすべて汝と汝の戦士のものである。」

フランスがこの夢を吉兆と考へたのは當然のことであつた。そしてある晴れやかな朝彼は馬に跨つて他の小さな一隊とともにアプリアに向つた。道は今のポルタヌオヴを経てフォリニョへ、そしてフォリニョからスポレットに向つた。こゝで彼らはフラミア街道に達した。街道はローマへ、そして南イタリアへの道である。そしてこゝにフランスは彼の戦士となる企ての目的に殆ど達したのであつた。

そのとき彼をすでに一たび病ひの床に置き、彼をして反省と自知に導いたかの同じ手は、再び彼をこゝ



にスポレットに於て捕へた。熱病の發作は彼をして床につくことを餘儀なくせしめた、そして彼が眠りとめざめのあひだに横はつてゐたとき、彼は彼に何處に行かむと欲するかを問ふ聲をきいた。「騎士となるためにアプリアに」とは病者の答へであつた。

「語れ、フランシスよ、」その聲はふたゝび問うた「いづれがもつとも多く汝に恵みを與へ得るか、主かまたは僕か？」「主、」フランシスは驚きながら答へた。「何故に、」その聲はくりかへした、「しからば汝は主をすて、僕に就くか、何とて君をすて、奴の爲にするのか？」

そしてフランシスは彼に言ふものゝ何人であるかを理解した、そして聖パウロと同じ言葉で彼は叫んだ「主よ、あなたの御旨によつて私は何をなすべきでありますう？」

けれどその聲は答へた、「汝の故郷に歸れ、汝のなすべきことはそこで汝に語られるであらう。汝の見た夢は他の仕方で解かれなければならないのである。」

聲は黙し、そしてフランシスはさめた。その夜はもはや眠らなかつた。けれどあくる朝がきたとき、彼はしのびやかに起きて、馬に鞍を置いて、いまにはかにそのやうに益なきものゝやうに思はれた武器と装束をつけながらアッシジのかたへ騎つて歸つた。<sup>2</sup>

いかやうにして彼が家に迎へられたか我らは知らない、けれど容易く考へることが出来る。このことも彼の奇行の多くと同じく、まもなく赦されたであらう、そしてしばらくのあひだ、彼は再び友だちの樂し

い周圍の中心であつた。まもなく古い生活は宴と快樂とゝもにその絶頂にあつた。再びフランシスはこの若者らの群れの第一の人——Eios juvenum——として數へられなければならなかつた。もし彼のアプリアに向つた徒勞であつた旅のことが話に出れば、彼は決乎と答へた、「私はまつたくそのことを思ひ止つた、けれど、それはたゞ私の故郷にあつてもつと大いなることを爲し遂げるためである。」

事實に於いては彼は彼が裝つたほどには確乎たるものでなかつた。たがひに矛盾した感情と願望は速やかなる交替に於いて彼の心に争つた、あるひは彼はまつたく現世のものとなつた、あるひはスポレットの一夜に柔和なる御聲をもつて拒みがたく彼に説かれた主に仕へむことを願つた。ますます強く彼のむねにはすべてのものから退いて、孤獨のうちに彼の召された職を明らかにしようとする壓迫が高まつた。けれど彼がもはや友ちだを求めなかつたけれど、彼らは彼を求めた、そして彼が吝嗇になつたごとく見られるのを恐れて、彼はまへと同じく奢つた客を好む人であつた。

そしてかくのごとくしてある夕——それは二〇五年の夏であつた——彼は常のごとく一つの宴をつねよりも豊かに輝やかしく催ほした。彼は宴の君王となるのであつた、そして卓子がひろげられたとき、すべての人々は波の溢れるやうに賞讃と感謝を彼に負はせた。食事のうちに、集まりはつねのごとくに歌ひながら町々を歩んだ、フランシスは、けれど、他の人々よりすこし後れて歩みながら、歌はなかつた。だんくんに彼は友だちのあとに遅れた、まもなく彼はたゞ一人アッシジのけはしいせまい町々の一つ、もしくは



はその小さい、そこから遠い景色の眺められる空しい廣場ピヤツツに立つた。

そしてそのとき主はふたゝび彼をおとづれた。現世とそしてその空しさにつかれたフランスの心はただちに甘き幸ちに満たされて、彼は他に何ごとも覚えなかつた。彼はまつたく意識を失つた、そしてもし彼の身が手を断たれ足を裂かれてきれぐにされやうとも——彼はのちにかく語つた——彼はそれに氣づかなかつたであらう、そしてそれを脱れるために身をうごかさうとも思はなかつたであらう。

いかばかりのあひだ彼が天つ國のなつかしさに包まれて立つてゐたか、彼は知らなかつた。彼をさがすためにあとへ歸つてきた一人の友のきたとき彼ははじめてわれに歸つた、友は呼びかけた。

「おいフランススコ、君は立ちどまつて結婚のことを考へてゐるのか？」

彼は天を一目ながめた、今もむかしもかはらぬ八月の澄める夜に空の星は輝いてゐた、そして青年は答へた。

「私はそのことを、結婚することを思つてゐる、けれど私の慕ふべき花嫁は君らの知つてゐるいかなる女よりも、もつと氣だかく、富み、そして美しい。」

彼の友だちはみな笑つた——話のあひだに幾人かそこに近よつたのである——そして酒は彼らを能辯にした。

「それでは裁縫師はまたあのときのやうに仕事にありつくだらう、君がアブリアへ出かけたときのやうに」

彼らのうちには嘲弄を帯びてかう曰つたものもあつたであらう。

フランスは笑ひ聲をきいて心をいためた、けれど彼らに對してではなかつた。瞬間の光明に彼のこれまでの生活はその愚かさ、目的のなかつたこと、子供らしき虚榮のすべてと、もに彼のまへに見えた。彼は己れを彼のまつたき憐れむべき現實に於いて見つめた——そして彼に向つて輝やく美しさのなかに彼が今までなさなかつた生活が立つてゐた——まことの生活、正しき生活、美しき、貴とき、富める生活——イエス・キリストに於ける生活。

かゝる眺めのまへに、フランスはたゞ己れのほかに何人を責むべくもなかつた、そしてそれ故に古い物語はまた彼がこの時より自らを賤んだことを語るのである。<sup>3</sup>

1. Tres socii. II. 45. Celano, Vita secunda I, 1.

2. Tres socii II. 5.

3. Tres socii III.

## 五 悔い改め

十五世紀の著述家フィレンゼの聖アントニノ（一三八九——一四五九）は彼の教會の年代記のなかにこの



ころ、フランススが友だちとたのしい生活とに別れたはじめの年ごろに爲したことの大概を二行ばかりに記した、「彼はあるひは隠者の洞にかくれて出でず、あるひは眞心もて破れし寺院を修理す。」孤獨の祈りと神の王國のためになす手づからの勞働とは、富人の子、若く恣いまゝな、現世的なこの人が彼のために定まつた神の御旨を確めるためにもとめた二つの手段であつた。

町をやゝ離れたところに絶壁に一つの洞があつた、そこへ彼はつねに祈りをしに行つた、あるときはひとり、また屢ば友だちの一人——彼の心のかはつたのちまで彼にまめやかであつた唯一の人——とともに行つた。傳記著者たちの一人としてその名を我々にまで書き残した人はない——チエラノのトマソはただ彼がすぐれた人であつたといふのみである。

フランススの性格には彼の経験を人に語る一つの強い衝動があつた。傳記著者たちにしたがへば、彼は彼を充してゐるものを己のが意志に逆つて口に出したといはれる。彼がそれを一人の友にうちあけ、そして聖書の譬への言葉を借りて彼が市外なる洞に見出した貴とい實のことを語つて、それを土より掘り出すことをすゝめたことはふしぎではない。けれど彼はその實をとり出すには獨りでなければならぬのであつた——それ故彼は友をそとに留めて己れひとり洞に入つた。

そこにひとりばなれて、暗い洞のなかにフランススは天なる父に祈ることのできる祕密の室を見出した。日に日に神の意志を爲さむとするねがひは増して、彼はもはや落ちつきを失ひ、神が彼に望み給ふところ

のものをさだかに知るまではじつとしてゐることはできなかつた、再び、三たび詩篇の詩人のことばは彼の唇に上つた、すべてまことに神を崇める心の核であることば、「主よ、われに爾の大路を示したまへ、爾の徑の完たきを教へたまへ。」(詩篇二十五の四)

この純なる理想に對して彼のいままでの生活はますますくらく醜く立つてゐた。ますます強められる苦がいたみをもつて彼は戯むれに過された青春をなげいた、その悦ばしさや奢りを思ふにつけて彼はすこしも悦ぶことはできなかつた。けれどあらたに墮ちざらむがために彼は何を爲すべきか?——彼は一たびまた二たび戒められたのではなかつたか、そして一たびまた二たびその戒めを嘲つて、彼の心根のまゝに従つたのではなかつたか? もし友だちが再びきたり、そして彼を呼び迎へ、酒が再び彼を誘つたならば、そして宴の香がふたゝび彼の鼻にいたり、ギョラと琴の音がふたゝび彼の耳に迫るならば——そのときそれに抵抗する力をもつてあらうか、くらい日常の生活の地上にひらめく金色の雲の國のやうな宴や酔ひのたのしい世界にふたゝび身を投げるのではなからうか?

フランススは己れのうへにすこしの信頼もたなかつた、そして神は彼の乞ひもとむる救ひの言葉を與へやうと欲しなかつたやうに見えた。心の苦しきとたましひの寂しさのなかにフランススは洞穴の孤獨と暗のなかで彼の救はれのために闘つた、そしてつひに彼が、心碎かれ、苦しんで、再びこの世の光のなかに現はれたとき彼の友は殆ど彼を識ることはできなかつた、彼の面影はそれほどにもやつれた<sup>1</sup>。



かくてフランスは祈りの人となつた。彼は祈りの甘美を味ひはじめた、そして日々祈つた。町々を歩むとき、または家のなかを歩むときにも、彼はその仕事をことごとくみなうちすてて寺院のなかへ遁れては祈りすることが幾たびかあつた。<sup>2</sup>

かやうに子の性質が變りつゝあつた時期にフランチェスコの父はながいあひだ家にみなかつたやうに思はれる。母は他の子たちよりもことにフランスを愛してゐたのでまつたく彼の欲するまゝにさせた。ある意味に於て彼はまへとまつたく同じ生活をした——たゞ友だちのかはりにこのたびは貧民があらはれてきた。彼はこれらを求めた、そのために彼は饗宴をひらいた。ある日彼の母と彼とが食卓に共に就いたとき、彼は一つの大きい家族にそなへるにも足りるばかりのパンを備へた。母がその豊かな準備の理由を尋ねたとき彼はそれをみな貧民に與へるつもりであると答へた。彼はみちをあるいて施こしを乞ふ乞食に逢つたときには持つてゐるだけの金をすぐに與へた。けれども彼の金がみな無くなつてゐるときには、彼は帽子かまたは帯皮を與へた、時として他に與へるものゝないときには、彼は貧しき人を己れと、もに人の見えぬところに伴つて、そこで下衣を脱ぎそしてそれを與へた。彼はまた貧しき牧師たちと貧しき寺院について考へるやうになつた。彼は寺院のために什器を買ひ與へ、また密かにその乏しいところに贈つた。こゝに彼の後年に顯はれた寺院に關する事物に對して感じた生き生きとした尊重はその最初の芽を見せてゐる、それは殊に彼が「すべての縣に質の美しい鐵器を送つて、美しき純白な祭壇のパンをつくる用に

供した」ことによくあらはれたものである。<sup>3</sup>

けれども何よりも貧しきものが彼の思想を占めてゐた。彼らを見、彼らの困苦を聞き、彼らの窮乏を助ける——それが次第に彼の主な仕事となつた。そして徐かに願ひは彼の心に固くされた、「もし私が一どでも貧しくあることがいかなるものであるかを自ら知ることができたならば——行き過ぎつゝかの一錢を投げ與へる人ではなくて、襤褸と泥土を衣として立ち、そして卑く身を屈めつゝ色のさめた帽子をさし出して恵みを乞ふ人であることがいかなるものであるかを！」何たびも彼はいつこの寺院の門に乞食たちのあひだに立つた——彼らのあひだに立ちどまつて動かなかつた、そして彼らは哀れげにすぎゆく人々に施しを求めるとき、けれどそれは彼がみづからなすと同じくない。彼は貧しさを理解するために自ら乞食をしなければならぬ、そしてそれは、けれどすべての人が彼を知つてゐるアッシジではできないことであつた。そのとき彼にはローマへ順禮をすることが心に浮んだ。かしこに、大いなる都には、彼はすべての人に知られなかつた、そこで彼は企てを行ふことができるのであつた。

あるひはなにか特別な關係があつて、彼に聖使徒の墓への順禮の企てを近く起させたかもしれない。一二〇四年九月十四日から一二〇六年三月二十五日まで、そして二度めに一二〇六年の四月四日から五月十日までのあひだインノケント三世は法王廳を聖ペテロの大僧正廳に移してゐた。かく永いあひだチベリ河の不健康な水流のほとりに留まつてゐたといふことは聖ペテロ寺に於ける特別な教會事業と何らかの關



係のあることであらう、それはあるひは何らかの免罪狀の認許のことであつたであらう。アッシジの僧正もこのときまたローマへの旅に上つてゐた。

これらのことはすべて如何であつたにせよ、フランスはローマに行つた。「永への都」へ彼がはじめて訪れたときは多く知られてゐない。彼はフラミニウス街道を経てこゝに来て、そして直ちに聖ペテロ寺に詣でたやうに見える。こゝで彼は多くの順禮に逢つた、そして彼らが中世の習はして聖使徒の墓の *fenestrella* の格子のあひだから喜捨として錢を投げ入れるのを見た。施物の大部分はたゞ些かな錢であつたフランスはしばしばそこに立つて見てゐた——そしてそのとき彼の昔しの見えを張る心はこれを最後としてあらはれた、彼は充たされてゐる財布を引き出して一つかみの貨幣を投げた、そして金は飛んで、落ちながら音を立てた、そこに居あはす人々はみな駭いて彼を眺めた。

彼は直ちに寺院を出てそして外に立つてゐた一人の乞丐を物影に伴つて、そしてつぎの刹那には彼はつひにこの旅のすべての目的を果した——まことの乞丐のやうにまことの襤褸を着て彼は他の乞丐どものなかにまじつて寺の方へ上る階段に立つてゐた。このとき彼の心もちほどんなであつたらう、ある傳記著者によつて、彼がこのときフランス語で、「彼の好んで語つた、けれどまづたく巧みではなかつた」フランス語で施しを乞ひ求めたといふことをよむとき私たちにその心もちは十分に知られる。彼にとつてフランス語は詩のことばであつた、宗教のことば、彼のもつとも幸福なる思ひ出と、彼の最も嚴そかな時々の言葉

であつた、それは彼の心がみちあふれて日常のイタリア語には日ひつくせぬときの言葉であり、それ故に彼のたましひの母國語であつた。フランス語がフランス語で語るときには、彼をよく知るものはその楽しいことを知るのであつた。

彼がローマに留まつてゐた期間は知られてゐない。恐らくは彼は着いたあくる日にはまた歸り去つたであらう。信すべき記述には、彼は乞丐らと食事を頒つたのちに、借りた着物を脱いで、ふたゞ己れのを着てアッシジへと歸つたといふ。彼はもはや大いなる經驗をした、貧しくあることがいかなるものであるかを知つた——彼は襤褸を着、そして恵みのパンをたべた——そして彼が再び彼の自らの美しい着物をきて安らかにたらはぬことのない彼の母の食卓につくのが彼にうれしかつたことは避けがたかつたらうけれどそれでも彼は満足と無所有の吹き入れあたふ靈の誘はれを感じた——この世界に於いてたゞ泉の水の一杯と、恵み深き人々の手より受けた一片のパン切れと、そして蒼い空と輝やく星のしたなる夜の床のほかは何ものも所有しないことの歡こびのありうることを。かく少きものをもつて足りるのに何とてあのやうに數多く財物や金や、家や園や僕の家畜のために不安と煩ひをなす必要があらう？ 福音は「貧しきものは幸なり」といふではないか、また「富めるものの天つ國に入るよりも、駱駝が針の孔を通るはなほ易し」と。このやうな疑ひはたしかにローマから歸つてきたフランスをうごかしたにちがひない。まへよりもなほ大いなる熱心をもつて彼は神に導びきと光とを願つた。いままで洞へ彼と共に行つた友もこのときには



何ことの結果もなかつた實を探りに行くのに倦んでしまつたやうに思はれた。フランススが時々彼の心を聞いたたゞ一人の人はそれ故アッシジの僧正、恐らくは彼の懺悔父であつたギドーであつた。

聖フランススがみづから彼の遺書のなかに我々に残したものの、この時期についての説明は、それ故ことに貴といものである。聖者が死ぬまへの年に書かれたこの記録には、かく記されてある。

「主はわれにかゝるみちにて悔い改めを始むるを許したまへり、すなはち、わが罪のなかに生きたりしときわれは癩病に罹れるものを見るを厭ひぬ、されど主はわれを彼らのなかに行かしたまひ、またわれは彼らに慈悲を行ひたり。」

癩病患者は中世の病めるものと貧しきものゝあひだに特別な位置を占めてゐた。豫言者イェザヤの一節（五十三の四）に基いて、癩病患者はほかの惱めるものにもまして救ひの主の象徴たるすがたと考へられてゐた。早くは大グレゴリオのころの物語に、マルティリウスといふ修道僧があるとき道の傍に痛みと疲れのために地に倒れて一步も己が身を引かずつてゆくことができな癩病人に出逢つたことがある。マルティリウスは病めるものを己が上衣で包んで彼の僧院まで背負つて行つた。けれどその癩病人は彼の腕のなかに抱かれたまゝイエスその人に化して、そして天に昇りながら僧を祝福して、彼に謂はれた、「マルチリウスよ、汝は地上に於て私のために恥ぢなかつた。私は天に於て汝を恥ぢとしないであらう。」同じやうな説話は聖ユリアノについても、聖レオ九世についても、そして祝福せられたるコロンビニについても語られてある。

れてある。

そしてそのやうにして癩病患者は中世のあひだを通じて他の何ものよりも敬虔な介抱の対象であつた。彼らのために特に騎士の團體——ラザロの騎士——が設けられてその唯一の目的は癩病患者の看護をするこゝとであつた。また全ヨーロッパに數しれない聖ジョルジの家は建てられて、そこで癩病人は一種の僧院的な共同生活のなかに保護されてゐた。このやうな癩病患者の家は十三世紀に於て一萬九千に達した。けれどそれらにも拘らず彼らの生活は悲しいものゝきはみてあつた、彼らは人道の交渉から逐はれ、そして嚴重な法律は彼らを隔離しそして堰きとめて、すべての方向から彼らを圍んだ。

いづこの町にもあるやうにアッシジの近在にも一つの癩病院があつた——癩病患者は事實に於て病者を病院に收容するといふ設備を行つた最初のものであつて、ある國語ではその名が事實を證明するのがある。病院はアッシジとボルチウンクラのあひだにあつて、今カザ・ダルディといふ名が大きい一つの地所の入口に掲げられてゐるその場所に近いところである。それはサン・サルヴトレ・デレ・パレティと呼ばれて法王アレクサンドロ三世のもとに癩病人の保護のためにつくられたクルチジェレル（十字架を負ふもの）團體の所有であつた。

近郊の逍遙に於いてフランススはときとして病院の側を通つたことがあつた、けれどそれを見たばかりで怖しさが一ぱいになつた。彼はだれか手からとつて渡してやる人がゐれば癩病人に施しすることは決し



て厭ひはしなかつた。わけても病院の方から風が吹いてくるとき、癩病に独特なほのかな嘔氣を催すやうな臭ひが路のうへにくるとき、彼は顔をそむけて、鼻孔を指で塞いで急いで通つた。<sup>6</sup>

こゝに彼は彼の最も大きい弱點を感じた、そしてこゝに彼は彼の最大の勝利を得なければならなかつた。何となればある日、つねのごとく彼が神に叫んでみたときその答へがあたへられたのであつた。そして答へはかやうであつた、「フランスよ、汝が私の意志を知ること欲するならば、汝の肉に於て愛しそして欲したものを、汝は軽んじ、そして憎まなければならぬ。そして汝がそのやうにして始めたならば、今汝に快よく愛すべく見ゆるものはみな厭はしく苦痛なるものとなるであらう、けれど汝がまへに厭つたものはみな大なる楽しさとなりかぎりなき悦びと變るであらう。」

このことばによつてつひにフランスに一つの定まつた目標が與へられ、彼のふむべき道が示された。彼はこの言葉について考へながらウムブリアの野をひとり馬を歩ませたのであらう、そして彼はある日馬がにはかに跳つて、沈思よりさめたとき、そして彼はすぐまへに道のうへに、わづか數歩はなれて、一人の癩病者がそのたやすく識らるゝ着物をきてそこにゐるのを見出した。

フランスははつとした、彼の馬さへも同じやうに身をふるはせた、そして彼の最初の考へは身を回してできるだけ速く遁れることであつた。けれど心のうちに聽いた言葉にはかに明らかに彼を遮ぎつて立つてみた——「汝がかつて厭へるものは汝にたのしさと悦ばしさとなるであらう。」そして彼が癩病人より

も厭つたものはあつたらうか、これこそ主の言葉によつて主に従ふべき時——彼の善き意志を示すときであつた……

自我のうへに加へた力つよい勝利をもつてフランスは馬から跳び下りて癩病人に近よつた、その口と顔れて形なくなつた鼻からは腐敗の恐い臭ひが湧いて彼を打つた、彼は病者の差し出した半ば削げた手のなかに恵みを渡した、そして速やかに身を屈めて恐い病ひに充された頸とそして瘡と吹出物に覆はれた手の指に接吻した。

如何にして再び立ち上つたかも覺えぬやうに彼は再び馬に跨つた、彼は心の興奮にうごかされて、彼の心臓は跳つてゐた、彼は何處へ馬を歩ませるとも知らなかつた。けれど神の言葉は空しくなかつた、樂しさ、幸福、悦ばしさは彼のたましひに流れ入つた——たましひはすでにはやくみたされて、そしてなほ満ちゆくときに、あたかもきよい泉が土器の壺を満たしてなほもゆたかに注げばその縁からは一としほ澄んだ一しほきよい流れが溢れるそのやうにいつまでも彼に流れ入つた……

つぎの日フランスは殊さらに今まで彼の避けてゐた道を、サン・サルヴトレ・パレティへの道を歩んだ。門に達したとき彼は戸を叩いた、開かれると彼は歩み入つた。病院のすべての小室から病者たちは群らがつて、半ば形なくなつた顔、盲ひた焼かれた目、棒のやうな足、衰へ腐つた腕、指の落ちた手首をもつて出てきた、そしてこの恐い群れはみな若い商人のまはりに集まつた、そしてその不潔な瘡から出る



悪臭はたへがたく、フランスは心にもなくしばし呼吸をとめて悪疾を遁れようとまでした。けれど彼はまもなく我に回つて、携へてきた重い財囊を引きだして、施物を分配しはじめた。そして彼の恵みを受けるために差出された見るもいぶせき手ごとに、彼はきのふなしたごとくに接吻の唇を押しつけた。

×)かくのごとくしてフランスは人の克ち得る最大の勝利——己れに勝つことを果した。今より彼は己れの主であつた、そして我々の多くがあるがごとき己れの奴隷ではなかつた。

けれど靈の野に於ける偉大な勝利者といへどもつねに彼の油断せぬ敵を心につかねなければならぬ。フランスは大なることに勝を得た——敵は彼を今小さきことに於て陥れやうと謀つた。

フランスはまへのやうに日ごとに市外の洞穴の祕密の室に赴いて祈りをした。このときみちに於て彼は一人のせむしの老婆に逢ふことが屢ばあつた——南方ではあまたのかやうな不具者が寺院の庇ふやうな薄暗いところに好んでかくれがをもつ。彼らは終日すはつて珠数の音をさせ、あるひは片隅で眠つてゐる、けれど人が通りかゝるや否や彼らは頭に結んだ布を緊めて、彼らのひそんだ隅から這ひ出して、そして汚れた手をのびしながら憐れげにつぶやく、「Un soldo, signore! un soldo, signorino mio!」一錢を下さい旦那、どうぞ一錢を、若旦那様。」

このやうなあはれな老つた女乞丐が今毎日若人の道にいざり出るのであつた。そして新たに悔い改めた若い心には一種の嫌悪と憎みとが起つた——この老婆の汚なさとははれむべき貧しさを厭ひ、そしてその

わづらはしさとあつかましくつきまとふことゝを憎んだ。そして彼が歩んで行つたとき、日は彼のあたりに輝いて、野は緑に、そして遠い山々のうへに青い輝やきがかゝるとき、彼は心のうちにさゝやく聲をきいた、「そして汝はこれをみな捨てやうと思ふのか——汝はこれをみんな離れやうと思ふのか？ 汝は光と太陽と、生命と悦びと、開いた空の下の宴を捨てやうと欲するか——そして暗くつめたい洞穴に閉ぢこもつて、またと来ない若き日をむなしき祈りに費やし、そしてつひに老つた見るかげもない愚人となつて、利かぬ身體を顛はせて、寺から寺に迷ひながら、恐らくは心ひそかに徒らに費した生涯のために歎きそして溜息するのではないか？」

かやうにして悪しき敵は若人の魂にさゝやいた、そしてフランチェスコの青春と光を愛するまなことを騎士のやうなたましひが弱められた時々があつた。けれど洞に行きつくと彼はつねに己れに勝つことを得た——そして争ひの難ければそれだけのちに受くる平和と、そして神と語る歡こびと慰さめはますます深くなつた。<sup>7</sup>

1. Celano, Vita prima I. 3. Vita secunda I. 5.
2. Tres socii, cap. III. 8. (Tres Socii は Legenda trium Sociorum の略である)
3. Speculum perfectionis (完全の鏡), cap. 65.
4. Tres socii, cap. III. 10.
5. Tres socii, cap. III. 10. Spec. perf. cap. 10.



## 六 サン・ダミアノ

「神は與へたまひぬ、」と聖フランスは彼の遺書のなかに彼の青年の時を語るうちにいふ、「神はまたわれにはなほ深く教會を信する心を與へたまひぬ、さればわれは單純に祈りてかくいひたり、われらおんみに祈る、主イエスキリストよ、こゝに於いてもまた全世界にあるすべてのおんみの教會に於いて、しかしてわれらはおんみを祝しまつる、おんみが聖とき十字架をもて世を救ひたまひしゆゑに。」

「またのちに主はわれをして聖ローマ教會のさだめに從ひて生ける司祭にむかひて大いなる信をいだかめ給ひたり、こは今に至るも變ることなし、さればもし彼らわれに迫るとも、彼らの聖禮の故をもつてわれはわが庇ひを彼らにもとめむ。もしわれソロモンのごとく賢くあらむとも、しかして貧しき牧師の教區を過ぐるとき、その許しを乞はずして教へを説くことをせざるべし。彼ら、またすべての僧職をばわれは恐れ、愛し、讃へてわが君とせむ、またわれは彼らの過ちを見むと欲せざるべし、何となればわれは彼らうち神の子を仰ぎ、彼らはわが君なればなり。しかしてわがこれを爲す所以のものは、この地上に於

ては、われはもつとも高き神の子を彼の聖なる肉と血に於てのほかに見るることなし、しかしてこれを受くるものは司祭らにして、しかして彼らのみこれを人に頒てばなり。この嚴そかなる神祕をばわれは何ものよりも高く讃へ敬まひ、もつともきよき處に置かむことを欲す。」

こゝに聖フランスの生涯の終りの年のものより我々は彼の生涯を通じて教會と司祭らに對してもつた感情の信すべき記述を得てゐる。そしてこの彼みづからなせる言明は、彼の人格のこの特徴について傳記著者らのいふことゝみな精確に一致してゐるのである。

いかにフランスが貧しい寺院にふさはしき備へつけを寄附したことによつて彼の教會の事物に對する關心を示したかはまへに曰つたごとくである。アッシジの近郊はなほ今日でもかやうな半ば壞れた小さい寺院や、路傍や野なかの禮拜堂などが多くある、その扉はしばしば鎖されてゐる、それらは稀にも使用されないのである、低い窓のまへには跪つくためにベンチが置かれてある、そこから中をのぞけば、祭壇のうへには破れた敷物が斜めに垂れ、歪んだ木でつくつた壺や、それには乾いたほこりだらけの造花がさゝれて、そして木でつくつた燭臺はあるときは金塗りであつたのが今はひび割れて黒んでゐる。

しかしながらこのやうなさびしい見すてられた堂には何となく嚴そかに敬虔の心をよびおこすものがある。もしそれが開かれてあつて、中へ入ることができれば、壁には半ば消えた昔のフレスコ畫が見られる、それはジョットーやシモネ・マルチニの弟子らが、彼らが十四世紀のころにアペニンニの山あひの小さな町





スシンラフ聖るれ祈にノアマダンサ  
作—ネドンボイデ—トツヨジ

町や村々をその隅まで訪れたやうに思はれる所に描いたのである。聖水を誦へた盤はいつごろからも知れず乾いて、塵に埋れてゐる、けれど人が祈りするために跪けば、栗の木の茂みのため息する風や谷川の水音がこのおそかな孤獨のなかに聞かれる。

サンダミアノの古い寺院は、町をすこしはなれて下の方にあつて、フランチェスコの若きころにはこのやうな荒れた堂のすがたであつた。そこへのみちはそれからすぎた七百年のあひだにあまり變らなかつた路はやゝ険しくて、まばらにある白壁の家々の、蜂小屋の形した大きい黄色の穀倉がそのまはりに立つてゐるあひだをすぎて、そしてオリブの林のなかへ、そこはオリブの節くれた木の枝や葉の美しい銀灰色の網の下に、麥が豊かに延びてゐる——十五分歩いたのちにサンダミアノに達する、それは今は褐衣を着たフランシスカンの住む修道院である。

聖フランシスコの青年のころには、サンダミアノはたゞ小さいくづれかけた野中の堂であつた、その装飾は高い壇のうへにある大きなビザンチオン風の十字架のみであつた。この十字架のまへにフランシスコは屢ば祈りをした、そしてかくて彼にあるときかやうなことが起つた、彼が癩病人たちを訪れたのちまもなく彼はある日サンダミアノの堂のなかで十字架にかゝれるものゝ像のまへに祈りに跪いた。彼が心のうちに彼の自己を十字架に磔けそめてより、十字架は彼の思想に對して一つの愛すべき対象となつた。めぐみをもとめる目ざしをもつてイエスの光榮に冠せられたおん顔はせを見つめながら彼はつぎの祈りを祈つた、



町や村々をその隅まで訪れたやうに思はれるところに描いたのである。聖水を洗へた盤はいつごろからとも知れず乾いて、塵に埋れてゐる、けれど人が祈りするために跪けば、栗の木の茂みにため息する風や谷川の水音がこのおごそかな孤獨のなかに聞かれる。

サン・ダミアノの古い寺院は、町をすこしはなれて下の方にあつて、フランチェスコの若きころにはこのやうな荒れた堂のすがたであつた。そこへのみちはそれからすぎた七百年のあひだにあまり變らなかつた路はやゝ峻しくて、まばらにある白壁の家々の、蜂小屋の形した大きい黄色の穀倉がそのまはりに立つてゐるあひだをすぎて、そしてオリブの林のなかへ、そこはオリブの節くれた木の枝や葉の美しい銀灰色の網の下に、麥が豊かに延びてゐる——十五分歩いたのちにサン・ダミアノに達する、それは今は褐衣を着たフランシスカンの住む修道院である。

聖フランシスの青年のころには、サン・ダミアノはたゞ小さいくづれかけた野中の堂であつた、その装飾は高い壇のうへにある大きなビザンチオン風の十字架のみであつた。この十字架のまへにフランシスは屢ば祈りをした、そしてかくて彼にあるときかやうなことが起つた、彼が癩病人たちを訪れたのちまもなく彼はある日サン・ダミアノの堂のなかで十字架にかゝれるもの、像のまへに祈りに跪いた。彼が心のうちに彼の自己を十字架に磔けそめてより、十字架は彼の思想に對して一つの愛すべき対象となつた。めぐみをもとめる目ざしをもつてイエスの光榮に冠せられたおん顔ばせを見つめながら彼はつぎの祈りを祈つた、



スシンラフ聖るれ祈にノアマダンサ  
作—ネドンボイデオツヨジ



それを傳説が我々につたへてゐる——

「偉大なる光榮ある神よ、わが主イエスキリストよ、私には光にてらされ、そして私のたましひの闇をとり去られむためにあなたに乞ひもとめます。私に正しき信と、かたき希望と、まつたき愛をあたへて下さい。おゝ主よ、すべてのことに於いてあなたの光にしたがひ、そしてあなたの聖とい意志に諧つて行うために、あなたを知ること私にあたへて下さい！」

このサンダミアノから程遠からぬ野路のほとりに立つてこの世を空しきもの、彼のたましひを荒んだものとして知りえたあの日から経た年々のあひだの、青年の努力のすべてはこの單純なそして深い祈りにこもつてゐた。これがそのうち彼が、すべて彼の誤まりやまた力弱さのあひだでもつねに求めてゐたものであつた——神の意志を見るための光、そしてそれにしたがつて行爲するための力と。そのときからこの刹那まで彼の生活は、多くの形式に、けれどたえず生長する内面性をもつてくりかへされたる一つの「語りたまへ、主よ、ここにおんみの僕は聞けり」であつた。

そしてつひに神は彼の僕フランチェスコを、御言葉を受くるに値するものとなした。十字架の像からはたゞ心の耳にのみ聴かれるべき聲かきた、そしてその聲の曰つたのはこの言葉であつた、「さらば行け、フランチェスコよ、わが家を築きあげよ、それは殆んど倒れむとしてゐるではないか。」

かつてスポレットでアブリアにゆく征途を思ひ止まれと彼が命ぜられたときと同じやうに、フランスは



たゞちに神の使命に従はうとした。彼のつねとして單純に、裏のない心で彼は古い堂のなかで彼のあたりを見まはした、そしてそれがまことに殆ど倒れさうになつてゐるのを見いだした。そしてその利那の嚴肅さに慄のきながら彼は彼に語りたまはつた十字架に上れるものに答へた、「主よ、よろこんで私はあなたの欲することくに致します。」

つひに神は彼の祈りを聽かれた、つひに神は彼に一つの勞働を命ぜられた。そしてフランスは敏捷に行ふ生れつきとして、たゞちに主の命を果すために起つた。戸のそとに彼はこゝの司祭、一人の貧しい老人が日なたに石のベンチのうへにすわつてゐるのを見出した。青年は彼のそばに恭しく歩みよつて、挨拶としてその手に接吻して、彼の財布をとり出して、驚いてゐる司祭のまへに莫大な金額を與へて、そして曰つた、「私はあなたに願ひします、この金で油を買つて、あの十字架のまへにいつでも燈火のついてゐるやうにして下さい、そしてもし盡きたときには私に知らせて下さればまたあなたに出してあげます。」

老つた司祭が驚ろきからさめるよりさきにフランスは行つてしまつた。彼の心はみなぎり、彼のたましひは彼のまへに起つた大いなることのために震へた。歩みながら彼は二たびまた三たび十字の印を空に畫いた、そしてそのたびごとにますます深く彼の心に主のすがたを刻む心ちがした。このときより我らの主の受難を思へばフランチェスコの心は溶けて、されば彼はこのときよりたえず、彼の生きてゐるかぎり主イエスキリストの傷を胸に抱いてみた、と古い傳説は比ひなく眞實に、そして翻譯しがたく美しく語る。<sup>1</sup>

けれどサン・ダミアノの寺院を再び築くにはフランスがそのときに手にもつてゐたよりも多くの金が必要であつた、けれどそのとき彼はいかにして必要な資金が得られるかについてすこしも絶望しなかつた、彼の足の運び得るかぎり速やかに彼は家へ急いだ、そして美しい帛の幾巻かを店からとり出して、一頭の馱馬に載せてフォリニヨの路に向つた、彼のつねになしたやうに、この近くの大きい町の市場にその品をもつて行くつもりであつた。しばらくのあひだに彼は品物も、また馬も賣つた、そして金を携へて彼はサン・ダミアノに歸つた——二つの町のあひだはわづか二哩で、そして歸りみちをフランスは馬を急がせたのである。

彼がかへつてきたとき、司祭はまだ石のベンチの日なたにすわつて身を温めてゐたのであらう。いづれにしても青年はすぐに彼に逢つた、そしてまた恭しく禮したときに、彼は商つて得たその金のあるかぎりを、少なからぬ額を司祭の衣の膝に渡して、それは寺院の再建のためだと言葉を添へた。<sup>2</sup>

その司祭は前回の比較的少ない額の施物は受け納めた、けれどフランスがこのすべての大金をもつてきて、それを彼に與へやうと欲したとき、彼は疑ひをおこして拒んだ。彼はこの慈善が若い人の平常の無謀なでき心の一つであつて、そしてこの施物はまじめに考へられたものでないと思つたかもしれない。いづれにしても、彼はビエトロ・ロディベリナルドネに對して迷惑をかけないやうにするつもりであつた、そしてそれ故このことについてはまつたくこれきり手を出さない心であつた。フランスは空しくその老つ



た牧師の傍に坐つて、そして彼の決心を弱めるために彼の説得の技倆の全部を用ゐた。それはみな甲斐がなかつた、フランシスはたゞこれだけのことを得た、牧師は彼にしばらくのうちサン・ダミアノに住み、妨げなく祈りと敬虔の行ひに彼の身をさゝげることを許した。

今よりはフランシスは中世に於て「宗教的な生活」と呼ばれたもの、即ち修道僧かまたは隠者としての生活を送ることに決心した。彼はたゞちに修道院に入らうとは思はなかつた——彼の遺書に彼はみづから謂ふ、「何人も彼にこの宗教的な生活にゆく道を導くものはなく、たゞ全能の神がみづから教へられた。」けれどもこのときに彼に起つた變化については、彼は同じところに、宗教團體の生活に入ることについての古典的な言ひあらはし「浮世を脱れる」といふ言葉を用ゐてゐる。\*Ervii de saeculo. 彼はいふ、「私は世を見棄てた」今彼がサン・ダミアノの牧師とゞもに送つた時期はまさしく彼の Novitio 新弟子の試しのときであつたと考へることが出来る——けれどもこの境涯に於いてたゞ神の靈のみが彼の師であり導びきであり監督者であつたのである。

牧師の家の近くに一つの洞があつた、そして彼の習はしを守つて、フランシスはこゝを彼の祈りの室に選んだ、こゝで彼は夜々と日々を祈りと斷食に、涙とそしてことばにはれぬ歎息に送つた。

これらのことのおつたあひだ、ピエトロ・ディ・ベルナルドネはいつもの商用の旅に出でゐた。彼は家にかへつてその子がゐないのを知つた。ピカは彼がいかなるものになつたか知らなかつた、また知つてゐたと

しても話すことを欲しなかつた。けれどそれはいづれにしても、老つた商人はまもなく彼の子の隠れがをさがして、そしてそこに赴いた、けれどフランシスとは逢はなかつた、彼は洞に隠れてゐた。そのとき堂の牧師は機會を利用してピエトロに息子の商ひしてもつてきた金を返したごとく思はれる、フランシスはそれを寺院のすみの窓ぎはにのせて置いたのであつた。帛と馬の紛失はピエトロ・ディ・ベルナルドネがこゝに來たことの原因の一つであつたことは全く當然である、その金をとり戻したあとで、彼はよほど安心して家にかへつた、そしてそれきり彼の長子に逢はふとも話さうともせずにつつと一月をすこした。そのあひだ食べるものは洞穴にゐるフランシスのところへ家から送られた——それは恐らくは母の仕業であつたであらう。

フランシスがこの一月を費したのは一つの大きいなる思想に、このときより彼に基督教の精髓としてあらはれた大きいなる思想——信ずるものゝ各々の心に於ける十字架につけられたるキリストの生活——に彼自らを生かし入れることであつたといふことができる。パウロの 로마人に與へた書翰はフランシスのもつとも屢ば引用するところの聖典の文である。そしてこの書翰には他のものに於いてよりも著しく、パウロがたゞ偉大なドグマチカーであつたのみならずまた偉大な基督教的な神祕思想家であることが最も強くあらはれてゐる。學術的な臆説でもなく、文學的な修飾でもなく、たゞ事實に符合するものとして、私はイタリアの商人の若い息子のサン・ダミアノに於ける試練の時期の感情が羅馬書の第八章のことばにあらはさ



れてゐるのを見出すのである。

「この故にイエス・キリストに在るものは罪せらるゝことなし、それは活かす靈の法はイエス・キリストによりて罪と死の法より我を釋せばなり。……それ律法の義は肉に従はで靈に従ひて行ふ我らに成就せんがためなり。もし肉に従ひ役へなば死ぬべし、もし靈によりて身體の行爲を滅さば生くべし、凡そ神の靈に導かるるものはこれすなはち神の子らなり……聖靈みづからわれらの靈と、もにわれらが神の子らたるを證すわれら子たらばまた後嗣たらん、則ち神の後嗣にしてキリストと、もに後嗣なるものなり、われらもし彼と、もに苦しみを受けなば彼と、もに榮えを受くべし……そは神は預め知りたまふところのものをその子の狀かたちに效たごはせんと預めこれを定む……」

サン・ダミアノに於ける一月のあひだにあつたこととして、我々に傳説のなかに定まつた年代の論料なしに残つてゐる一つの出來事は添へられなければならない。ある日人はフランスがアッシジの下なる平原にボルチウンクラ、またはサンタ・マリア・デリアンジュリと呼ばれた一つの古い小さい禮拜堂の近くをさまよふのを見た。彼はあたかも大いなる悲しみに覆はれたやうに歎きつゝ、涙をながして堂のあたりをさまよつた。一人の通りかゝりの人は彼に歩みよつて、情ふかく何ごとかあつたのか、何ゆゑに彼は泣くかと問うた。そしてフランスは答へた。「私は私の主イエス・キリストの惱みのために泣きます、そして私はこのために世界中をさまよひそして泣くことを恥ぢとしますまい。」この言葉に見知らぬ人もいたく動かさ

れ、彼もまた涙をながしはじめた、そして彼らはともに泣いた。<sup>4</sup>

かやうにしてアッシジのフランススには、肉に従はずして靈にしたがつた生活がはじめられた、そしてそれはつひに彼がもつとも大いなる、人として到りうるかぎりに於ける、イエス・キリストの十字架に磔けられた姿とおなじくされた姿に到るまで彼をますます高く導くべきものであつた。

1. *Tres socii*, cap. V. n. 14.

2. *Tres socii*, cap. VI. n. 16. Celano, *Vita prima*, I. iv.

3. Celano, *Vita prima*, I. v. *Tres socii*, VI. n. 16.

4. *Tres socii*, cap. V. n. 14. *Speculum perfectionis*, cap. XCII.

## 七 家を去る

一二〇七年の四月のある日、ピエトロ・ディ・ベルナルドネは彼の店の帳場にすわつてみた、表の町からは騒しい物音がはじまつた——大ぜいの聲が叫んだり、呼んだり、また笑つたりしてゐるさわぎ、それはやうやく近づいてきた、それはすぐ傍の角まできてゐるやうに思はれた。老つた商人は番頭の一人を手招きして何事であるのか走つて見てくることを命じた。

“Un pazzo, messer Pietro!”と番頭は心にもかけぬやうに答へた、「どこかの白痴です、それを子供が逐ひ



まはしてゐるのです。」

番頭はまだしばらくのあひだそこに立つてゐた、やがてこなたを振りかへつたときその顔は眞蒼であつた、彼はその狂人がだれであるかを見た……

一秒のうちにビエトロ・ディ・ベルナルドネは戸口に立つて、そして今家のすぐまへにきた騒しい群集のまんなかにも彼の子、彼のフランススを、彼があつたやうにさまざまに未来をそのために夢み、あのやうに輝やく希望をつないでゐた彼の長子を見だした……そこに彼はつひに歸つてきた、嘲けりわらふ行列をしたがへて、青ざめて、瘦せおとろへて髪をふりみだし、窪んだ目のまはりに暗いかげの環ができ、そして投げつけられた石に血を流し、子供らが浴せかけた町の泥と塵埃に汚れて——これが彼のフランススであつた、彼のまなこの誇り、老いの扶け、彼の生涯のよるこび、そして彼の慰さめであつたわが子——かやうなことにまでならうとは、こゝまですべてかの愚かしい諷はれた思想が彼を誘はうとは……

憂ひと恥かしさ、そして怒りけ殆どビエトロ・ディ・ベルナルドネを窒息させるばかりであつた。ますます近く群集は叫びながら、さわぎながら近よつた——容赦なく笑ひながら彼らは階段のうへに立つてゐるビエトロに呼びかけた、「見よ、ビエトロ・ディ・ベルナルドネよ、お前の可愛い子、お前の立派な騎士様をこゝへ連れてきたよ、アブリアの戦から凱旋して立派なお姫さまと王國を半分頂戴しておいでになつたところだ！」

老つた商人はもはや彼の心を抑へてゐることはできなかつた。彼は涙を出さないためには怒らなければならなかつた。荒々しい獸のやうに彼は群集のなかへ飛びこんで、右に左に打つたり蹴つたりして、群集が恐れて散るまで暴れた。ものも曰はずに彼はわが子を捉へて、それを彼の両手でしつかりと抱きあげた。怒りは老つた人に殆ど巨人のやうな力を與へた、怒りながら、齒をくひしりながら、彼はフランススを捉へて、家中を通つてつひに一つの暗い穴倉のなかにきて床のうへに彼を投げつけた、彼はまったく力なく、ものも覺えぬ子をそこに押し籠めて、その戸を彼は鎖した。手を震はせながら彼は鍵を帯皮に挟んでそして業務に回へつて行つた。

ビエトロ・ディ・ベルナルドネは息子の新たにきた發狂を癒すために一つの力つよい藥すなはち禁錮を用ゐることに希望をかけてゐた。くらい拘禁のうへに彼はそのため苛酷なるパンと水の献立を添へた。彼はかうして息子の弱點に達するつもりであつた、子供のときから美食を好むことを彼は知つてゐたので。けれどむかしの日は去つた、フランススは別人となつた——彼はその食べるものに、あまりに味のよいときにはわざと灰を振りかけて、彼の兄弟らにむかつてわが「兄弟なる灰は純いもの」であると笑ひながら説明したところに近づく道にあつた。そしていく日かすぎたあとで主人のビエトロはまた旅に出かけなければならぬことになつたとき、ピカ夫人は禁錮の扉を開いて、禁錮と饑ゑをもつて爲しえなかつたことをこたびは涙と懇願をもつて成就しやうと思つてゐたとき、彼女はわか子がまだたゆまず、ひるまずに



たゞいくらかでも彼の信念のために悩みを受けたことを悦びとしてゐるのを見た。

彼女はフランスが彼の新しい生活棄てる心のないことをたしかめたのち、そして彼女は良人の不在を幸ひに囚はれ人を放してやつた。そして鳥がおのれの巢へかへるやうにフランスはたゞちにサンダミアノなるかくれ家へ歸つた。

ビエトロ・ディ・ベルナルドネはまもなく彼の旅から歸つてきて、その檻がからになつてゐるのを發見した。再びサンダミアノに行つて彼の子をさがし出すことの代りに、彼は法律にたよらうとした。彼は町の議官らによつて、誤まれる彼の子が相續人たることを廢めるか、また少くも彼をここから逐放することを考へてゐた。そのうへに彼はフランスのもつてゐるべき金をすべて取り返へすことを要求した。母はその子に何ももたせずに外へ遣ふことはしなかつたらしく、そしてファミリーニョの商ひの金はそのまますべて費されなかつたらしかつた。

年鑑記述者マリアノのことばによればビエトロ・ディ・ベルナルドネは *Reipublicae benefactor et provisor*

「共和市の恩人にして保護者」——市の最大の名譽職の一人であつた。それ故その當路者がたゞちに彼の請願を容れて、そして市の公けの使者がフランスを逮捕するために遣されることは容易であつた、そしてフランスはこの召喚に應ずることを拒んで、そしてかう答へた、「神のめぐみによつて私は今は自由な人であり、議官のまへに出る義務をもたない、何となれば私はたゞ最高の神の僕である。」サバチエ氏が注意

したことであるが、この答へはフランスがこのとき下級の聖禮を受けたのちであつて、教會のフォルムに隸屬してゐたのだとよりほかには解釋できない。彼とアッシジの僧正との親しい關係もまたこの臆測に十分な確からしさを與へるのである。

そのとき父は市の公會堂で使者の歸者の歸るのを待つてゐたごとく思はれる。議官らはたゞちに遺憾なことながら彼らはこの事件に關することはできないことを彼に知らせた。ビエトロ・ディ・ベルナルドネは、それでも、始められた法律の制裁がかやうにして止められるのを許さうと欲しなかつた、そしてまもなく彼はその告訴をピアツァ・デル・ゴスコヴドなる僧正の邸に行き、市の教職の長のまへに運んだ。僧正は事件を受理した、そしてつひにある定められたときに父と子は僧正のまへで會見した。

はじめからどちらの側に彼の同情があつたかは明らかであつた。フランスにその父から受けて未だ所有してゐるだけの金を悉とく返へせと僧正の勧めた動機はビエトロ・ディ・ベルナルドネには決して快くないものであつた。彼は青年に曰つた、「もし汝が神に仕へやうとする心ならば汝の父に彼の金を返さなければならぬ、それはあるひは不正をもつて儲けたものであるかもしれない、そしてそれゆゑにそれは教會のために用うることはできない。」

多数の傍聴者が市の重だつた人々の一人とそしてその狂氣した子とのあひだの興味ある訴訟を聴きここへ集つてゐる面前でいはれたこの言葉は老いたる商人の心をなだめるものではなかつた。みな人の目は



彼からその子に移つた、子は僧正を間にして父と向ひあつてゐた、そしてそのときはまた彼の價の貴とい  
 緋色の衣を着てゐた、そしてこゝに一つのおどろくべきことが起つた、一つのいままでに世界の歴史のう  
 へに一たびも起らざりし、そしてふたゝび起ることはなかるべきもの、それをのちの幾百年のあひだ畫家  
 たちは描き、詩人たちは歌ひ、牧師たちはそれについて説教すべきふしぎが起つた。言葉なく、けれど目を  
 輝かしてフランスは立ちあがつた。「わが君、」彼は僧正の方へ向いて曰つた、「私は悦んで彼から受けて有  
 つてゐる金を彼に與へるばかりでなく、彼から着せられたこの衣服をも與へませう。」そして何人も彼が何  
 をしやうとするのか考へつく暇もないあひだに、彼は審判の間のある一つの室へ隠れた、そして  
 つぎの瞬間に彼は赤裸かたゝ毛を織つた帯を腰に纏つて、そして残りの衣服をすべて片手に攫んで再び  
 顯はれた。人々はみなわれ知らず立ち上つた——ピエトロ・ディ・ベルナルドネと彼の子フランチェスコと  
 は顔と顔と向ひあつて立つた。そして青年は激しい感情のために聲を震はせて語つた、彼は遠くに何人か  
 をあるひは何ものかを見つめるやうに聴衆の頭のうへを見渡した。

「聽いて下さい、あなた方はみな私が曰ふべきことを聽いて下さい。これまで私はピエトロ・ディ・ベルナ  
 ルドネと父と呼びました。今私は彼の金と彼から受けとつた衣服をみな彼に返しました、そしてこれから  
 のちは私は父ピエトロ・ディ・ベルナルドネとは曰はずして、天に在す我らの父と言ひます！」  
 そしてフランスは屈んで緋色の貴とい絹でつくつた衣服を彼の父の足もとに横へそのうへに一堆ねの

金を置いた。かつよい感動は列席した人々のなかを走つた。多くの人は涙をとどめなかつた、僧正さへ目  
 に涙をたゝへた。たゞピエトロ・ディ・ベルナルドネは動かされなかつた。石のやうな顔をして彼は屈んで金  
 と衣服を取りあげた、怒りで眞蒼になつて、けれど一言も曰はず外に出た。そして僧正は進み出てフラン  
 シスに近よつて、彼の上衣をひろげ、赤裸かの若人をその白い襷に包み、彼をひしと胸に抱きしめた。今  
 よりはフランスは彼のすでに永いあひだ願つてゐたごとくに——たゞ神の僕であつてそして教會の人で  
 あつた。

最初の強い感動がしづまつたとき、僧正はひとりフランスとよもに残された、彼は若人のために着物  
 のことを考へなければならなかつた。僧正の住家にはもと園丁のもちものであつた古い上衣が見出された、  
 フランスは歡びをもつてそれを受けとつて、そして僧正の家を出てゆくまへに彼はどこかで見つけた白  
 墨の片で貧しい衣の脊に一つの十字を描いた。

それは一二〇七年の四月であつた、かくてピエトロ・ディ・ベルナルドネの子は福音のことばに文字通りに  
 従つてすべてのものを棄て、そして十字架を負つてイエスに従つた。ウンブリアの四月、晴れやかな太陽  
 は日ごとにまばゆく青い空からたらず。空氣はみづくしく健やかで、冬のおひだの降りつゞく粗い雨に  
 洗はれぬ。道はまだほこりもたてずして、固く、そしてそのうへを旅してゆくのに心安い、そして野の  
 オリブの木の下に麥は延びて緑に光つて、まだ半ばまでしか生長してゐない、そのあひだにはなやかな赤



い罌粟がみだれ咲く。それはイタリアの最も美しい季節であつて、あの病的な、熱せられた熱病を孕む秋よりはるかに好いときである。

このやうな四月の日のよくてつた朝であつた。ピエトロ・ディ・ベルナルドネの子は園丁の古上衣を着てアツシジの僧正の家を去り、そしてひろい世のなかへと、恰かも聖書に曰ふところの「旅人や順禮」のやうに歩み出た。各人の生活はみなそのもつとも奥なる内部の意志の結果である、そしてそれ故にフランスは彼があつたやうに永いあひだ求めてゐたものに達した——彼がローマに於いて試みたもの、そのためにウンブリアの洞の孤獨のなかで祈りしたもの——即ち赤裸かにて苦しみを受ける救世主のみちを自ら裸かとなつて苦しみつづつ従ふことを許されむことを。

フランスは彼の幼なき日の故郷から、彼の青春の町から、父と母から、親族と友から、すべて彼の過去とそして彼のすべての思ひでからはなれてさまよひ出た。彼はサン・ダミアノへも、また廣野へ下つてポルチウンクラの小さい禮拜堂へも向はなかつた。人の生涯のうちにはたましひが自然の與へるものうちで最も大きいもの——海があるひは山にあらがれる時がある。フランスはモンテ・スバジオの方角にアツシジの門を出て山の方へゆく道をたどつた。そして鋤に手をかけてゐる人について聖書に書いてあることばを思ひ出して、彼はアツシジの塔や屋根がつひに彼のうしろに見えなくなつて、そして彼がたゞひとりモンテ・スバジオの高いところにきて、まだ葉のない榎の森かまたは荒れた石の原へ到りついたときまで決

してうしろを見かへらなかつた。こゝから彼はひろく世界をながめわたした、スポレトの谷は彼の足の下に横はつて恰かも風船のうへから見下したやうに、その白い路すじや、きら／＼した川や、野はまたオリブの木が規則正しく植ゑられて、玩具のやうな家々や寺が見えた。そして麓なるアツシジからのぞめば地平線を縁とつてゐた山脈は沈んだやうに低く見え、そしてそのうしろにそれよりあはい青さでなほ高い山はその頂を擡げる——それは遠くはなれたアッペンニの山脈である。

フランスはグッピオのかたへ道をとつた。この町はアツシジから直徑はわづか四五哩しか離れてゐない、そこには彼の少年時代よりの友たちの一人が住んでゐた——恐らくは彼と、ともに洞穴の寶をもとめに行つたその友であつたらう。山のなかをさまよひゆくとき時を費やすことは避けがたい、日はすでにくれそめたとき、フランスはまだアツシジとヴァル・ファッブリカを距つる森の茂つた山の脊を越すことができなかつた。それでも彼はたのもしげにさまよひつゞけて、そしてフランス語で神の讃へを歌つて行つた、いつも彼が生涯の最もたのしいときにする習ひであつたやうに。そのときであつた、地のうへに散つた枯葉はがさ／＼と音がして、小枝の踏まれるのが聞えて、そしてものかげから一群の山賊は嚇かすやうに「そこにゐるのは誰だ？」と呼びながら現れた。すこしも動ぜずにフランスは答へた、「私は偉大なる王の使者である。けれど汝らは何をしやうといふのか？」剽盜らはしばしこの見すばらしい上衣を着て、脊に白墨で十字架を畫いたふしぎな姿を見まもつてゐた、そして彼らは彼をそのまゝ放してやることにきめた、け



れど命を拾つたのだといふことを思ひ知らせるつもりで、彼らはフランスの手や足を捕へて、彼を一つの穴のなかに投げ入れた。そこには四月の太陽にも拘らずまだ深い雪があつた。「そこに寝てゐる、王様の使者などと吐しやがつた土百姓め！」さう曰ひすて、彼らは立ち去つた。彼が雪のたまつた穴からとかくして這ひ出るのは容易なことではなかつた、そしてまへのやうに神の讃へを歌ひながら彼は山をこえて旅して行つた。かなり時を経たのちに彼は一つの小さなベネディクト派の修道院にたどりついた、そこで彼は庖厨で働くかほりにしばらくの宿りを恵まれてゐた。こゝに彼は幾日か止まつて、そして修道僧たちの着古しの衣類を貰つて彼の足らはぬ着物の補ひにするつもりであつた。そのとき僧徒らは彼にたゞ乏しい食物をあたへるのみであつた、そして最初の傳記著者が曰ふやうに、「怒りに驅られたのではなく、たゞまつた必要に迫られて」彼はグッピオへ旅立つた。その修道院の院主がのちにフランスが名高い人になつたのちに来て謝罪をしたといふことはいかにもまことらしく聞える、けれどこのときフランスが名高くなるなかつたならば、そしてその正直な院主が彼の冷酷な待遇については何も心にかけてなかつたらうといふこともまことらしく推察される。けれどなほ聖ベネディクトは彼のつくつた團體の掟に「旅人をばキリストのごとく迎ふべきなり」と命じてゐるのである。

つひにフランスはグッピオに着いた、そして彼は友を訪ねた、その友から彼は思ひどほりの衣服を恵まれた、それは隠者の着るのと同じものであつて、身に纏ふ腰帶と靴と杖が添へてあつた。その他には友情

の好意を受けなかつた、そして傳記著者らはいかにしてフランスがグッピオの病院に住んで、そこで癩病患者たちの足を洗ひ、その傷を繻帶し、腫物を手當し、膿を拭ひ、あるときはその腐爛した瘡に接吻したかを語つてゐる。

けれどそのあひだにフランスの特別な事業は、ほ未だアッシジの側らのサン・ダミアノに彼を待つてゐた、そしてある日彼は再びそこに來た、神が彼に爲せとてそなへられた仕事をはじめるために——寺院を修復するために。彼のゐなかつたあひだにさまざまの噂さは速やかに廣まつたやうに思はれる、そして例の牧師は彼が再び顯はれたときそれを喜ぶどころではなかつた、そしてフランスは僧正が彼に言つた言葉借りなければならなかつた、それによつて彼が教會の當路者から免許を得たことは確められた。

今まで一たびもフランスに思ひ浮んだことのない問題は彼のまへにそのまつたき散文的な實際さで迫つてきた、それは金の問題であつた。サン・ダミアノを再建する金はどこから出てくるのであらう？ 必要に應じてはフランスは錢を用ゐることはできた、けれど石や漆喰は唯では得られなかつた。

けれどその後者をフランスは試みた——空手で必要なだけの石や石灰を得ることを。今彼は彼の巡歴詩人であつた時代に學んだものを利用することを思ひついた。ある日人々はフランスが隠者の衣を纏つてアッシジの市場に現はれて、そして異様な巡歴詩人のやうに人々のまへで歌ふのに逢つた。そして彼が歌ひ終つたとき、彼はその聴衆のなかを廻つて乞うた、「私に一つの石を下さる方は天で一つの酬いを受けま



す、」彼は曰つた、「私に二つの石を下さる方は二つの酬いを受けます、私に三つの石を下さる方は三つの酬いを受けます。」多くのものは彼を嘲り笑つた、けれどフランスはたゞ笑つて答へた。他の人々は、傳説には、「あのやうなはなはだしい快樂と虚榮からうつてかやうに神の愛に酔ふまでに彼が心を回したのを見て涙を流した、」と語られてある。フランスはかなり多くの石を集めることができた、そしてそれを彼は肩にのせて運んで行つた。彼はまたみづから石工の仕事もした、そして通りかゝつた人々は彼が仕事しながらフランス語で歌つてゐるのを聞いた。もしだれか立ち止つて彼を見てゐるものがあれば、彼はそれに向つて呼んだ、「あなた方はそれよりも私と一しよにサン・ダミアノのお寺を建て直ほすの手傳つて下さる。」

このやうな大いなる勤勉と、大いなる己れを犠牲にした行爲はサン・ダミアノの老いた牧師を感動せしめずにはゐなかつた、そしてフランスに彼の感謝を示すために、彼は夕ごとに何かしら彼の足らはぬなからも好い食物を調へ出して、彼をもてなさうとした。これはしばらくのあひだは事なくつゞいた、けれどある美しき日にフランスの心に疑ひがふと浮んだ、もし彼が浮世に出て行つたとしたならば、そのときかやうな親切な宿主を見出すことができやうか。今私のしてゐることは私がねがつてゐたとき、貧しき人として生きることではない。否まことの貧しき人は鉢を手にもつて戸から戸へおとづれて、そして何ものでもあれ善き人々の與へるものを受けるのである。そしてこれが今より私の爲さなければならぬこと

である！

つぎの日晝の鐘がアッジに鳴りそして人々が食卓についてゐるときとなるやいなや、すでにフランスは鉢を手にとつて町中を巡りに出た。彼は戸ごとに敲いてそのおほくから何ものかを恵まれた——一匙のスープ、すこしばかり肉の附いた骨の片、パンの屑、サラダの葉の残り、ありとあるものが一つに混つてゐた。そしてフランスがこの物乞ひの歩みを終つたとき彼の鉢は充たされてゐた、けれどそれは考へ及ぶかぎりでは最も食欲を進めない混ぜものであつた。まつたく途方にくれながら若人は一つの階段にうづくまつて腰を下しながら鉢のなかを見遣つた、それはまるで犬の餌の一皿に似てゐた。厭はしさに殆ど嘔氣がこみあげてくるのを抑へて、彼はまづ一口を唇に上せた。

そして見よ、それは恰かもかつて癩病者に接吻したときと同じであつた。彼の心は聖靈の妙へなる甘さにみたされた、そして彼にはかつてこれよりも美味なる食物を味つたことがなかつたやうに思はれた。我を忘れて彼は走り歸つて牧師にこのさき彼は自分でも食べるものを十分に得ることができると語つた。

かやうにしてピエトロ・ディ・ベルナルドネの子は人々に物を乞ふ身となつた。そして老つた財に誇る商人の名譽心にとつてはこれはまへにあつたことのすべてよりも一層甚しい打撃であつたことは想ふことができる。このときから彼はわが子の姿を見ることを堪へ忍ぶことができなかつた、そして行き逢つたときには荒々しい罵りと詛ひを叫んだ。フランスはたしかにこの怒りの破裂に對してはまつたく心にかけな



つたわけではない、いづれにしても、このときからフランシスはアルベルトといふ名の老つた乞食とよもにこの巡行に出た、そして二人してビエトロ・ディ・ベルナルドネに出逢つたときにはフランシスは彼の伴侶のまへに跪いてそして曰つた、「私を祝福して下さい、父よ。」「御覧なさい、彼は老つた商人の方へ向きなほつて曰つた、「神様は一人の父を私に下さいました、詛ふあなたの代りに祝福する父を。」

フランシスの弟アンジェロもまたこの好んで爲つた乞食と寺院建設者を迫害するのに與かつてゐた、ある涼しい朝彼はフランシスか賤しい装ひをしてアッシジの寺の一つのなかでミサを聴聞してゐるのを見とめた。そしてアンジェロは彼の友に曰つた、それは彼の兄に聞こえたくらゐ聲高かつた、「行つてフランシスに尋ねて見給へ、汝の汗を一錢ばかり賣つてくれないかと。」フランシスはそれを聞いてフランス語でかう答へた、「折角ながら私はそれを高い値をもつて私の主、救ひ主に賣つてしまひました。」

そのあひだにサン・ダミアノに於ける労働は速やかに拂つた。それは再建といふよりは片付けといふべきものであつた。仕事の終結としてフランシスは牧師に祭壇の燈明に供へる油を十分に贈るつもりであつた、ことに彼は聖禮用の祭壇のまへの永しへの燈火のことを思つてゐた。このために彼はアッシジを巡つて油を乞ひ求めた、そしてそのとき彼は一人のむかしの友の家に来た、そこはまさに宴の最中であつた。そのときにはかに彼の勇氣は挫けた。父に背きそしてモンテ・スバジオの山賊をも怖れなかつたその人は彼の昔しの友だちに見られるのを恥ぢた。あるひは彼はこのときにすべての同心の人の經驗する束の間の、いひし

れぬ壓迫の刹那にあつたのであらう、あとに見すてたものは輝やく明らかさをもつて、自然な、正しき、合理的なものとしてあらはれる、そして、新しい思想と新しい生活にはかに他から教へられた、わざとらしい、装はれたもの——それは決してその人がまつたく固有のものとして所有することのできない、けれどもいつまでも彼が徒らに自らを矯め強ひなければならぬものごとくに見える。あるひはつねならばフランシスの悦んで着てゐた隠者の服にはかに彼の目に笑ふべき道化衣裳のやうに見えたかもしれない、あるひは彼は今はすぎたあの歡樂の日々に彼が染め分けの花やかな衣裳を纏つてゐた昔に比べれば、あのとよりもつまらない人となつたやうに思はれたかもしれない。……

もしも彼の内部の戦ひがこの時にあつたとしてもそれはたゞすこしのあひだだけであつた。傳説の曰ふところによれば、彼は宴の家を幾歩か歩みすぎた、けれど彼自らの心弱さを悔い、歩みを回してすべての彼の友だちにいかに彼が心弱かつたかを懺悔し、そして同時に神の愛の名に於て彼にサン・ダミアノの燈明に供へる油のために喜捨を乞うた。

この労働を終つたのちにフランシスは、懈つてあらざらむために、また同様なことをはじめた、それは今はアッシジの中にあるところの、そのころは市壁の外にあつた聖ビエトロの古いベネディクト派の寺を修復するのであつた。そしてつひに彼はあの小さい古びた野中の堂の再建にとりかゝつた、その堂のまへでは人があるときキリストの惱みのために泣く彼に逢つたことがあつた——これこそボルチウンクラ、ま



たの名はサンタ・マリア・デリアンジェリ、「天使たちの聖母」とも呼ばれるところである。フランスはこゝにやゝ永きあひだの棲家としてこの小さい堂の近くに住まつた。堂はサン・ダミアノと同じくモンテ・スバジオの上なるベネディクト派の修道院に所屬してゐて、そして三五二年に聖地から歸つてきた巡禮たちによつて建てられたと曰はれてゐる。

彼がいつも寺院を物質上から修覆することをもつて彼のまことの生涯の職業と考へてゐたことは疑ひを容れない。さらに後年に於いて二二三年に於いても彼は「祝福されたる處女」の榮えのためにサン・ジェミニとボルカリアのあひだに一つの堂を建て、そして二二六年には、彼はアツシジなるサンタ・マリア・デ・ル・ゴスコヴドの新築のときに少なからぬ力を盡した。すべての謙つたたましひたちのするやうに、彼は何をなすかといふことはいかにして爲すかといふことよりも大切に考へらるべきものでないことを意識してゐた、そして彼はポール・エルレーヌが數世紀のちに「La vie humble aux travaux ennuyeux et fatigues」(艱みおほきまたたやすきさまざまの労働なる謙れる生活)と呼んだものに惹きつけられる心ちがした、この生活、それはその單調とそしてそれに大いなる事業の缺けてゐることの故にこそ、それだけ多くの愛を要し、そのうへに、小さき有限の事物の連續のうしろに神のかぎりなき意志を知り、しかして働らきの日のあびたに日曜の心ちを保つために大いなる能力とを要求するのである。

“...Rester gai quand le jour, triste, succède au jour,

être fort, et s'user en circonstances viles.”

(悲しく日は日につげどつねにたのしく、

力つよくして、悪しき事情にも身を行ふ。)

フランスはこれを爲しうる強きそして樂しき精神の人々に屬してゐた、そして彼の目のまへに彼の將來の透視畫の如く一つの生活の形を定めつゝあつた、それはすこしのまたはまつたく乏しき粗惡のパンのための日中の労働と、そして道のほとりやまたは山々のあひだの禮拜堂や會堂に於けるさびしき夕の祈りとさびしき朝のミサと聖餐禮とのあひだにわかれたきよき生活であつた。

何となれば、ミサ、すなはちイエスの惱みと死の紀念のためにされる祭式の犠牲物はすでにこのときフランスにとつては彼の宗教的生活の中心であつたのである。彼が彼の遺書に書いたのはこの彼の同心の初年についてであつた、「こゝに世界に於ては我は最高なる神の子を見ることなし、たゞ彼の最も聖なる肉と血のみ、しかしてこれら最も聖なる神祕をば我はそれゆゑ何ものよりも敬ひ讃へむと欲す。」そして彼の作つたうちで最も古い、*Admonitions*、即ち彼のつくつた團體に屬する兄弟らに與へた「戒め」のうちにも上に記したものと符合するものが見出される。「すべてイエス・キリストを肉に於て見、しかれども精靈によつて、またその神性のうちに見ることなくして彼がまことに神の子たるを信ぜざるものは死後の罰あらむ。またキリストの肉の聖禮が祭壇のうへに於て主の言葉をもつて、しかして牧師の手によりてパンと葡萄酒



の形に於て潔めらるるを見、しかれどもそれを精霊と神性に於て見ることなく、まことに我らの主イエスキリストのもつとも聖とき肉と血たるを信ぜざるもの、これもまた死後の罰あり。」

十三世紀のはじめにはカトリックの牧師がみな日ごとにミサを讀誦するといふのは一般の習慣になつてゐなかつた。日曜日かまたは特に請はれたとき、そして大切な祭日にのみミサは擧げられた。このやうなときにはフランスは必ずそのところに出席した、そして彼を悦ばすためにサン・ダミアノの牧師は屢ば朝早くにボルチウンクラまで下つて、聖禮を新たに建て直された禮拜堂のなかで行つた。

たれしもイタリアに住んだことがあつて、そしてイタリア人の宗教的生活を眺めたことのある人ならばこの早曉の祭式のふしぎに印象の深い力を經驗によつて知つてゐるであらう。曉の薄明りがあるときは沈みゆく半月の光に、もしくははるかに山々のうへに輝やく寂しい大きい星の光にうすれてゐるなかから人は寺院のなかへ歩み入る、そこには燈火はそのあかあかした輝やきを祭壇の繪のうへに投げ、そして牧師は華やかな僧衣をつけて祭壇の下に立つて、大きく嚴そかに十字の印を畫いて、そして嚴そかに聲低くミサの祈りをダゴドの妙へなる第四十二の歌ではじめる。そして輔祭の口から應へは聞える。聖とき儀式は速やかに進んでゆく、寺院の深い沈黙と水々しい朝の平和のなかにはつきりと牧師の唇からさやくことは聞こえる。『Hoc est enim corpus meum……Hic est enim calix sanguinis mei……』「これ即ちわが肉身なり、……これすなはちわが血の盃なり……」

そしてミサの鐘がひびきそしてふたゝび響きわたれば、跪ける會衆の低れた頭のうへに高くその白いパン、輝やく盃は——牧師の手によつて、世のすべての罪を負ひたまふ神の小羊として供へられたキリストの肉とキリストの血は擧げられる。人はこのやうなときにあたかも力つよい翼にのせられたごとく己れみづからと惱みのうへに高く擧げられ、そして人はおのれの信仰を感じ、人は敢へて希望をいだきいつまでも神を愛することを、神の意志をなし、たゞ彼のみにな仕へ、そして決して偽れる神々に禮拜しないことを欲する……

ボルチウンクラの小さい禮拜堂に於けるかやうなある朝の聖禮のあひだに、それは一二〇九年の二月であつた、フランスは福音の一節を聽いた、それは彼に彼には二年まへのサン・ダミアノに於ける言葉に比べては、更に新しくしかしてなほ明瞭なる主の使命であるごとく思はれ、そしてそれゆゑにそれは彼のそののちの生活の全部を決定するものとなつた。その日は聖使徒マタイの祭日、二月二十四日であつた、フランスは牧師がつきにかゝぐる福音を讀むのを聽いた、(馬太傳十、七一十三)「この時イエス弟子らに曰ひ給へり、往きて天國近きにありと宣へ傳へよ、病む者を癒し癩病を潔くし死にたるものを甦らせ鬼を逐ひ出すことをせよ、爾ら價なしに受けたればまた價なしに施すべし、爾ら金または銀、または錢を貯へ帶ぶるなかれ、行囊たばこくろまた二つの裏衣履杖もまた然り、そは工人のその食物を得るは宜なり、凡そ郷邑に至らばそのうちのよき人を訪ねて再び往くまではそこに留まれ、人の家に入らばまづ平安を問へ、その家もし平安



を得べき者ならば爾らの願ふ平安はその家に至らむ、若し平安を受くべからざるのならば爾らの願ふ平安は爾らに歸るべし。」

そしてフランスがのちに心のうちにそのボルチウクラの聖マタイのミサのことを思ひかへすとき、彼は單にその日の聖書の讀誦を神の示しとして考へてみた。彼の遺書には記されてある、「最も高きもの自らわれ聖とき福音に従つて生くべきことをわれに示したまへり。」そしてまた、「主はわれにわれらの曰ふべき挨拶のことばを示したまへり、「主は汝に平和を興へたまはむ。」

傳記著者たちはみな彼がこのことばに耳を傾けて聴きそして牧師がそれを彼に隈なく説きあかしたとき彼は我を忘れて叫んだとつたへる、「これこそ私の願ふところのものであります、これこそ私が私のたましひをもつて私の生涯のあひだ従つて行かうと願ふものであります。」あたかも一つの顯現に於けるがごとくフランスは主がこれら彼の弟子たらむとするもの、まつたく彼のものとなるをねがひ、自らを彼のために犠牲とし、そしてたゞ彼のみに仕へむとする人々に何を求めたまふかを——即ち彼らが使徒となり、あらゆる益なきものを離れて、地上のわづらひなく、たましひに歡呼しつゝ世界のなかに昔ながらの、眞率なる、たのしき使命を「悔い改めよ、天つ國は近きにあり！」と呼びつゝ進み行くべきことを覺つた。<sup>5</sup> 寺を建つる人そして隱者なるフランスはこれよりは使徒しかして福音傳道者なるフランスとなつた——悔改と平和の福音を宣ふる人と。彼は堂のそとに出づるや否や、彼の靴をぬぎ、杖を投げすて、寒さ

を防ぐために着てみた外套をぬぎすてた。帯のかはりに彼は一條の繩を腰にしめた、そして近在の農民が着るごとぎ褐灰色の長い上衣を纏ひ、頭のうへに覆ふべき頭巾をつけて、彼は彼の跣足をもつて世界に歩み出る準備ができた、使徒たちがさまよひたまひしごとく、そして皮を迎へることをねがふ人々に主の平和を齎らすべく。

- 1. Tres socii, cap VI, n. 19.
- 2. St. Bonaventura, Legenda major, cap. II, n. 6.
- 3. Tres socii, VII, n. 24.
- 4. Tres socii, VII, n. 23.
- 5. Celano, Vita prima I, ix; Tres socii VIII, n. 25. X, n. 33.40. Bonaventura III, 1.



第二編 福音を傳ふる人

第二編 福音を傳ふる人

七



*Pacis et poenitentiae legationem amplectens.*

(平和と悔い改めの使命を負ひて)

*Legenda Trium Sociorum*

## 一 最初の弟子たち

*Præco sum magni regis.* 「われは偉大なる國王の使者なり」かう曰つてフランスは二一〇七年の四月の日モンテ・スバジオの森のなかで山賊らの問ひに答へた、そしてこのことばをもつて彼はこれよりの生活全體のためにモットーと合詞をあたへたのであつた。

ポルチウンクラの聖マタイのミサのちに於いてはじめてこの使者の使命がいかにしてその終局に達せられるべきかが明らかになつた、そして彼はそれを始めることに一刻も猶豫しなかつた。

その日からアッシジには一つのめざましい光景が見られた。あるひはかしこにあるひはここに、市の町々または廣場に一人の姿が現はれた、農夫の着る染めない毛の灰色の上衣を着て、頭の上に一つの頭巾をかぶり、そして腰には繩を結んでゐた。彼はそのゆくとき出逢つた人々にみなこのことばをもつて挨拶した。「主は汝に平和を與へ給はむ」そして彼は人々の群れあつまつてゐるのを見れば、そこへ歩みよつて、跣足のまゝ一つの階があるひは石のうへに立つて説教をはじめた。

このあやしき人こそはビエトロ・ディ・ペルナルドネの子であつた、彼はかくして福音を傳ふる人としての労働をはじめたのであつた。彼の曰ふことは極めて單純であつてそして巧みさはなかつた——それはたゞ



「このことについてであつた、即ち人にとつて最高の善としての平和、神の命をまもることによつて得られる神との平和を、正しい行ひによつて他人との平和を、良心の證覺によつて己れとの平和を得ること——たゞ平和についてのみであつた<sup>1</sup>。

一年まへに彼が公けにふるさとの市へ入つてきたときフランスを迎へた笑ひは、僧正の家に於ける一場の光景ののちには鎮まつたやうに思はれた。人々は心をとめて、あるひは尊敬の心をもつてさへも、彼のことばを聴いた。そして彼の曰つた言葉は忘れなかつた、それらは生命の力ある種子のやうに多くの受容性の鋭い胸のなかへ落ち、多くの今まで力つよく、けれどおぼろげにより近く神とともに己れを生かすことにあこがれてゐた心々のなかに落ちた。

かやうにしてフランスはしばらくのあひだに弟子を見出した。その第一としては我々は「一人の信心篤きすなほなるアッシジの人」のことを聞いてゐる、その名は、けれど傳はらず、そしてその人について歴史はそれ以上を知らない。歴史上知られてゐる最初の弟子はそれ故クィンタヴレのベルナルドである<sup>2</sup>。

ベルナルドはフランスと同じやうに商人であつた、そして彼よりさほど年長ではなかつたらしく思はれる。彼はけれどフランスの仲間には屬せずして、遠くからこの若き人のめざましい行ひを眺めてゐたはじめは他の多くの人のやうに彼もフランスの悔い改めやまた寺院の修覆も新しい狂熱にすぎないと思つてゐた。けれど時がたつてそしてフランスが彼の選んだ生活の状態を續けてゆくのを見たときベルナ

ルドの疑ひは最高の尊敬となりそしてあらゆる驚異は讚歎に變じた。

ベルナルドはこれまでたしかにまつたく規則正しい、善良な市民の生活をしてゐたのであらう。今彼をとらへたものはサバチエがあるところに美しくも *la nostalgie de la sainteté* (聖者の境涯をしたふ郷愁) と名づけた感情であつた。聖といふ火は彼のたましひのなかに燃えたつた——それは基督教の深奥の核であるところの超世界的なるものへの要求、そしてたましひのためにいたづらに不安や煩ひをつくる幾千の事物をすて、もつとも欲求さるるたゞ一つのものをもとめむとするあこがれであつた。そのときに彼の胸にはフランスに従はうといふ決心が熟した——彼のごとく貧しきものとなり、彼の衣を着、そして彼の生活をしていとなまう！ わづかのものをもつて満足せむとの願ひ、それはいつまでも足ることを知らない欲望の飽きがたさと同じやうに深く超自然的な要求であるが、それは彼のむねに強くますます強く生ひたつた。けれどこれまで彼はフランスとこのことについて一たびも語つたことはなかつた、却つて彼はほかに一人の頼もしきおなじ心なるたましひを見出した、それはサン・ルフィノの寺の寺法家カウニチの一人であつたピエトロ・ディ・カッタニといふ人であつた、彼は在俗の人ではあつたけれど寺院の法律顧問としての資格をもつて教會内の特権の一つを有つてゐた。

のちの傳説にはいかにしてベルナルドがまことにフランスのもとに跪づくまへに、詭りを用ひてフランスの敬虔が眞面目かまたは装ひであるかを見出さうとしたかが語られてある。彼はフランスに屢ば



彼のもとに宿らむことを請うた——その招きを、そのとき定まつた棲家をもつてゐるとは曰ひがたいフランスは悦んで承諾した。ある夜彼はそのために賓客の寢床を彼自身の寢室にそなへしめた、そこには上流の家々の習ひとして夜中一つの燈がてらしてゐた。

「けれど彼の聖とさを隠すために、」かやうに「Chronica XXIV generalium」として「Fioretti」と一つの書は語る、「聖フランスは室に入るや否や床のうへに臥して恰かも眠れるごとく装つた、そしてしばらくしてベルナルドも同じことを爲し、深く寝入つたやうに彼は高聲をかきはじめた。そして聖フランスはベルナルドがまことに眠つてゐることゝ信じて、床より出でて祈りをはじめた、そしてまなこと手とは天に擧げられて、そして深い敬虔と熱誠をもつて彼は叫んだ、「わが神、わがすべてよ！」そしてかやうにして彼は朝まではげしく祈りかつ泣くことを止めなかつた、そして彼はたえずくりかへした、「わが神、わがすべてよ！」そしてほかに何も曰はなかつた。」

この話のうしろにまことの出来事が包まれてゐることはチェラノのトマソの簡単な記述によつて明らかである、「ベルナルドはフランスが夜多くねむることなく、祈りをなして神と聖母とを讃へてゐるのをまのあたり見た、」夜があけたときそれゆゑにベルナルドがとこしへにフランスのあとに従はうとする決心は定まつた、そして彼は彼のねがひを問ひの形にして、良心のありさまについての助言を乞うた。

「もしも何人かが主人から彼の自由に委ねられた財産を受けたとして、それが多くてもまた少くても、そ

してそれを永年手にもつてみたとしませう、そして今このさきこれを所有することを欲しなかつたときにはこのやうな場合には如何するのが最良の仕方でせうか？」

「はじめ受けたところにお返へしなさい、これが聖フランスの自明なる答へであつた。

「けれど、私の兄弟よ、この場合はかういふのです、すべて私の持つてゐるこの世の財はみな、私は神様と主イエス・キリストから戴だきました、そして今私はそれを返し納めやうと思ひます、これがあなたの仰しやつたなすべき最良の仕方です。」

そのときフランスは曰つた、

「あなたの仰せられることは、ベルナルド様、はなはだ大いなる、そして爲しがたいことであります、それ故私たちは主イエス・キリストに助言を願ひ、そして主の御心を知らしめたまふやう、またいかにしてこの企てを果すべきかを私たちに教へたまふやうに祈りませう。私たちはそれ故にたゞちにこの朝會堂に行き、そして主が弟子に爲せとて命じたまふことを福音の書のなかで讀みませう。」

このときにはビエトロ・ディ・カタニも決心を得たごとく思はれる、三人の人はうちつれてアッシジの市場を横ぎつて遠からぬサン・ニコロの寺に詣でた。寺は今短銃歩兵の營舎のあるところを占めてゐたのである、こゝに彼らは歩み入つてともに祈つた、そしてそれはててフランスは祭壇に歩みよつて、ミサに用うる聖書をとつて、開いてつぎのことばを見出した、「爾全からむことを欲はば往きて爾が所有を售りて貧し



き者に施せ、しかれば天に於て財あらむ。」なほ二たび彼は書を開いた、はじめには、「もしわれに従はむと思ふものは己れを棄ててその十字架を負ひてわれに従へ、」つぎには、「また彼らに命じけるは旅の用意に何を携ふることなかれ。」(馬太傳十九の二一、十六の二四、馬可傳六の八)

フランシスは書を閉じた、二人の方へ向きなほつて、そして曰つて、

「兄よ、これこそ私たちの生活、私たちの掟であります、そしてたと私たちのものゝみではなくて、私たちとゝもに生きむとするすべての人々の掟であります。それ故にあなたがたは行きそして今聞かれたことに爲さい！」

けれどクインタヴルレのベルナルドはサン・ジョルジオの寺の廣場、今はビッツァ・サンタ・キアラといふところに立ち、そして彼の有てるものをみな貧しき人々に分ち與へはじめた。そしてフランシスはその傍に立つて心のうちに神を讃へた。ピエトロ・ディ・ベルナルドネの代りに彼は一人の乞丐を擇んで彼の父とした、今神は彼にアンジェロよりもはるかに善い兄弟をこゝに送り賜はつた。

ベルナルドとフランシスがかくてもに立つてゐて、そしてピエトロ・ディ・カッタニがまた彼の財を集めに赴いたあひだに一人の牧師が通りかゝつた、それはフランシスがサン・ダミアノの修理のときに石を買つた人であつた。この牧師の名はシルエストロと曰つた、そして彼は石を極めて廉く賣つた——その用ゐられる目的の善良であることを考へたからであらう。彼は今ここで多額の金が施されてゐるのを見たとき

近よつてフランシスに謂つた、「あのとき汝が私から石を買つたとき、汝は價を十分に償はなかつたではないか。」この牧師の欲心に憤激して、フランシスはいきなり手をのばしてベルナルドが上衣の裾に置いた一堆の金をとり、その額を數へもせず、それを牧師の手に振り落した、「どうです、あなたはこれで満足でせう、和尚さん？」けれどシルエストロは冷やかに謝して立ち去つた。

傳説に傳はつてゐるやうにこのことは欲深い牧師にとつては新しい生活のはじまりに外ならなかつた。彼は己れの貪欲とそしてこの二人の若い俗人の示した財と金を輕んじた様子を較べた、そして「人は二人の主に仕ふる能はず」といふことは彼のたましひのなかにこれまでできてきた生活の審判のやうに響きやまなかつた、やがてやゝ永き時ののちに彼もまたフランシスのもとにきて、そして兄弟のなかに入れられむことを乞うた<sup>4</sup>。

三つの兄弟らはキリストの行ひを模倣して、彼らがすべてのことを整理したのちに、ともにアッシジを去りそしてポルテウンクラで夜をあかした。この會堂の近くに彼らはやがて一つの枝と泥をもつて編んだ小家をつくり、そこで彼らは夜の宿りを得、そして日には祈りをした。

それもこのところであつたことである、アッシジの若き人エジディオはベルナルドの回心から八日のちにまた彼らに加はらむことを求めてきた。富んだベルナルドや學識ある法律家ピエトロが各の莫大な財産を施與した程度は當然市中の大きいなる注意を惹いて、そして晝は市場で、夜は爐の火のかたはらに *in cella* 夜



番がなされるときいつまでも盡されぬ話の種となつた。あるかやうなエリアの杜松の枝や栗の薪のばちばちと音する焚火のそばで、(アッジジでは四月の冷たい夕方にはこれが必要であつた)エジディオはフランスと彼の友などについて語る家族らの雑談を聴いてゐた。

あくる朝エジディオは疾く起きた、「彼の救はれを心にかけて」と古い傳説には語られてある。それは四月の二十三日、聖ジョルジの殉難の祭り日であつた、そして若者はミサを聴聞するためにサン・ジョルジオの寺に赴いた。そこから彼はたゞちにボルチウクラへとまつすぐに道を下つて行つた、彼はそこに聖フランシスが止まつてゐることを知つてゐた。サン・サルヴトレ・パレティの病院のところでは道は分れた、そしてエジディオは正しき道を選び得むことを神に祈つた。彼の祈りは聴かれた、何となればしばらくさまよつたあとで彼は一つの森に近づいた、そしてフランシスがそこから出てくるのを見た。エジディオはたゞちにフランシスの足もとにひれふして兄弟のなかに入れられむことを乞うた。けれどフランシスはエジディオの信心深い若い顔をつくつく<sup>く</sup>と見て、彼を扶け起して、そして曰つた、

「いとしい兄弟よ、神は汝にふしぎなる恩寵を示し賜はつた。何となれば、もし皇帝がアッジジの町に来て、そして市民の一人を彼の騎士としあるひは侍従としたならば、そのときこの市人は大いに歡ぶであらう。けれど汝はいかにそれにもまして歡ぶべき身であらう、汝を神は擇んで彼の忠實なる騎士とし僕とし、そして聖とい福音の完全を行ふべく選び給はつたのである。」

そして彼は他の兄弟らのゐるところに彼を伴つて、そしてかやうなことばとともに彼を紹介した、「主われらの神は一人のあらたなよき兄弟を送りたまはつた。私たちはそれ故に神に於て歡び、そして愛に於てともに食に就かう。」

けれど食事が終つたときフランシエとエジディオとは新しい兄弟のために着物を乞ふためにアッジジに赴いた。途で彼らは一人の老婆が施しを乞ふのに逢つた。そのときフランシスはフラテ・エジデオを顧み、そして「天使のごときおもかけして」彼を見、そして言つた「わが親しき兄弟よ、神のために私たちは汝の上衣をこの老いた女に與へやうではないか！」

そしてフラテエジディオはたゞちに彼の美しい上衣を脱いでそれを女に與へた、そして——彼がそれについてのちに語つたのであるが——その施したゞちに天に昇りゆくやうに思はれた。彼みづからは心のうちに曰ひあらはしがたい歡こびを感じた。

今ボルチウクラの小屋には四人の人がともに棲んでゐるのであつた。この第一年に於ては彼らは一つの家を設ける必要はなかつた、それは彼らは多くの時を傳道の旅に送つてゐたからであつた。これまでフランシスが一人でしてゐたことを、四人はともに爲し、あるひは二人づゝで爲した。かやうにしてフランシスはエジディオの伴侶となり、そして彼はまもなく彼を愛することを知り、そして彼は物語のことばを借りてエジディオを彼の「圓卓の騎士」と呼んだ、彼は彼とともに最も近き境をこえて——マルカダンコナ



に至るまで、アベンニニの山とアドリアの海のおひだなる國の旅に出た。歸つてきたときフランスは三人の新しい弟子を迎ふる歡びをもつた、サッパティノ、モリコ、そしてジョヴァンニ——これはのちにデルラカッペルラ、「帽子の」といふ稱號を得た人である、彼はだれよりさきに團體の掟を破つて帽子を冠つたからである。すべて七人の人は再び出立つた、そしてフランスはこたひはサビノの山のなかのリエティを彼の布教の終點として擇んだ。

教會の公けなる傳道の雄辯なものと對照して、フランスと彼の友だちはその宣傳に於てはきはめて簡單であつた、彼の説教は研ぎあげた講演といふよりはたゞ勸善の匂ひをもつてゐた——それは胸よりきたつて胸に入るところの巧みのないことばであつた、彼の教へはつねに三つの重なる點に歸着した、神を恐れよ、神を愛せよ、惡より善に心を回せ。そしてフランスのことばが畢るとフラテ・エジディオはそれについて曰つた、「彼の曰ふことはみな正しい！彼の言葉を聽け、そして彼の曰ふごとく行へ！」

到るところに、これらの新しい説教者たちは農民のおひだに著しい注意を呼び起した。ある人々には彼らはまるで野獸のやうにも見えた。女は彼らの來るのを見るとき走りかくれた。またあるものは彼らと語つた、そして彼らがいづれの團體に屬し、そしていづこより來たかを問うた。彼らは答へた、彼らはいづれの團體のものでもなく、たゞ「贖罪に生活せるアッシジの人々」である。

たとへ彼らは贖罪者たちであつたにせよ彼らはそれがために低頭して歩む人々ではなかつた——フラン

ス語で歌つてゆくフランスをはじめとして彼らは神をその大いなる善のために倦まず讃へた、「彼らはおくのごとく大なる歡びをなすを得たり、そは彼らがかくのごとく多くを見すてたればなり、」と傳記著者の一人は曰つた。彼らが春の光のなかを空の鳥のやうに自由に、マルカダグノナの緑の葡萄園のおひだを過ぎて旅したとき、彼らはたゞ全能の神に感謝するばかりであつた、「彼」によつて彼らは、かの浮世を愛するものが君とししかしてそれによつて己れを苦しめ惱むる欺かりや桎梏や畏から脱れてきたのであつた。

彼の六人の弟子を遣はすまへにフランスは彼らを近くの森に集めた、それはポルチウンクラの傍らであつて、彼らが屢ば祈りするところであつた。彼の獨特な柔和しき、しかして人に強く迫るしかたで彼は彼らに、神の王國について、そして彼らが神の王國を出でゆくは人々にこの世を輕んぜしめ、我意を絶たしめ、肉體を責めしめるためであることについて語つた。「行け、わが愛するものよ、平和と悔い改めの福音を宣べよ。患ひに堪へ忍べ、汝らに問ふものに謙れる答へをなせ、汝らに迫るものを祝福せよ、汝らに害を加へまた汝らを掠むるものに感謝せよ、そはこれらすべてに對して汝らに酬いは天國に於いて大いなるむ。汝らが學ばざる人々なるが故には愛ふることなかれ、何となれば汝らは自ら語るにあらず、汝らの天なる父の精靈が汝らによつて語りたまへばなり。汝らはおまたの誠あり心善くしかして平和なる人々に逢ふことあらむ——彼らは汝らと汝らのことばを歡びをもつて迎へむ。また他に、されどこれはその數さるに多からむ、汝らは神を嘲ける人々あるを見む——彼らは汝らを阻み汝らと争そはむ。されば汝らは豫



じめ心を用ゐてこのすべてを謙だりをもつて忍べ。」

これらの言葉のちにフランスは彼らを一人一人に「母が子を抱くやうに」抱いて、そして彼らを祝福し、そして彼らに最後の旅の糧としてつぎの聖書の言葉を與へた、「汝のうれひをすべて主にゆだねよ、しかして汝は養ひをうけむ。」

かやうにして弟子たちは世に立ち出でた、そして二人づゝ伴つて旅した。そして彼らが道で一つの寺までは一つの十字架に通るかゝつたとき、あるひははるかに寺院の塔を見たばかりでも、彼らは地に拜してそしてフランスの教へた小さい祈禱をささげた、「我らきみを崇めむ、おゝキリストよ、こゝに於ても、また全世界なるすべてのきみの教會に於て崇めむ、しかして我らはきみを祝ひまつらむ、そはきみの聖とき十字架もてわれらの罪を贖ひたまひたればなり。」けれども彼らが、そのころにも今と同じく山のうへに立つて繞らした壁や高い塔のある小さい町々の一つに近づけば、彼らは市門を経て歩み入つた、そして彼らがその市場へ來るとき、彼らは止まつてフランスの教へた讃への歌を歌つた、それはつぎのこときものである――

「神を恐れよ崇めよ、讃めよ頌へよ、主なる全能の神を三位と一體に於いて、父と子と聖靈と萬物の創造者を禮拜し感謝せよ。悔い改めを爲せ。しかして悔い改ために値する果をむすべよ、何となれば、知れ、汝らやがて死ぬべきことを。與へよ、しかして汝らにあたへられむ。赦せ、しかして汝らは赦されむ。し

かしてもし汝ら人々の罪を赦さざれば主もまた汝らの罪を赦したまはざらむ。汝らの罪を懺悔せよ。悔い改ために死ねるものは福なり、彼らは天國に入るべければなり。悔い改ために死なざるものは禍なるかな。彼らは悪魔の子たるべければなり、しかして彼らは悪魔の業をなし、とこしへの火に入れらるべければなり。心してすべての惡を避けよ、しかして善に於て終りまで全うせよ。」

兄弟らはまもなくフランスが旅のためにせよと與へた忍耐の戒めを用ゐなければならなかつた。多くのものは彼らを狂人として、そして當時の残忍な風習で彼らを嘲けり、そして街の泥をとつて彼らに投げつけた。またあるものは彼らの衣を奪ひ去つた、そして聖書に謂はれた善き人々のやうに彼らは抗らふことなく彼らは半裸のまゝで道を進んだ。あるものは兄弟らを捉へて、頭巾に引きつゝんで粉袋か何ぞのやうに脊にのせて運んだりした。あるものは彼らのもとに骰子をもつてやつてきて、それを手に握らせて、そして博突することを勧めた。また多くのあるものは彼らを盜賊と誤まつて一夜の庇護を與へることをも拒まうとした、そして兄弟らは屢ば洞穴に眠り、また害やまたは家々や寺院の軒下で眠つた。

一人の伴侶とともに(それはテラノのトマソに據ればフラテ・エジディオであるといふ)クインタヴルレのフラテ・ベルナルドは北の方に行つてフィレンゼに達した。こゝに彼らは夜の宿りをもとめて永いあひだ市中をむなしくさまよつた。つひに彼らはある家のそとに一つのボルチコ(家の入口のそとに屋根のある部分)を見出した、彼らはやうやくそこに休むことができると思つた。彼らは戸を敲いて、そして家の女



主人から許しを得て、一夜をそこにあつた板圍ひのかけで明さうとした。

かやうにして彼らが休まうとするまもなく家の主人は歸つてきて妻とそのあまり柔和な寛待のことについて争ひはじめた。女はともかく彼を和めて、そして彼らは止まつてゐることを許された。「あの人たちはあそこにある木片を盗むだらうけれど、ほかに何もとつて行くことはできませんよ。」彼女は良人に曰つた。けれど彼女が二人の旅人に貸さうと思つてゐた一枚の下敷はつひに許されなかつた、そしてそれは冬のころで、その夜はきはめて寒かつたのである。

乏しい眠りののちにベルナルドとその友とは無情な宿主のもとを朝早くたち去つた、寒さに凍へ饑ゑに堪へがたくて、そして朝のミサのために鐘が鳴り出すや否や彼らは最も近い寺院に赴いた。

彼らの宿を借りた女主人もまもなく同じ寺院に行つた、そして兄弟らがそのやうに敬虔な祈りをしてゐるのを見たときに、彼女は心に思つた、「もしこれらの人たちが盗人なぞであつたならば、このやうなところに來はしないであらう、また決してかやうに信心深く神々しい祭式に出もしないであらう。」女がかう思つてゐたとき、ギドーといふ一人の男が入つてきた、彼は毎朝寺院に行つてそこに集まつてゐる貧しい乞巧らに施しを與へるのであつた。彼は巡りあるいてベルナルドとその友のところへきた、けれど二人は何ものをも受くるを拒んだ。駭いてギドーは尋ねた、「汝たちはほかのものと同じやうに貧しいのではないか、それで何故何も取らないのか？」ベルナルドは答へた、「私たちは貧しいものに違ひありません、けれど私

たちにとつては貧しさは決して重荷ではありません、その故は我々の場合には好んで爲したことであつて我々が貧しくてあることは神様の御旨に従ふためなのであります。」なほ駭いて、ギドーは二人にほかの問ひを試みた、そしてベルナルドがはなはだ富める人であつたこと、そして彼はわづらふことなく悔い改めと平和の福音を説かむかために、あらゆるものを與へ去つたことを知り得た。

このとき兄弟らを家のまへに眠らせた女も談話の仲間に加はつた。ベルナルドがギドーの金を拒んだことはいかに彼女が二人の旅人をまつたく不法に待遇したかを確かめさせた。「クリスチアニ！」彼女は今もイタリアに行はれる呼びかけのことばを用ひて曰つた。「あなたがたキリストを信ずる人々よ、もし私の家にまた來て下さるならば、私は悦んであなたがたを私の家のなかにお宿をしてあげませう！」けれどギドーは昨夜何人も彼らを宿さうとしなかつたことを聞いて、直ちに彼の好意を申し出た、そして今さらに善い考へをもつた女に感謝しながら、兄弟らはギドーの勧めに従つた。

まへにも曰つたやうにフランスはこのときにはリエティの谷を彼の布教の地方として擇んだ。テルニより彼はゼリノ川の流れに従つて行つた。そしてそこには大いなるまた小さき數多い町々が彼を待つた——それはストロンコネ、カンタリチネ、ボジオブストネ、グレッッチオ等である。至るところに——物語の曰ふごとくならば——彼は神の恐れと神の愛がまつたく消えほろび、そして贖罪の道がふまれずして蔑まれてゐるのを見出した。廣い道、この世の道、三つの悪しき欲が人を逐ひ遣るその道はこれに反して人々をも



つて満され——肉の快樂、まなこの快樂、そしてこの世の誇りは殆ど限りなく靡かしてゐた。「誤まれる、終りなき樂欲の道を塞ぐ」ことはそれ故にいづこに行つてもフランスにとつて主なる仕事であつた。現今より見ても、リエティの谷に於ける、そのときの大なる聖者の説教はことばの最も正しい意味をもつて「福音に化すること」といふべきものであつたと——異端より基督教への改宗であつたと考へられてゐる。

この仕事に従つてゐたあひだに、古い傳記著者らによれば、フランスは己のが罪の赦されたことの保證を受けた、この保證なしには、彼のなしはじめたそれのことき事業は殆んど不可能であつたことはいふまでもない。

ボッジオ・ブストネの町より五百米突ばかり高い山の、平地よりは千米突も高いところに一つの洞があつた、そこへフランスはアッシジからの習はしを忠實に守つて、祈りのために赴くのであつた。こゝに大なる寂しさと死んだやうな沈黙のなかで、たゞ一羽の鳥が囀り、そしてたゞ一つの小川が音たててゆくところで、フランスは永い時のあひだ、剥げた岩の絶壁の下にある硬い石のうへに跪づいた。そしてもし眞にフランスを了解せむと欲するならば、人は彼のあとを慕つてこの山のうへへの寂しい洞まで行かなければならぬ。

彼の性質には福音を傳へる人、教へを布く人としてのほかに隠者の一面があつた、そしてそれは今もたえなかつた、そして彼が足跡をのこすところにはみなかやうな洞や窟や、かやうな *eremi* や *hera* が見出さ

れる、そこへ彼は時々隠れることを愛したのである。

アッシジのカルチュリ、ナルニのサン・ウルバノ、リエティのフォンテ・コロンボ、ボルゴ・サン・セポルクロに於けるモンテ・カザレ、コルトナのチェレ、ノッチアノのレ・コステ、キウジのソテアノ、カゼンティノの谷なるラ・エルナ、それらは、アッシジのフランスのたましひとなつた精神がかの古代の終りのころにヌルシアの聖ベネディクトゥスの胸に入りしものに外ならず、そしてのちに近代のはじまりに於てロヨラのイグナチオを感じしむべきであつたものと同じであることをひろく證明するものである。ボッジオ・ブストネ、またはフォンテ・コロンボに於けるフランスはスピアコのサグロ・スベコに於けるベネディクトゥス、またはマンレザの洞なるイグナチオ・ロヨラと相ひ並んでゐるのである。彼らにはみな同じ二重のモチーフ——「祈りしかして働け」*ora et labora* がひとしく適用される——すべてこの三人にマルタの勤勉の眞中にあつてマリアの信を有つことが要求であつたのである。

そしてボッジオ・ブストネの洞に於てフランスは、十字架にかゝれるものゝ足の下にひれふしてマリアの經たと同じ一ときを求めそして見いだした。あるひは彼はそのときにもすでにこの祈りを口に出したかもしれない、それは彼の生涯の晩年のものとして我々に傳へられ、そしてそれはその内容の豊富なる前後の聯絡をもつてかくのごとく響くのである、「おんみは誰にて在すか、わがいとしき主よ、神よ、しかしてわれは何ものぞや、このおんみの値なき小さき蟲なるおんみの僕は？ わがこよなくいとしき主よ、われは



いかにしてもおんみを愛しまつらむ！ わが主、神よ、おんみにわれはわが心とわが身をさげまつる、しかしてもしわれたゞその術を知りたりせば、われはおんみの愛のためになほ多くのことをなしたてまつらむ！」

いづれにせよそれは二重の深淵であつた（とファリニヨのアンジェラは名づけた）それはこれらの寂しき祈りの時に於いてフランシスのまへに開かれた——善と光となる神の本質の深みと、それに對して罪と闇となる彼自らの深みと。いかにとなれば、人々のために指針となりそして弟子たちの師となることを敢へてしたものは抑も何人であつたらう、彼、その人はわづか數年まへまでは浮世の子らのなかに一人の浮世の子、罪人たちのなかに一人の罪人ではなかつたか？ 他の人々に教へを説き、他の人々を戒しめ、導びくことを敢へてしたものはたれであつたらう、彼、その人はイエスキリストの御名を潔からぬ肉の口へのほすに價せぬ人ではなかつたか？ 心の奥にはいまだいつまでもかくのごときものであつた故に、もしも神が彼のかたはらに在し助けたまはなかつたならば彼がいかなるものとなるべきであつたか、いかなるものであつたかを思ふとき——これを思ひ、そしてつきにあるひは彼を敬まひ、あるひは彼のあとにしたがふ他の人々が彼をいかなるものとしてゐるかと思ふとき、彼の心は闇くなつた、そのとき彼は彼はあらゆる恥しさのためにいづこに隠るべきかを知らなかつた。そして聖使徒のことばは彼の耳に響いてゐた。「あるひは我が他人に教へを説くとき、我みづから棄てられたるものとなることなからむや。」

謙だりは彼のたましひのなかに餌を喰むで何ものをも残さず骨の髄までも嚼みくたく一頭の獅子のやうに荒れ狂うた。そしてまつたく裂きちぎられて、まつたく碎かれてフランシスは神のまへに面を伏せた、天と地とをつくりたまへる神、すべて眞とすべて聖とさなる神、しかしその全能のまへには全たきまこと、まつたき聖とさのほかには何ものも立つ能はざる神のみまへに。フランシスは彼の存在の深みに見入つた、そして彼はこの汎い地上にいづこにも彼自らよりも憐れむべき被造物、これより大いなる罪人、これよりも甚しく失はれ惡に墮ちたるたましひを見出すべくもあらぬことを見た。そして彼の希求の深みから彼は神のまへに呻いた、「主よ、あはれなる罪人のわれに恩寵を垂れたまへ！」

そしてボジオ・ブストネのうへなるさびしき洞に一つの奇蹟がなされた、それは一つのたましひがまつたくみづからにたよりがたくてその神を信仰と希望と愛に於て呼ぶときつねに起る奇蹟である——そのときそこに大なるジヤネ・フレイシヨ許しの奇蹟がなされた。「わが悪しさの故にわれはすべてを怖る、されどおんみの善よりわれはまたすべてを希望す」これはフランシスが神にむけた祈りの奥底の意味であつた。そして答へはつねにそれがあるごとくに響いた——「怖るゝ勿れ、わが子よ、汝の罪は赦された！」

このときよりフランシスは彼を待てるあらゆる事業のために隙まなく武装されてあつた——彼は基督教の奥に透徹した。彼がものみなを棄てたがためにこそ彼はものみなを克ちうることとなつた。彼はたゞに父と母、家と家庭、財産と金とを棄てたのみならず、けれどもつと他のあらゆるものよりも貴いものを



棄てた、即ち神が彼のものとなりしかして彼が神のものであらむために——彼はまつたく彼自らをすてた。すべて彼の正しさは今よりは使徒のいはゆるキリストが信仰に由つてはたらきかけるそれであつた、そしてこの正しさより彼の聖とさに於ける生活は芽をふきいでた。それゆゑに「小さな花」の第十章に語られることは歴史的の眞實であるよりも更に深い眞實をもつてまことである。

「さればある日マリニヤノのフラテ・マッセオは聖フランシスに謂ひぬ、「われはあやしむ、何故なれば全世界は他をさしおきて汝のもとに走り、しかして人みな汝を見、汝の言を聞き汝に従はむと欲するならむ？ 汝は身に於て美しからず、汝は學べるものにあらず、汝は貴とき生れにもあらず——何とて全世界は汝のあとより走りゆくならむ？」

聖フランシスはこれを聞きて心によるこびまなこもて空を仰ぎぬ、彼はしばしかくのごとくして神にあらがれるたましひをもて立ちぬ、しかして彼おのれにかへりしとき彼は跪づきて感謝と讃歎を神にさしげ、しかしてフラテ・マッセオに向ひて大なる靈の力をもて謂ひけるは「汝は何故にわがかくのごとくなるを知らむと欲するや？ 汝は何故に世の人わがあとに走りしがふかを知らむと欲するや？ なに故となれば、われはまつたき地のうへなる善と悪とを目のあたりに見たまふ、知らざることなき神によりて知れり、その聖ときまなこはいづこにもわれよりも更に大なる、更に憐れむべき罪人を見たまはざりき、しかして全世界にこのわれよりも悪しくして、神のなさむと欲したまふその大なる奇蹟をなすべきものなきがゆゑ

に、それ故に彼はわれをえらびたまへり、すなはちかくのごとくしてこの世に尊ときもの、大なるもの、力、美しきもの、この世の知識を恥ぢしめ、すべての力とすべての徳はみな神より出で、造られしものより出づるにあらざること、神のみまへに何人も己れを高ぶるあたはざること、されど榮えむとするものは譽まれと榮えと力の永しへなる主に於て榮えしめむことをすべての人々に知らしめたまはむがためなり。」

1. Tres socii VIII, 23—26. Celano, Vita prima IX.
2. Tres socii VIII, 27—21.
3. Fioretti(小やき花)cap. 2.
4. Tres socii VIII, 28—IX, 31, Fioretti cap. 2.
5. エジディオの傳記の主たる根據はフラテ・レオネによつて書かれた傳記である。不幸にしてこの著作は我々には完全には傳へられてゐない、我々の有するものは多少とも抜萃せられたる記述である、もつとも充分なるものは「Chronica XXIV Generalium」にあるもの、そのイタリア譯は「小き花」の多くの刊本に添へられてゐる、(私の譯した「小き花」には「祝福せられたるフラテ・エジディオの傳」として載せられてゐる、譯者)その他「Tres socii, cap IX, n. 32—33, XI, n. 44. Speculum perfectionis cap. 36.
6. Tres socii, IX, n. 37.
7. 聖フランシスの團體の掟 Regula prima § 21. (Boehmer S. 18—19)
8. Tres socii, cap. X.
9. エヒルマンセン「順禮紀行」, Pilgerbuch” 十三章、マイン監 S. 175 f.



## 二 團體の設立

フランスはある日僧正ギドーの私室に在つた。彼の憤ひであつたやうに彼はたましひたちの父と思つてゐるこの人の許に何かの助言を得るために、またあるひは恵みと乞はむがために行つたのである。そのときは兄弟らのためには一つの苦境であつた。傳道の旅から歸つたとき四人の新しい兄弟は加はつた——フィリポ・ルンゴ、サン・コスタンツァのジ・ヴンニ、バルバロ、そして并ジランチオのベルナルド等であつた。フランスみづからも第五の一人の新しい兄弟をリエティから伴つてきた——それはアンジェ・ロ・タンクレディであつた、その若い騎士にフランスがリエティの道のうへで出逢つたとき、彼は直ちに呼びかけた、「永いあひだ汝はその帯と劍と拍車を佩びてゐたではないか、今は汝が帯を一すちの繩に換へ、劍をイエスキリストの十字架に、拍車を街の塵埃と換へるべき時である。私に従へ、そして私は汝をキリストの軍勢のなかの騎士に陞せやう！」そしてアンジェロはたゞちに従つた。

そのやうにしてもはや少なからぬ人数が日々の食を得なければならぬのであつた。はじめのうちにはアシジの人々は一種の驚異に囚はれて、そして兄弟らは戸口より戸口におとなふときに少からぬ施しを受けた。今は人々は彼らを厭はしく思ひはじめた、そしてことに兄弟らの親族は彼らを迫害することに熱心で

あつた。「おまへたちはおまへたちの所有してゐたものを捨て、しまつた、そして今は來て他人の所有を食ひ潰すのか！」

人数が増したために彼らはボルチウンクラの小屋を出で、そこから二十分ほどのみちをはなれたところ、その近くに小川の流が曲つてゐるところがあるのでリヴァトルトと呼ばれるところにあるくづれた小屋にきた。こゝにはサン・サルヴトレ・デレ・パレティの「十字架を負ふ人々」が二三の小さい建物を所有してゐた、そして新たに入つたフランススカンの一人なるモリコはこの團體の人であつたから、フランスがその仲介によつてこの新しい住家の使用權を得たといふことは想像して誤まりのないことであらう。

リヴァトルトのこの住居 *Insula* は甚だ狭く、そしてフランスは各の兄弟のすわるところのうへに、屋根にその名を書いて置いて、混雜と不整頓を防いだ。そこには食堂も禮拜堂もなかつた、兄弟らは住居のまへに建てられた大きい木の十字架のまへに祈りした。フランスは彼の身にとつてはこのやうな甚だしい貧賤について何も曰ふべきことはなかつた。彼はまことにリヴァトルトを好んだ、何となれば川のながれに沿うて彼はたやすくモンテ・スバジオのいくかの窟に赴くことができた、彼はその洞に於て屢ば祈りした、そしてフランスはその狭く小さい故に、それを彼の牢獄 *carceri* と名づけてゐた。

これらのことはみなアシジに於て當然多くの話の種になつた。そして僧正は良い判断を示した。彼は溫和な手段によつてフランスに教會の牧師たるものから見て誇大に思はれる思想をすてさせやうとした。



兄弟らは日々のパンを必ずうる事ができる程度までは、すくなくも、所有することができなければならぬ、と彼は思つてゐた。僧正には、よのつねの秩序ある生活を行つてゐる人々として、物乞ひはことに忌むべきことであつた。

けれどこの點についてフランシスは動かなかつた。あたかもレオトルストイが十九世紀に於て明らかに見たのとまつたく同じく、彼は、キリスト教的生活に於て金と所有とが捨てられるときに道のうへからいかに大いなる障礙が除かれるかを見てとつた。「僧正の君よ、それ故彼は答へた、「もし私たちが所有としてもつてゐるものがあつたならば、また私たちはそれを護るために武器をもたなければなりません。何ゆゑとなれば、財産のために私たちの隣人と近親とに對する争ひを生じます、そして神と人々に對する愛はそれがために多くの破綻をつくられます、そしてこの愛をいつまでも全たく、そして汚されずに保つために、私たちの固めた決心はこの世に何も所有するのを欲しないのであります。」<sup>1</sup>

僧正は頭を傾けて黙つてゐた、今彼自らは所有權の問題について争つてゐないと斷言することはできなかつた、彼は「十字架を負ふ人」やまたモンテスバジオのベネディクトゥス派のアプトたちと裁判沙汰のなかに巻きこまれてゐた。たとひもし彼がみづからこのやうなイデアリズムまでのぼることはできなかつたとしても、彼はほかの人にそれを妨げたり禁めたりすることは敢へてしなかつた。

そのうへ物乞ひは兄弟らの唯一つの、または本質的な職業ではなかつた。フランシスは自らこの初期に

ついて彼の記録に謂つてゐる。

「しかして主われに兄弟らと與へたまひしのち何人もわが何を爲すべきかを示すものなかりき。されど最も高きものはわが聖なる福音に従ひて生すべきことをわれに示したまひぬ……しかしてわれに來りてこの生活のみちを受け有ちたるものはその有するものをみな貧しきものに與へ、みづからは一枚の衣に、己が欲するとき表にも裏にもつぎを縫ひつけたるを着、一すぢの繩帶と下帯にて満足せり。しかしてわれらはほかに何も有つことを欲せざりき。

「われらは勤行オライチムをなせり、われらのうちかつて司祭たりしものは他の司祭と同じくなし、されど俗なるものはたゞ「われらの父」パテルノステルを唱へたり、しかしてわれらは好んで會堂に赴きたり。しかしてわれらは愚かにしてすべての人に従へるものなりき。われはわが手をもつて働きぬ、しかしてわれはこれよりのちも働かむと欲するなり、しかしてなほわれはすべて他の兄弟らも正しき労働に従ひてあらむことを欲するなり、しかして働くことあたはざるものはそれを學ばざるべからず、そはみな利得をえむと欲するためにあらず、たゞよき模範となり、また懶惰ならざらむためなるべし。しかしてもし人われらに労働の報酬を與へざることあらば、われらは戸より戸に赴きて施しを乞ひ、主の設けたまへる食卓に赴くべきなり。」

この聖フランシス親らの手から出た僅かの言葉のうちに我々は彼らがボルチウンクラとリヴァルトで爲した生活の完全なプログラムを見ることが出来る。フランシスの欲したところはすなはちナザレのイエ



スの欲したものであつた——人々はその所有を能ふかぎり少なくし、そして彼らは自らの食物のために彼らの手をもつて労働し、そして労働をもつて足らざるときには他に助けを求めること、そして彼らは必要ならざる煩ひをもつてとなく無用の所有を集めざるべきこと、彼らは自らを鳥のやうに自由にし、そしてうき世の網に罹ることなからむこと、そして彼らは生涯のなかを神にその與へ給ふものゝために感謝しつつ、そして神のみ業の美しさのために讃への歌をうたひつゝ、経てゆくべきことであつた。「旅人のごとく、順禮のごとく」とある聖使徒の曰つたこのことはくりかへしくりかへしアッジジのフランススが彼の理想を曰はうと欲するときに彼の口に回へつてくる、「彼はすべて彼のあたりにあるものが順禮の旅とさすらひとを歌はむことを欲した」と傳記著者たちの一人は曰つた。

つきに示すところの、フランススが兄弟らのために書きたいはゆるレグラブリマ(第一の掟)のうちの内規や戒めはこのことによく一致してゐる——

『他の人の家に仕へまたは働らくフラテは決して財を預かる人または書記となるべからず、また決して一つの権力ある地位に居るべからず……たゞ彼らは自から卑くして家のうちにある人すべてに従はざるべからず。しかしして労働の一つの種類を爲し得るものは、すなはち己が學びたる技を爲し行ふべきなり、しかれども、それは彼らのたましひの福祉に害ありまたは正しからざるものなるべからず。その故は聖使徒の曰へるがごとく、「もし人働らくことを欲せざらば、彼はまた食ふべからず、」または「すべての人をしてその

適せる業に慣はしめよ。』

しかしして彼らはその報いとして何ものにも必要なものを受くべし、たゞ金を受くべからず。しかししてその必要なるときは彼らは他のフラテと同じく出で、食を乞はざるべからず。しかしして彼らはその必要な労働の用具類を所有することを許さる。』(第七章。)

『主は福音のうちにわれらに教へたまへり、「心せよ、汝の胸は欲心と汝の養ひのための患ひをもつて煩はさるゝことなかれ。』さればフラテらの何人も、何處に往くとも、また何處に在るとも、いかにしても金を受くることを許されず、また受けしむることを得ず、それは衣服のため、または書籍のために、もしくは労働の報いとしても可ならず、いかなる理由あるも、たゞフラテのうちに病めるものありて助けを求むるときを除いては、すべて許さざるものなり。何となればわれらは金について一つの石よりも貴ときものと思惟すべからざればなり。……さればわれらは心を用ひて、一たび世のすべてを棄てたるもの、またかくのごとき小さきことによりて天國を失ふことなからむことをつとむべし。さればもしいづこかに金を見出すことありとも、そのときわれらは恰かもわれらの踏める砂埃よりも心にかげざるべし。しかれども癩病者ら食に乏しきときにはフラテらは金を集むるを得べし、されと金についてよく身を慎しみ守らざるべからず。』(第八章)

『フラテらはすべてわれらの主イエス・キリストの謙だりと貧しさとに従はむことをつとめざるべからず、



しかして聖使徒の言葉を心にとめよ、即ち、もしわれら食物と衣服を有せば、それをもつて満足すべきなり。しかしてフラテラは彼らもし賤しきもの、侮らるゝ人々、貧しきもの、弱きもの、病めるもの、癩病者、また乞丐のなかに交りて道のうへにあらばすなはち歡ぶべし。しかしてもし必要あらば往きて施しを乞はざるべからず。そのとき恥づることなかれ、しかして思へ、われらの主イエスキリスト、生ける全能の神の子すらも彼の顔を石のごとく硬くして恥ぢざりしことを、彼すらも貧しく、知られぬ人にして施しを乞ひて生き、彼のみならず祝福せられたまふ處女、また諸弟子もしかせしことを。しかしてもし人々フラテラに恥しめを與へ、施しをなさざることあらば、そのとき彼らはそれがために神に感謝すべきなり。そのとき彼らは知るべし、恥しめはそを忍ぶ人の罪に數へられずして、そを加ふる人の身に負はざるべきことを。施しは貧者に與へられたる遺産にして正義の一部なり、これすなはちわれらの主イエスキリストのわれらのために遺したまへるものなり。』(第十章。)

これらの言葉、また同じやうな言葉でフランスは屢ば彼の友らを勵まして彼らにせまる貧しさのくるしい生活に堪へしめたことはうたがひもない。あるひは彼らは病院に於て仕事を申し出で、あるひは農民を助けて收穫の野に働らき、そして彼らのうくる報酬は決して彼らの日々のパンとそれを食べるとき泉から汲む一杯の水より多くはなかつた。

しばしば何も仕事を得られず、そしてアッシジではまへに曰つたやうにして兄弟らの面前にびしやりと戸

が閉ぢられた。そのときには希望は殆どかゝるところなく、そして不満と沮喪は時としてあはれな「アッシジの贖罪者」らをそのリヴァルトのかくれ家に壓服しようとしたことも信ぜられやう。暗い雨のふる日に小舎の漏りやすい屋根から水は流れ透り、そして土は黒くぬかつて跣足で踏むにはあまりに冷やかである、そして彼らはそこに粗い襪になつた着物をまとつてすわつてゐた、その數は七八人もあらう、彼らはひねもす何も食べるものがなかつた、そして物乞ひに出て往つた兄弟らが何ものか持つて歸るか否かを知らない、そしてそこには身を温める火もなく、そして讀む書物もない……このやうな雨の日々に、この暗い冷たい時に、短かい、けれど荒い、そして不安なウンブリアの冬のなかには必然に一人二人の心のなかに思ひ浮ばぬことがあらうか、これらすべては狂氣のふるまひであつた、今もつとも善い仕方はこの暗い穴とそものもの狂はしき住人らに背いて、そして町へ歸つてゆくことではないか——町へ、そこでは彼らが一たびは家や庭や金や財をもつてゐた、それをみな愚かにも抛つて貧しいものに與へてしまつた……たしかにやうな時もある、そして兄弟のうち一人ならずその悔い改めの精神が弱められることを感じたことがあつたに違ひない。けれど最初の弟子らのうち我々はたゞ一人が墮ちたのみであることを聞いてゐる——それはカベラのジョヴァンニであつた。すべて他の人は堅固に保つて耐へ忍んだ、それは物語によれば彼らは屢ばパンのかはりに草木の根を食べなければならなかつたことさへあつたけれど、そのやうにして彼らは堪へ忍び、そして彼らは勝つた。



その故は、永いあひだ彼らにとつて反對であつた一般の態度はやうやく變つてきた、兄弟らの枉げざる忍耐は驚異を呼びおこし、そしてその敬虔な生活の方法は信頼をよびました。リヴォルトのかたはらをすぎる人は夜ごとに兄弟らの祈りの聲を聴いた。そして晝は彼らが病院に入つて行つたり、または何か仕事を待たるところで働いてゐるのが見られた。彼らの貧しさにも拘らず彼らは乞はれるときにはつねに何物か頒ち與へることができた、そしてつひに何もものないときには彼らは上衣の頭巾がまたは片袖を與へた。彼らは金錢についてすこしも心にとめなかつた、かつて一たびある人が少からぬ金額をポルチウンクラの禮拜堂の祭壇のうへに置いた、けれどもまもなく彼はその金がそのまゝ大道の馬糞のうへに置かれてあるのを見出した。

ことに彼らがいかに互ひを愛してゐたかは人によく知られた。ある時彼らのうちの二人は旅に出たとき一人の彷徨してゐる狂人に襲はれた、彼は彼らに向つて石を投げはじめた。そしてそのとき人々は兄弟らがつねに場所を代り合はうとするのを見た、それは互に石の來る側に立つて身を楯にして他の一人に傷つけさせまいとするのであつた。またもし一人の兄弟が考へなしに曰つた言葉、もしくは激しい言葉で他のものゝ感情を害したときには、彼はその兄弟とまつたく和睦するまでは決して安んずることなく、そして怒らせた一人の申し出によつて、怒らされた一人はその足を悪しき言葉の出口につけなければならぬのであつた。禮儀のないことば、または無益な言葉、そして世間的な話などは決して彼らのあひだに聽か

れなかつた、そして途で女に逢へばそれを見ることなく、心は天に向けてまなこは地上の塵に向いてゐた。

彼らがこの世の虚榮や空しきものを追ひ求めなかつたことはこのやうな時に見られた、一二〇九年の九月オットー・フォン・ブラウンシュワイヒは法王インノケントより皇帝の冠を戴かされるためにスポレットの谷を経てローマに赴いた。人々は華やかな鹵簿を観るためにアッシジ、ペットナ、スベルロ、イゾラロマナその他の山地や平原のあらゆる町々や村々から集まつた。たゞリヴォルトの兄弟らのみはそこに見えなかつた——そしてたゞ一人はフランスによつて遣はされて、皇帝オットーに謁してこの世の譽れは移ろひやすきものであつて心にとむべきものでないことを曰つた、その言葉の眞實はまもなく皇帝自らの身の上の思ひあたるべきものとなつた。

そのあひだにフランスはローマに赴くことに心をさだめた。彼はリヴォルトの寂しさのなかにあつて、彼の遺書にも記されたごとく、「少しのそして單純な言葉を以て」生活の掟を書きあるひは書かしたそれを彼と兄弟らは彼らの生活に於て守つたのである。彼の目下の願ひはこの掟、(彼はそれを *forma vitae* と名づけた)を教會の最高の權威によつて承認されむことであつた。そのときかゝる願ひ出の必要はなかつたのである、一二一五年の第四回ラテラノ會議に於てはじめて正教會のうちにこのやうな團體を設けるにはその承認が必要であると定められたのである。バルデスの時よりもまへにはなかつた習慣は今始まりつゝあつた、それに従つて俗人は今まで僧正と牧師にのみ限られてゐた説教の權利について法王の椅子よ



り許しを求むることになった。バルデスはかやうな許しを得た、けれどそれは地方の教會の人々の命を奉ずることを嚴格に申し渡されたのちであつた。同じやうな免許は一二〇一年に「謙れる人々」の團體に、そして一二〇七年にヒュースガのデュランとその屬する正教會のウルデス派に與へられた。フランスは當然インノケントが彼の願ひにもまた許しを與へることを希望する理由があつたのである。

そのうへに聖使徒らに對する聖フランスの篤い愛は特別な力で彼をローマに、聖使徒とその繼承者の墓所に惹きつけた。聖使徒らは聖フランスの模範であつた、そして彼の思ひはすべていかにして福音が彼に示すがごとき聖とい使徒の生活を再び起すかといふ問題に向けられた。すべてのものがみな兄弟らの共通の使用に供へらるべきことも「聖徒からつたへられた生活の掟に従つて」するのであつた。「聖とい使徒の教會に於てはかやうであつた」といふことはフランスはつねに服した。そしてやゝ後期の傳説にはペテロとパウロがローマのサンピエトロの寺院で祈りしてゐたフランスのまへに現はれて、そして彼に最も聖とい貧しさの完なき富みの所有を確證したといはれてゐる。

一二一〇年の夏のある日、贖罪者の一むれはリヴ・トルトを出で、ローマへの途に上つた。フランスのかはりにクィンタヴレのベルナルドが途に一行の導者であつたといふことのほかこの旅についてはあまり多く知られてゐない。彼らはみな彼の命を聽いた、そして彼らは旅のなやみを祈りと歌と敬虔なる談話をもつてまぎらせた、そして傳説にいふには、主はいかなるところにも彼らの憩ふところを設けたまひ

そして決して彼らに必要なものについて缺乏を感じさせたまはなかつた。

彼らばローマに行きついたとき、最初にアッシジの僧正ギドーに面會した。彼はこのときに、多分はフランスとあらかじめだめたことがあつたと思はれるが、この永への都にきてゐた。僧正は兄弟らをカルチナレなる一人の友——サン・パオロのジ・ヴンニに紹介し、そして法王にたよる道は彼らのためにひらかれた。のちの傳説はフランスがまづ己の力で法王に達せむとして失敗したことを語つてゐる。けれど歴史上正確なのはたゞこれだけのことである、即ちカルチナレ・ジ・ヴンニは兄弟らを幾日か宿したのちにそのことについて法王に語るつもりであつた。法王はそのときインノケント三世であつた。

サバチエのしたやうにこのときのカルチナレ・ジ・ヴンニの態度を非難するならば、それは不當なこと、曰つて差支へない。彼はクリアの代表者としての權能をもつて、フランスと兄弟らが彼の許に留まつてゐたあひだに、彼らの意向や思想を探らうとした。この時代は教會にとつてまことに危ふいときであつた。そしてその先導者にとつては非常な細心が單純な義務として必要であつた。

「中世に於ける強大な教會」といふことはしばしば中世についてのまつたく誤れる理解から謂はれることである、ことにインノケント三世の時期についてはこの考へはまつたく誤まりである。事實に於て宗教改革の各世紀または革命の時代とてこの時代——一二〇〇年ころよりも法王と教會に反抗してゐたとは思はれない。たれも今日ピオ十世がかのインノケント三世が一度ならず受けたやうな待遇を受けることを黙



つて見てゐるものはないであらう。インノケントは自らつぎのことを語つてゐる——聖とき土曜日、一二〇三年四月八日に彼がサンビエトロよりラテラノに行くみちで、その頭上に戴いた法王の冠にもかゝはらず彼はこゝに繰り返すことを欲しないと曰つたほどの侮辱の言葉をもつてローマの市民に恥しめを受けた。

すではやく一八八八年に於てこのローマの市民はのちのフランスの革命黨の先を越して、基督紀元で年を數へる制を破つた、彼らはそこで一一四三年のローマ元老院元老院の再設を基として新しい紀元を建てた。いくたびもインノケントはローマを逐はれた。彼と彼の兄とが安全な遁れどころとして築いた塔は、今も残つてそのものしい廢址にインノケントの家の名を(Hors dei Conti)を負つてゐるのであるが、それはローマの人に占められて市有の財産のなかに入れた。一二〇四年の五月より十月には法王は彼の敵なるカポッチ黨がローマを荒らすのを手を拱ねいて見てゐなければならなかつた。

そしてホーエンシュタウフン家の皇帝らがベテロの座に残してくれた法王領のわづかの残りに於いてもインノケントの權威は小さきものであつた。法王のこの世に於ける羈絆を脱れるためにあらゆる方面の人は法王の靈魂上の最上權からはなれ、教會の統一のなかゝら絶たうとした。オルギエトに於てはかやうな獨立した黨派は一人のアルビジオア派の者を首領として、そして法王の遣したポレッシのビエトロ・パレンツイを殺した。ギテルボの市は法王の禁令と威嚇にもかゝはらず邪宗と認められた人々を擇んでコンスルとした。禁令や破門はこれらの反抗する民衆には効果がなかつた。例へばナルニ市は法王の命令に背いて

オトリコリの公有地を荒したのちに五年のあひだ何でともなく安んじて破門のあひだに生活してゐた。オルギエトの共和市は同じやうに冷々然として法王の命令を顧みずに、その軍隊は近傍にあるアクッペデンテの町を掠めそして焚いた。サルヂニヤに於ては牧師らと、あるひは僧正までも法王の敵となつて、そして彼の代理人ブラジオは一二〇二年にまことにいかにしてそこで食物を得べきかを知らなかつた。ギベリン黨のビザ市はつひに法王のこの島を奪つた。もし法王が彼の敵に對して勝利を得たときにも勝利の結果は容赦なく彼から奪ひとられた。かやうにしてイルスリンゲンのコンラドがナルニに赴いてアッシジなる皇帝領の城を法王に引き渡さうとしたときにもアッシジの民は法王がそれを占めぬさきにそれを破壊してしまつたのである。この暴行に對してアッシジ市を罰するどころではなくて、インノケントは一一九八年にベルジアやスポレトを訪れてウンブリアを旅行したとき、その近くを過ぎながらつひに敢へてその市へ入らなかつたのである。

インノケント三世の時代はかくて法王の權威に對するはげしい反抗であつた、そしてこの反抗はのちの世紀に於けるとおなじく宗教的でそして同時に政治上のものであつた。我々はこゝに清教徒や獨立派や啓蒙思想家らやロシクルチアン派や自由石工派フライマウエルがこの時代に群がる各種の多少とも政治上の色あひをもつた分派に面影を見せてゐるのを見る心ちがする。教會史は各派の創立者や邪宗の起祖をすべてこの世紀に數へあげてゐる——強硬なベテル・ヴルデスとその「リヨンの貧しき人々」からディナントのダギッドやストラ



スプリヒのオルトリープのごとき、放埒なる汎神論者、またはアルビジョア派のごとき新マニケア派や、ローマの市でも黒いミサを祝つてゐた *familiae amoris* のごとき悪魔主義者らに至るまで、その起りはみなこの世紀にあつた。

諸派のなかで最も危険なものはアルビジョア派であつた。一二〇〇年にはこの邪宗は全ヨーロッパに分布してゐた——ローマよりロンドンに至るまで、黒海よりスバニヤまで、けれどことにドナウ河下流の沿岸、北イタリア、南部フランス、そしてライン地方の處々にそれは存在した。彼らは異つた國々でみな異なつた名をもつて現はれた、下流ドナウ地方ではブルガリまたはブグリ、公共派と呼ばれ、ロンバルディアではバタレネまたはガツアレネ、南フランスではカタリまたはアルビジョア（ラングドーなるアルビの町の名より）と呼ばれてゐた。いづこでもけれど彼らは同じ教旨をもつてゐた、そしてこれはマニケアの二元論の復活であつた。ブルガリアのボゴミリとパウリチア派に由つて、それは直接にマニの後派から來てゐるのであつた。

アルビジョアの世界観は二つの神を立てるむかしの異教のドグマであつた——たましひを創造した一つの善き神、そして物質の世界をつくつた一つの悪しき神、それ故に重んずべきことは、すべてこれらの物質から離れてゐることである。主義に於てアルビジョアは結婚、家族生活、すべて純粹なる靈的生活と合一せしめがたきものを棄てた。彼らが自ら名づけた純潔といふ名はこれを示してゐる。

この純潔を保つために彼らのうちの最も熱心なものは多く餓死をした。事實に於て結婚はカタリの大部分に許されてゐた、そしてしばしばこの苛酷な否定はかぎりのない樂欲に放たれた——それはドイツに於けるルチフリアン派と同じであつた。

それ故カタリは彼らの哲學のすべてをもつて、またその實行に於てもまつたくカトリックの教會の敵として生れついたのである。そのとき教會がはじめた戦ひ、それはローマの側では能ふかぎりは精神的の武器をもつてつゞけた戦ひは、それ故に基督教の文化の最も重大なる寶の一つ——神學的一元論についての戦ひであつた。神の一なること、これが教會がそのために戦ふ眞理であり、そして戦ふことによつて救ひえたものであつた。生は不純であり、聖からざるものとなし、そして自然は一個の悪魔の仕業であり、「生欲」の悪しく憎むべき罪であるとなすマニケア派と、そして、存在するものを一つの純なる聖とき藝術作品と見、創造する最高の愛の御手から出で、たゞ小さき人の憐れむべき罪によつて汚されたものと見るキリスト教徒とのあひだには底しれぬ深淵がある。ローマはこの深淵のいづれの岸にフランシスと兄弟らが立つてゐるかをきはめなければならぬのであつた——彼らのふしぎな禁欲の教へがカタリ主義の驕慢に出でたものか、あるひは福音の基督教から出たものであるかを。彼らがアッシジから來たことはその嫌疑をおこすものであつた。カタリが政治上の力を得てゐる組合ひのなかでこのウムブリアの山あひの小さい町こそは一二〇三年 一人のアルビジョア派をボデスタに選んだそれであつた。



それ故恐らくはフランスの人格にも、同じ福音に基いた貧しさを理想とするペテル・ブルデスと同じ傾向を見出すことを恐れる理由があつた。この知られたるリヨンの商人は一一七九年に法王アレキサンデル三世から、民にむかつて悔い改めを説教すること、聖徒の貧しさに生活することの許しを受けた。そしてすでに一一八四年に法王ルチウス三世はブルデスとその徒を教會の權威に背くものとして、またドナツス派の主張を新たにするものとして破門のもとに逐つた。たゞ若干のブルデス派は統一の教會に屬するものとして残つてゐた、それはスパニヤ人ヒュスカのデュランの力であつた。

けれどカルチナレジョ・ヴンニにフランスとその友とがこれらの二つの誤まりのいづれをも主張してゐないことを知らしめるには時を要しなかつた。

神は一つであること——これは教會の神學の根柢となる主張と同じく聖フランスの信仰の基礎であつた。たゞ一個の神が在ます——創造と救ひの神、十字架の神、そして祝福の神、自然の神と恩寵の神——一つの世界と一つの天のみあるごとくたゞ一つの神——すべて動きそして生命の呼吸を保つもの、蟲よりケルビムに及ぶまですべてのものに、あらゆる永への永しへを通じて祝ほがれ讃られ感謝せらるゝ一つの神！ フランスはこれを感じてゐた、何となれば彼は生を否定し生を憎むマニケヤではなくて、けれど生くることを欲し、生命を愛する基督教徒であつた——生命をその純潔に於いて、その黄金のごとき善に於いて、その深奥な甘美に於いて、その最も高き最も神々しき充實に於いて。この情緒について、彼は、

みづから驕つて「純きもの」「完たきもの」「擇ばれたるもの」と名づけながらまことはかへつて、すべて驕慢なるものゝつねとして、自苦と墮落のあひだに動搖せる驕慢なる人々からたゞちに區別さるべきものであつた。

フランスは決して否定的なたましひではなかつた、また彼は批評的な心ではなかつた。彼が知つてゐた唯一のものは自己批評であつた。それはたゞちに彼をブルデスとその傾向から區別した。一人の近代の歴史家が二人を比較して正當に曰つたごとく、「フランスは祝福せられたる生活の宣傳者として、ブルデスは聖とき律法の宣傳者として現はれた。フランスはキリストの愛を説き、ブルデスは主の禁令を教へた。フランスは神の子たちの歡びに溢れしめ、ブルデスは世界の罪を罰した。フランスは救はれをねがふものをあつめ、その他はおのが心のまゝに往かしめた。ブルデスは神なきものゝ神なきことを責めてそして教會を痛ましめた。」

これがフランスに於いてまつたく特有なものであつた——それが彼を同じ時代の改革者たちと分つものであつた。そのなかで最もよく教會に従つてゐたものゝうちにも、アルブリッセルのロベルトのごときさへも、あるひは彼の批評を外部的に僧職とその失態に向けて内面的に個人の心に向ふことを忘れむとする誘惑に墮ちた。殆ど生れついたたしかさもつてフランスは個人の改善なくしてはすべて他の改革が意味のないものであることを知つてゐた——そしてそれ故に彼は法王の破門状もまた在俗説教家の雷鳴の聲



も効力がなかつた一般の道徳的改革をなした。こゝにも他に屢ば例しのあるやうに、神はいかなる種類の暴風でもないことが示された。

カルチナレシ・ヴンニは久しからずしてフランスの深き特性を理解した。彼はこゝで一人の根より枝さきまで全く没我的な人のまへにあることを感じた。フランスが彼の企てを語つてたゞかくの彼ごとく曰つたとき、「神は私たちを彼の聖とい信仰のため、ローマ教會の僧職と司祭のための助けとして召されました。」彼はそのことには決して無意味な修辭や、まして偽つた口實がないことを感じた。

數日をへたのちにカルチナレはインノケントの在るところに赴いてつぎの知らせを奉つた、「私は聖とき福音の言葉に従つて生き、すべてのことに於て福音の完全を守らうと願ふ一人のはなはだ完全な人を見出しました。そして私はこの人によつて主が聖とき教會の信仰をまつたき世界に新たにせむことを欲して在せられることを信じます。」

そしてアッシジからきた兄弟らは法王のまへに出ることを許された。法王はフランスの計畫を敍べさせそしてやがて答へた。

「わが親しき子よ、その汝と汝の兄弟らの爲す生活は私にはあまりに苛酷に思はれる。汝らが最初の聖熱によつて高められて、みづからそのやうにして生きる力があることを私は疑はない。けれど汝らは汝らの後より來り、そしてあるひはもはや同じ熱心をもたぬ人々についてもやがて考へなければならぬであらう。」

これに對してフランスはたゞかく答へた、「法王の君よ、私は私の主イエス・キリストにたよつて居ります。彼は私たちにとこしへの生命と天國の祝福とを約束して下さいました、そして私たちにまた、この地上にいのちを保つに用うるほどのわづかなものを拒まれるごときことはありません。」

微笑の影を帯びて——言葉のあひだにそれが目に見える心ちがするではないか——インノケントは答へた「わが子よ、汝のことは、全たくまことである。けれど人の性質はかよいものであつて、一つの狀態に永く保たれることは稀である。さらば、往きそして神に祈り、いかほどまで汝のねがふところが主の御旨に適ふがを示し給はむことを乞へ。」

フランスと兄弟らは法王の前から退いた、そして法王はつきの會議コンシストリウムに於てこの件をカルチナレたちのまへに提出した。そして期待されるごとく、いくたりかの老つた實際的な考へをもつた人々はこの人として能ふところに反抗せるがごとく見ゆる主張をもつ一つの團體については大いなる危ぶみをもつてゐた。

フランスが建てやうと欲したのは決して純粹に瞑想的な宗教團體ではなかつた、かゝるものならばあるひは完全の貧しさも多少は一致して考へられやう。けれど聖フランスの理想は聖使徒の生活であつてことに聖使徒の布教の任務であつた。けれどさまざまな種類の隨時的な勞働の生活やまたは戸から戸に行く乞丐の生活のあひだに、いかにしてこの布教の任務は行はれるであらうか？ ヴルデス派の團體もその



掟に福音の貧賤を含んでゐた、事實に於ては彼らのあひだには専ら説教者の衣食のために働らく俗人があつた。ファミリアティと名づくる一團は、精神と目的に於てワルデス派の伴侶であるが、これはもとロンバルディアの織匠の組合であつて、共同して仕事をし、そして己れらにとつて必要なものゝみを留めて、他を貧民に施した。カタリより改宗したドイツ人ベルンハルト・ブルムスの創めた「正教會の貧賤者」はもつとも聖フランシスの理想に近かつた、彼らはおのが手の仕事で生活し、金銭の賃銀を受けず、たゞ酬いとして食物と衣服を受けた。これは祈りと労働とが團體の唯一の本質的な義務であるあひだは圓滑に行はれるのである。けれどフランシスは説教について法王の許可を得むとしてきたのである、そしてこの説教の任務が在俗説教者の段階に留まることのできないならば、それは必然に若干の研學をもつて基礎としなければならなかつた。この研學を可能にするには、いかなる貧しき形式に於てとはいへ定まつた棲家と修道院的の共同生活は必要であつた。そしていかにして完全な貧賤の礎のうへに修道院を建てることのできるであらうか。

注意を惹かなければならない事實は、むかしの修道僧の團體はみなその徒に貧賤の義務を負はせたけれど、けれどそれはフランシスがその言葉を解釋した意味とはまつたく異つた意味に於てであつた。聖ベネディクトゥス派の掟には、その團體に入るものはそのまへにその財産を貧民に施すべきことが書かれ、そして聖なる貧しさはかやうな殆どフランシス風な稱呼をもつてクレールヴァーのベルナルルによつて讃へられ

たには違ひないけれど、この偉大な修道僧の父がいかに輕蔑したやうに「銀や黄金は、人の愚かさによつて價を保つ白と赤の變り色の土である」と曰はうとも、チステルチア派の修道院はベネディクトゥス派のアップーとゝもにその存在はたゞ廣い寺領の所有にかゝつてゐたのである。個々の修道僧はアップットが與へたものゝほかには何物をも所有してゐない、そして修道院が豊かに財産をもつてゐることは個々の人の貧しさの誓ひと衝突しなかつた。あるひは修道院に住む人々にとつて彼ら自らをまつたく衣食の煩ひに妨げられずにたましひの労働に委ねることのできるためには、ある程度の所有があることは缺くべからざることのやうに考へられた。

このことについてはフランシスはまつたく異つた見解をもつてゐた。ペテロやパウロが成就するを得たこと——彼らの手をもつての労働があるひは情あるものゝめぐみをもつて命をつなぎつゝ世界に福音を宣べたこと——はいまなほ成し得べきことではなければならない。聖とい使徒らは一つの僧房の壁のなかに庇はれてすわつてはゐなかつた、そしてフランシスはこの點については彼らに後れやうと欲しなかつた。

カルチナレたちのあつまりに於ては、聖フランシスのこの願ひははげしい議論を惹きおこした。すべての反對は、けれどコロナナのジヨヴニの單純な肯定によつて壓服された、彼は曰つた、「この人はたゞ我々が彼に福音に従つて生活するを許すことをのぞむのである。もし我々がこのことが人の力の及ばぬことであるといふならば、それは福音に従ふことが不可能であるといふにひとしい、そしてかつ福音の根源なる



キリストを軽んずることである。「これらのことはは効果を収めて、そしてフランスは再びラテラノに招かれた。

この新しい會見に先だつ夜法王はふしぎな夢を見たといはれてゐる。たとへば、彼はラテラノの宮のなかで鏡と呼ばれる處に立つてゐた、そこからはひろい景色が見わたされる、そして彼はそこから洗禮のヨハネと福音のヨハネ、「あらゆる教會の首<sup>かしら</sup>」に獻じたラテラノの會堂を眺めた。そして彼は恐ろしさをもつてその大なる建築が震へ、塔が傾むき壁がひび割れるのを見た——コンスタンチノの古いバジリカがたゞ一堆の敗墟となるのもまもなく見えた。恐れて身は痺れて、力なき手を垂れて、法王は宮のうちに立ちそして眺め、叫ぼうとして、それはできなかつた——叫んだとてそれがどれだけのかひがあらう？——彼は手を組んで祈らうとした、けれどできなかつた——あたかもそれさへもかひなきことであるかのごとく。

そのとき一人の男がラテラノの廣場に來た——一人の矮い、平凡な顔した男、農夫のごとき衣を者、跣足で、そして腰には帯皮のかはりに一條の繩を結んでゐた。そして貧しき小男は右にも左にも顧みることなくたゞちにかの倒れむとする寺院に歩みよつた。今彼は刹那に彼の上に崩れて彼を碎かんばかり傾いた壁に歩み寄つた。ふしぎなるかな、あたかも矮くき人にはかに彼がよりかゝつた壁の高さと等しく高くなつた。見よ、彼はいまその肩を壁の上縁の下に當て、力づよい一衝きをもつて、倒るゝ寺院をすべて

押しなほし、そして寺院は再び正しくそして全たく立つた！

われしらず法王は救はれと安心の深いためいきをついた。あたかも矮くき人はたゞこれのみを待つてゐたかのやうに顧みてラテラノの方に顔を向けた。そしてそのときインノケントはかやうにふしぎな業をしてあらゆる教會の首たり母たる會堂を救つたのはアッシジよりきた小さき賤しきフラテ・フランチャエスコに外ならぬのを見た。

つぎの日フランスが法王のまへに現はれたとき、それはあらかじめ考へられたる物がたりをもつて起つた。

「法王の君、私はあなたに一つの物語を語りませう、」彼は曰つた。「あるときある荒野に一人のきはめて美しく、けれどはなはだ貧しい女が住んで居りました。國の王は彼女を見ました、そして彼女は王の目のまへにめぐみを見いだし、そして彼は女に妻とならむことを求めました、彼はそして美しい子ともらを産ませやうと願つてみました。けれど結婚が行はれそして全たくされたとき女は多くの男子を生みました、そして彼女は心のうちに思ひかへしてかう曰ひました、『私のごとき貧しき女がこれだけ多くの子どもをもつていかにしやう、私は子どもが生きてゆくだけの所有を遺すことができなの？』そのとき彼女は子どもらに曰ひました、『恐れることはありませぬ、おまへたちはみな王子であります。王の宮廷において、さうすれば彼はすべておまへたちの必要なものを與へて下さいます。』けれど彼らが王宮に行つたとき、王は彼



らの美しさにおどろき、そして彼らがみな彼に似てゐるのを見て『おまへたちはたれの子どもたちであるか?』と問ひました。けれど彼らは荒れたところに住む賤しい女の子どもらであると答へました。そのとき王は大なる悦ばしさをもつて彼らを抱きしめそして曰ひました、『恐れることはない、おまへたちは私の子どもである。私は私の食卓に多くの他國の人々を養つてゐる、ましてかくのごとき私の正統の子どもらであるおまへたちは幾人なりとも養ふであらう。』そして彼は荒野なる女に使を遣して謂はせました、子どもをすべて私の宮に送れ、そして私は彼らを見な養はう。』

この譬へを語り終つて、フランスはなほ言葉をつゞけた。「法王の君、私はその荒野のなかの女であります。神はその恩寵に於いて私を見たまひ、そして私は神のためにキリストに於て子どもを設けました、そして諸の王たちの王は私に仰せられました、彼は私の子どもをことごとく養つて下さいます、もし彼がすべてのしらぬ人々にも養ひを與へられるならば、なほそれにもましても彼は家の子どもにも與へ給ふであります。神はこの世のたからを罪人にも與へられます、それは罪人も彼らの子を愛するがためでございます。それならばこれらの彼の福音に従ひ、それ故神がそれらの人々に多くの債めを負ひたまふ者どもには、いかにあふるゝばかり彼のめぐみを注がれぬことがありませうか?」

かやうにフランスは語つた、そしてインノケントはそれがこの世の智慧ではなくてたゞ神の聖靈と力とであることを知つた。彼はつひに抑へがたく、そこにすわつてゐたカルチナレたちの方に向き、そして

曰つた。

「まことにこの人こそは神の教會を回復すべきかの敬虔なる聖とき人である。」

そして彼は起ち、フランスを抱きしめ、彼とその兄弟らを祝福し、そして彼らに曰つた、「神とゞもに往け、兄弟よ、みな人のために悔い改めを宣べよ、主がそれを汝らに示したまふごとくに! もし全能の主が汝らの數を増したまはつたときには、そのときしづかに私の許に歸り來れ、そして私はつねに汝らにさらに多くを與へ汝らにますます大いなる委任を與へることを躊躇せぬであらう。」

兄弟らはみな法王のまへに跪いて、彼に従順を誓つた。法王の命令によつてそのつぎに十一人の兄弟らは彼らの首としてフランスに従順を誓つた。説教の許しはフランスに與へられ、そして彼を経てのみ他の人々にも許された。この謁見の結末として兄弟らはつひに僧職の剃髮トシバツを受けた、それはカルチナレ・ジブンニによつて與へられて、神の言葉を説くことの許可の外形的な印であつた。

サン・ピエトロとサン・パオロに聖使徒たちの墓に詣でたのちフランスと兄弟らはローマを去つた。彼らの道はローマのキャンパニヤを過ぎて、ソラクテの青い頂きに向つてゐた。彼らは急いで歩んだ、彼らの馴れた周圍のなかにかへりきて、そしてそのやうに幸おほくも教會の承認をキリストの代理者の口より受けえた生活とはたらきとをつゞけるべくそのころは熱してゐた。



2. Celano, Vita secunda pars III, cap. VI, S. eulium perfectionis, cap. V,
3. Celano, Vita prima, pars I, cap. XV. はこの他に「致する現實の描寫である、また癩病者の看護の仕事については『小きき花』や『完全の鏡』が多くの美しき例を與へてゐる。
4. Speculum perfectionis cap. LV. 5. 『小きき花』第三章の例しを見よ。
6. 『小きき花』第十三
7. Tres socii XII, n. 50.

### 三 リヴオ・トルト

イタリアの夏の日の燃えるやうな暑さのなかに焦げるローマのカンパニヤを経てさまよつたのちに、フランスと彼の仲間たちはサピノの山々に入つた。こゝで彼らはしばしのあひだオルテの町の近くに留まつた、そこは今ではアベンニニの兩側からローマにゆく二つの大きい鐵道線の合するところである。彼らはこゝに二週間のあひだ、かのネラの緑なすがれがはしる山あひの谷に休養した。この處はかばかり美しかつた、トマス・デ・チェラノの曰ふには、それがため兄弟らは殆んど彼らの嚴そかに許されたばかりの生活の計畫に背かうとしたほどである。戸より戸に物を乞うて、オルテでは彼らは自らに必要な日々のパンを得た——あるときは彼らはいくらかを過ぎの日のために残して置くこともできたほど多くを乞ひ得た。そ

してこれは聖フランスの心に適はなかつたことであるが、けれど、その處は人里はなれて寂しく、残つたものを施すべくも彼らはたれをも見出だすことはできなかつた。一つの昔しのエトルスク人種の墓穴は彼らの貯へ倉として用ゐられた。そして山々の奥に、自然の寂しさの胸のなかに送る人を離れた、浮世に遠い生活はつひに大いなる力を見弟らに及ぼした、彼らはかやうな考へをまじめにもつやうになつた——こゝにいつまでも留まつて、浮世と人とを一つの嚴しい禁欲の生活のうちに忘れることが彼らのたましひの救はれるためにはるかによきことではなからうか？

イタリアの山地を訪れたことのある人々にはこの誘惑はたやすく理解されるであらう。イタリアの山々の自然には何となく人を隱者の生活にさそふあるものがある。たとへば、サピノの山々を構成する石灰岩質は自然の窟と隱者のかくれ家を提供する。氣候は、ときとして人が信ずるよりも冬らしいときもあらうけれど、溫和であつてそして人は信じがたいほどの少なき營養をもつて満足することができる、そしてイタリアの簡単な生活をする人々にとつて二つの重なる養ひはパンと葡萄酒である、そしてもし隱者は酒を用ゐないとしても、山々のあひだにはあふるゝ泉や小川が到るところに流れてゐる。「小きき花」の一節に、いかにしてフランスとフラテ・マッセオが乞ひ得たパンをともに「きよき泉のほとりなる美しき大いなる石のうへで」食べ、そしてまごころより神に、かく青空の下に温かき太陽の光のなかにすわつて渴きと餓ゑを貴女「貧しさ」の供へた食卓に、單純な健やかな食物もて充たすことを許された幸福を感謝したかを記



したところには、すべてを通じて、まったくイタリア風な歡びと満足の感情がながれてゐる。

イタリアの聖者たちの傳説がそのやうに隠者たちの傳説に満たされてゐるのはこの故である。ヌルシアの聖ベネディクトゥスその人の經歷もスピアコの洞に棲んだ隠者として始まつた、そこで彼は三年のあひだ祈り、斷食し、そして自らを鞭つた、そして彼を見出した牧人らははじめ彼を野獸だと思つたといふことである。そしてまた聖フランシスの時から百年のうちに、シエナの市はその最も秀でた學識に富んだ三人の青年、ベルナルド・トロメイとその友二人とがオリゼトの丘の糸杉チナの生えた高みに隠れて、ベネディクトゥス派の隠者の白き浮世に汚れざる衣をつけて自ら世に離れるのを見た。

孤獨の苦行と祈りの生活への誘惑は今フランシスと彼の友に、このサピノの丘のあひだの世ばなれた谷まに於て、鳥と小川のほかに何の聲も聞かれぬところで、彼らに迫つてきた。けれど誘惑は滅ぼされた。フランシスは決して彼自らの知見にのみたよらなかつた、そして祈りのうちにすべてのことについて神の導びきたまはむことを乞うた。そしてそのやうにして彼は今彼自らのためにのみ生くるみちを擇ばなかつた、彼にとつては、彼が諸のたましひたちを惡魔より奪ひこれを神のために獲得するために遣はされた身であることが明らかにされた。まもなくフランシスと彼の弟子たちはスポレットの谷の知られたる處々をふたゝび見た、そして彼らはリヴォ・トルトのかけとボルチウンクラの禮拜堂のまはりの森に彼らの棲家を再び定めた。

ふるさとへ歸るとまもなく彼らはアッシジの牧師シルエストロを彼らのなかに迎へる幸福をもつた。まへにも語つたごとく、かの日サン・ジョルジオの寺のまへで見た聖フランシスの寛大は彼に深い印象を與へた、そして彼は今までももつてゐたのとはちがつた考へで生活の目的を解釋するやうになつた。ある夜彼は夢に一つの巨いなる十字架を見た、その二つの腕木は全世界のうへに延びてゐた、そしてその十字架はフランシスの口から出てゐた。これによつて彼はフランシスのはじめた兄弟の集まりは、人の棲む世すべてを蓋ふものであり、そしてその行ひは神のそれであることを知つた。しばしの沈思の時期のち彼は心を決めて兄弟らのなかに受け入れられむことを乞うた、そしてかやうにして團體に屬する最初の牧師となつた。

フランシスは「聖使徒の權威の力に勇氣を得て」、ローマへの旅のまへからはじめた宣教の活動をつゞけた。彼に與へられた許可に従つてなした説教は道德的なものについて、したがつて社會的なものについてであつた——彼は惡しきみちより悔い改むること、善の生活、神に對し隣人に對しての平和を説いた。あらかじめ僧正ギドーの仲介をもつて、アッシジの寺院ドミナは彼の説教のために與へられた、こゝで彼は基督教の理想を宣傳した、恐るゝことなく、顧慮することなく、何故となれば、彼は傳説著者らのみないふごとく、彼がまづみづから行ひに證したことのほかには決して他人に忠告として與へたことはなかつたからである。



フランススについてはかの豫言者は己が故國に於ては譽れあらずといふ諺は適しない。彼の宣傳が空しくなかつたことは、彼の團體が今受け入れた多數の人々によつて證しされる——「多くの人々、高きも賤しきも、僧も俗もみな神の聖靈によつてとらへられ、すべてこの世の憂ひを棄て、フランススの踐みたるみちに從へり。」これらの新しい弟子の多くはアツシジとその近在のものであつた。

けれどフランススのサン・ルフィノに於ける説教は更に廣い周圍に影響した。トマス・デ・チェラノはその効果を地平線のうへにきら／＼とのぼる一つの星に、また恐しき一夜のあとにあくる曙に譬へた。彼はそれを地のなかより芽の萌えいづるにたとへ、春と花とが訪れるにたとへた。彼はかう記した、「あたりの眺めはいづこもみな變らざるところはなかりき、善きめぐみと豊饒に満ちたる川のごとくに、フランススはこの處をゆく流れとなりて人々の心の園をうるほしぬ、されば彼らはみなまことの徳に花咲きいでぬ。」

フラテ・トマソがこの推敲を経た散文に於て指す事實はたしかにアツシジの社會的狀態を全く新たにした出來事、そしてそれは疑ひもなくフランススの説教の結果とされてゐる一つのことであるらしい。私の考へるのは上級と下級の二つの階級のあひだの争ひが、一二一〇年に市の大廣間に於て和解されたときの約定のことである。このときに書かれた約定書は今まで保存されてある、その始まりはかやうである、

「神の御名に於て。アメン  
聖靈の恵み爾らとともにあれ。」

我らが主イエス・キリスト、祝福されたる處女マリア、皇帝オットー及びレオポルドの名譽のために。」

この序のあとには一列びにさまざまの協約が続いてゐる、なかで最も重要なのはつぎに記す契約である。

「アツシジの上級と下級のあひだには永久につきの約定を結ぶ。」

「すべて相互の同意を得ざればいかなる聯合も結ぶべからず、法王に對してもその使節または代官若しくは皇帝あるひは諸王、及びその使節または代官、あるひはいかなる市または要塞、あるひはいかなる貴族とも許されざるべし。彼らはすべてアツシジの市の名譽と幸福と進歩のために必要な諸事に於てたがひに一致すべきなり。」

この約定、アツシジの大憲章に於て、それについていまままで隸屬に強ひられてゐた市民のすべては極めて少額の代償金を拂つて自由の身となることを得た、そしてもしその主人たちが償金を受け取らぬ場合にはそれを市のコンスルに拂つても同様の効力をもつてゐた。アツシジの近郊の住民も、本來の市民と同じ權利を與へられた、他國人保護の設備もされた、職務の行使に對する公職の報酬も議定された、そして最後に一二〇二年の騷擾については不問罪が宣言され、そして當路者は一一四〇年以來工事中であつた寺院の工事を全力をもつて竣工すべきことを委任された。

もしいかにイタリアの共和市らが十三世紀に於てもそののちに於ても、階級戦争によつて分裂したかを思ふならば、そのとき我々はかやうな約定書がいかに雄辯にアツシジの平和なる發展と繁榮を意味するか



を知ることができる。傳記著者らはまたフランスを他のイタリアの諸市、たとへばアレツォ、ペルージア、シエナ等に於ても和解の仲介者となつたことと描いてゐる。名だかいグッピオの狼のことも、小さいイタリアの共和市と、そしてウルスリンゲンの騎士エルネルのごとき胸當の楯に「神と憐れみと恵みを敵とす」と記すほどに人道的ならざる、野獸のごとき城持の一人とのあひだに結ばれた平和の約束の傳説的に飾られたる物語にほかならぬ。フランスとグッピオの狼の話に並ぶべき歴史の事實はパドヴァの聖アントニウスによつて僭主エッセリノについて傳へられてゐる<sup>1</sup>。

アツシジのフランスの働らきのこの方面は傳説には悪魔を逐つたこととして解釋されてゐる。アツシジの上方の寺院にあるジョットーの繪には、フランスの祝福する手が市にむかつてあげられてあるゆゑに悪魔たちがあらゆる怖い形してアレツォの市の煙突から逃げだしてゆくのが見られる。我々二十世紀の子は悪しき靈を、かの中世の美術家や物語作家がしたやうにして見ゆべき形體に現はす力を失つた。けれど我々にとつて悪しき靈の存在がそのときよりも疑はしく、あるひはその心ちよからぬ近づきがあまたの危機に迫つた瞬間に於て、むかしよりもたしかでなくなつたといふことができやうか？ けれど闇の力が大いなるものでありたゞ己れのうちのみならず己れのあたりにも感ぜられる時と處がないだらうか——ここではあだかもまことに一つの姿なき聲が耳にさゝやくごとく思はれ、または力づよき、地獄の火に硬化されたる手が私たちの手をとつて引くがとき——低く、迫るごとく、そして貫ぬくごとく聲が人の心の

うちに「かく謂へかく爲せ！」と聞かれる時。あゝ、おほくの處のみならず、おほくの家々に於て神の友らの一人が闕に立ちあらはれて、力づよく命ずる聲をもつて「能はざるなき神とその僕聖フランスの名に於て、我は汝らに命ず、悪しき靈らよ、出で去れ、」と命令することが必要であることがなからうか？

それはこのころであつた、ある日團體の掟はフランスのまへで讀み上げられた、そして讀誦する人は第七章のうちに *et sint minores* 「しかして彼らは小さきものたるべし」とある節まで讀んだ。この兄弟の團體に名をつけることは永いあひだフランスの心にあつた、そして「アツシジの贖罪者」*Viri poenitentes de Assisio* といふことばはたゞ知らぬ人の好奇心に對する答へだけであつた。けれどこのことばが掟のなかに書かれてあるのを聞いたとき、*minores* といふことばは彼に深い印象を與へた——「ちひさき人々、小さき兄弟、この名は私と私の人々にふさはしいではないか！」*Ordo fratrum minorum* 「小さき兄弟らの團體」は建てられた<sup>2</sup>。

トマソ・デ・チェラノは彼の最初の聖フランス傳記のなかにリヴァットルトの小屋に於ける兄弟らの生活の描寫をした、それはさながら金色の地にあざやかな色彩の軽い諧和をもつて描かれたごとく、フラアンジエリコの聖壇の畫を思ひ出させるものである。「日くれて彼ら勞働より歸り來り再びともに會するとき、あるひは日のあひだに路のほとりにて相ひ逢ふとき、愛とよろこびは彼らの目よりかゝやき出で、彼らはたがひに清き抱擁と聖とき接吻と、やさしきことばとつゝまじやかなる微笑みと、友愛の目ざしと誠あつき心



もて禮せり。彼らみなあらゆる我欲の愛をすてしがゆゑに彼らはたゞ互に助くることをのみ思へり、あこがれもて彼らは家路をいそぎ、たのしさをもて家に棲む、されど離るときはつらく、わかれは悲しかりき。不和は彼らのあひだには知られず、そこにはかつて憎み、嫉み、疑ひ、嫌忌のあることなく、たゞすべては和合と平和と、感謝と、讃への歌のみなりき。彼らは神をたゞへ、神に祈り、また彼らが行へる善のために感謝し、彼らが悪しく爲せることあるひは過ちしたることにつきて歎き悲しまざることなかりき。彼らほもし彼らの心聖靈の甘さもて貫ぬかれざるときは彼らは神にすてられたることとく感じぬ。夜の祈りのあひだに眠りに落ちざるために彼らは鐵を箴めたる帯を結び、その刺もて眠りを防ぎたり。聖靈にみだされたるとき、彼らはたゞ正教會の司祭らのごとく祈禱書をもつて祈るのみならず、しからずしてそのあひだにねがひもとむる聲とたましひの諸音もて「天にましますわれらが父」をうたひたり。」

この同胞のごとき仲らひの中心はフランスであつた。彼のまへに兄弟らは何ごとも秘すことなく、そして彼らは心の奥の思ひや感情をみな彼に明した。彼らはみな彼のことばを聞いた、そしてそれはもつとも深き愛によつて運ばるゝ従順であつた。彼の命を守るのみならず、彼のわづかな顔色にも彼の欲するところを讀まうとするのであつた。

フランスの及ぼした力は第一に、そして最もよく彼の人格に根ざしてゐた。言語に於てのみならず行ひに示して彼は兄弟らを教へた。彼はかつて食物を楽しみとすることを戒めて、樂欲の枷を帯びる恐れなくして、飽きたるまで食することは不可能であるとまで曰つた、けれど兄弟らがこの戒めをもつともよく理解したのは彼が己れの食する物に灰をふりかけ、または冷たい水を注いでその味ひをなくしてから食べるのを見たときであつた。彼らにあらゆる誘惑といさましく戰ふことを語つたとき、それは彼がみづから冬の眞なかに氷りのやうにつめたい水に跳り入つて肉の誘惑を逐ふ例を示した。

だれかもしも幸ひに彼の若き日に於て一個の道德的に高く秀でたる人格のかたはらに生活した人であるならば、その人は、こゝに一人の若い兄弟リッチェリオが聖フランスの善意は神の好意の疑ひなき徴してあるかのやうに信ずるに至つたことを理解するであらう。彼は新たに團體に入つたものであつた、そしてフランスが他のすべての人々に親しく愛するらしく見えたときにたゞ彼のみを疎むやうに思はれた、フラテリッチェリオが一たび誤まつてかやうな想像をしたとき、あらゆる偶然の機會はみなひたすらに彼の心にこの疑ひを深めるのみであつたのは自然である。彼が歩み入つたときフランスがそとに出れば、彼はフランスがたゞ彼を避けるために往つたのであると思つた。もしフランスが立つて他の人々と話してゐるときに彼らがリッチェリオの方を見遣ることがあれば、そのとき彼は彼らが彼を團體に受け入れたことを快よからず思ひ、そして彼に暇を乞はしめることを相談してゐるに違ひないと思ふのであつた。かやうにしてこの若い兄弟はすべてのことを誤まつて判断し、たしかに彼はフランスにすてられそして拒まれ従つて神にもさうせられてゐる身であると考へて、ほとんど絶望の岸にきてゐた。



フラテ・リッチェリオの傷める顔と、乞ふところあるらしき、願ひにみちた目さしは、一つの啓示によつてのやうにフランシスにあはれな若人のなやみを知らしめた。それ故ある日彼は若い兄弟を招かしめて、そして彼に曰つた。

「私の愛する子よ、悪しき思ひをしておまへを妨げまたは誘はしめてはいけない。おまへは私の善き可愛ゆきそして私かもつとも愛する人々の一人である、そして私の愛と信頼に値する人である。さればつねにおまへの欲するとききて私と語れ、いつにてもおまへの心にくるしむことがあれば、おまへはつねに快よく迎へられるであらう。」歡びに身をわすれ、たのしく拍つ心臓を抱いて、涙にかゝやく目して、若い兄弟は師の許を去つた、そして森のなかの人なきところにて跪き伏して彼の幸ひのために神に感謝するまで、彼は何をも覺えなかつた。

他に二つの話はリゾ・トルトに聯關したものであつて、個々の兄弟らのさまざまの煩惱についての繊細な、情愛の篤い理解について語つてゐる。

ある夜——かやうに「スペルム・ベネディクトゥス」の鏡に語られてある——「兄弟らの一人は悲しげに叫びて他の人々の眠りをさましぬ、「あゝ、われ死なむ、われ死なむ。」人々はみな醒めぬ、しかししてフランシスは曰ひぬ、「起きよ、兄弟らよ、燈を點せ。」燈火點さるるや彼は問ひぬ、「われ死なむと叫びしは誰そや。」兄弟の一人は答へたり、「そは己れなり。」しかししてフランシスはなほ問ひぬ、「わが兄弟よ、汝は何故に死なむとするばかり

苦しむや？」しかして彼は答へぬ、「われ餓えて死なむとす。」

これは圓體の初期のことであつた、そして彼らは程度を越えて彼らの肉體を責め鞭つた。それ故フランシスは直ちに食卓を設けしめ、そして餓ゑたる兄弟と、もに座についた、彼がひとり食ふことを恥づるを慮つて、他の兄弟らをも招いて食卓に坐らしめた。彼らが食し畢つたときフランシスは彼らに曰つた、

「わが親しき兄弟らよ、われまことに汝らに曰はむ、人みな己れが生れつきを慮らざるべからず。汝らのうちに或るひは他の人よりも少なき食もて生命を保つものあるべし、されど願はくは多くの食を要する者と雖も他と同じからむと努むるなかれ、たゞ汝らみな己が體に、たましひのよき僕たるに足るに必要なものを與へよ。いかにとなれば、われらがつねに我らの身とたましひとともに損ふ奢れる食物に心する要あるがごとく、われらはまた程を超えたる苦行を戒めざるべからず、しかして主は悔い改めを欲して、犠牲を欲したまはざるが故に。」

同じすぢのことが他にも語られてある。あるときフランシスはある朝はやく起きて一人の病めるフラテを共に伴つた、彼は病者にとつて葡萄をたべることは薬であると思つたので、ともにある葡萄畑に行つてそこで並んで坐つて、一房の葡萄をとつて彼に與へた、そしてその兄弟が獨りでたべるのを恥づることを慮つて、フランシスも自らたべた。「完全の鏡」に語られたごとく、このフラテは生涯のあひだ決してフラ



ンシスのこの行きとよいた親切さを忘れなかつたことはいふまでもなく了解されやう、彼は他の兄弟らにむかつて彼の思ひ出を、涙を流さずに語ることはできなかつたのである。

リヴォルトの住居はいかにも突然な仕方で終りとなつた。ある日兄弟らがかくれ家のなかで、各の座についてしづかに祈りしてゐたとき、一人の農夫は驢馬を牽いてはかに現れて、何を思ふこともなく彼は獸を驅つて呼んだ、「とつとと入れ、耳長め、こゝでじつと休んでゐられるんだ！」これらの言葉は驢馬に曰ふよりもむしろ兄弟らに曰つたつもりであつたと見えたが、それはとにかくこの祈りの家を一頭の驢馬の小屋に變へやうとするつもりを示した。しばし農夫の心なき態度を見たのちに、フランシスは言葉を出した、

「兄弟らよ、神は私たちを驢馬に宿を借せとてお招きなすつたのではない、たと祈りそして人々に救ひのみちを示すためではないか？」

すべての人はみな立ちあがつて、とこしへにリヴォルトを去つた。これよりはボルチウンクラはフランシスカンの行動の中心であつた、そしてまもなく最初のつゝましやかな棲家はまつたく顧みられなくなつた、けれどフランシスと彼の心の思ひ人、シニョーラ・ポゼルタ、「貧しさの貴女」とが最初の、そしてあるひは最も幸福であつた日々をともに過したところはこのところであつたのである。

1. Fioretti (小きき花) 第十一、第二十一。

2. Celano, Vita prima I, XV. 「完全の鏡」二十六

3. Celano, Vita prima I, XV—XVIII.

4. 「小きき花」第二十七

5. Speculum perfectionis cap. 27, 28

#### 四 ボルチウンクラと初期の弟子たち

ボルチウンクラの小さい古風な禮拜堂は、今も存するとほり、一つの細長い室であつて、ゴチック風の尖つた穹窿形の天井と半圓形のアプセ、三角形の棟、前面には簡單な穹窿をつけた戸口、そして側面の壁の一つにも他の戸がある。サルヴトーレ・ギタリスの「セラフの樂園」Paradisus seraphicus (Milano, 1745) に始めて載つてゐる傳説によれば、この堂は四世紀に法王リベリウスのときに、聖地からマリアの墓所の記念品を聖キリルに贈られて携へて歸つてきた四人の隠者の建てたものであるといふことである。いづれにせよ、祭壇の上に見出される昔からの繪は祝福せられたる處女の昇天を現はしそして繪のうへにマリアを圍んで浮ぶあまたの天使たちによつてこの堂は「天使らの聖母」といふ名を民の口に受けた。Portinonla — 「地の小さい一片」といふ名はモンテ・スバジオのベネディクトゥス派によつて記されてゐる、五七六年以後この堂は彼らの所有であつたのである。一〇七五年には建物はあまりに甚しい壊敗のありさまとなつたの



で修道僧たちはそこを棄てて山の上の母家に移つた。傳説によればフランチェスコの母ピカはこの荒れた堂に祈つて、そしてこゝで彼女の生むべき子はやがて壊れかゝつた神の家を再建するものであることの確かめを受けたといはれる。堂を再び修理したのち、フランシスと兄弟らはしばらく堂のあたりをかこむ森に棲つてゐた、そして今はカマルドルテ派に屬してゐるモンテ・スバジオのアーベールが一二一年に兄弟らに永久にポルチュウクラを使用する権利を興へたとき、彼らにとつてはそれは上なき歡びであつた。それ故フランシスは堂を所有として受けとることを欲しなかつたので、彼は年ごとに一籠の魚を貸地料の償ひとして修道僧たちに送る規定を守つてゐた。

堂のかたはらにフランシスと兄弟らは木の枝を編んで、それに泥を塗り堅めて、木の葉を葺いて屋根として、一つの小家を建てた。藁の糞は寢床となり、裸かの大地は食卓で、また椅子であつた、そして草藪は修道院の壁垣のかはりとなつた<sup>1</sup>。かくしてフランシスカンの第一のInogo「處」は定められた、そしてこれが聖フランシスの表示した意志によれば、すべて他の處の模範となるべきものであつた。のちにフランシスの兄弟團體がこの理想から離れはじめたとき、この乖離の一つのしるしは、InogoまたはJoensが變つてもつと立派な convento「修道院」といふ名になり、そして團體から出た嚴重ならざる一派は修道院派と名をつけるやうになつた。「キリストの貧者」と名づけた新しい兄弟の團體、イエズアティはシエナの聖ジ・ウンニ・コロンビニによつて創められたのであるが、これはのちに昔のフランシス派の稱呼をふたゝびと

つた。

もとよりの一むれの弟子たちのほかにこゝにポルチュウクラに於いて今や新しい一むれの兄弟らがあつた。彼らはフランシスカンの第二のジネレーシオンと名づくべきものであつた。ベルナルド、エジディオ、アンジエロ、シルゲストロらのかたはらに、傳説や物語はこれより第二の名の列を並べる、ルフィノ、マッセオ、ジネプロ、レオネらはそれである。けれどこれらの若き人々は殆どより古き人々の光を失はせ、彼らをいくらか陰に押し遣つたやうに見える。舊き人々の多くはいくらか違つた傾むきがあつて、己れひとりになることを好み、共同の生活よりは孤獨に多くの價值を置いたやうに思はれる。さればシルゲストロはカルチエリの窟に籠つて祈りと靜觀に身をさゝけることを愛した。ベルナルドは森のなかで祈つてゐたとき、たゞ神のなかに我を忘れて、兄弟フランシスの彼を呼ぶにも心づかなかつた。時としては「彼はあるひは二十日、あるひは三十日もつゞけてたゞひとり最も高き山々の頂にさまよひて、高きにのみますものを觀たり」といふ。エジディオは遙々と旅の生活をして、あるひは聖地に、あるひはスバニヤに、あるひはローマに、あるひは聖ニコラスの堂のあるバリに赴いた<sup>2</sup>。

けれども傳説に倣つて、新しい人々の故をもつて、初期の仕事をした人々を忘れたならば、それは誤まつてゐる。わけてもフランシスに「圓卓の騎士」と稱へられたフラテ・エジディオのときについて曰へば、彼に於いては原始のフランシスの精神は最も生動し、最後まで生きてゐた。彼の一二六二年に聖ジ



ヨルジオの祭り日、彼が團體に入れられたとおなじ日に死んだときまで、エジディオは神のよき騎士として、そして貴とい聖女「貧しさ」の忠誠な聖ヨルジオであつた。彼の生涯はことに原始のフランシスカンの労働に對する愛を證しするものであつた。彼の傳記は彼のより若き友フラテ・レオネが書いたものであつて、かやうな言行に満たされてゐる。

聖地へ赴くみちで彼はプリンディジに來た、そしてそのとき直ちに船路に上る機會がなかつたので、彼は幾日かのあひだ町に留まらなければならなくなつた。こゝで彼は一つの古い水瓶を乞ひ受けて、泉のあるところに行き水を汲んで、町の道路をあるきながら、搬水夫のやうに呼びあるいた、「だれか水はいりませんか。」「Chi vuole dell' acqua?」水の價として彼はパンまたは彼やその友の身に必要なものを受けた。その順禮の旅からの歸りみちで彼はアンコナで陸に上つた。こゝでもまた彼は仕事を見出した、彼は籠の原料となる楊や、瓶を包むに用うる蘆を伐りつて、それを編んで、そして賣りあるいた、けれど金を受けるためではなく、たゞパンのみであつた。彼はなほ死體を墓地へ運んで、それによつて、彼のみならず彼とともにある兄弟らの着る着物を得た、彼はこれらの施物が、彼の眠れるあひだ、彼のために祈りをすることを欲した。

恐らくこのときアンコナに留まつてゐたときのことであらう、彼が一束の蘆を荷つて町へと歸つてくるのを見た一人の司祭は、エジディオがその側を通るときに「偽善者」といふ言葉を洩した。それを聞いたときエジディオは涙をとよめなかつた。そのとき、そして彼とともに在つた兄弟が彼の涙の故を問うたとき、彼は答へた、「一人の司祭が今日私に曰つたやうに、私は偽善者であるからである。」そしてそれがために汝はさう思ひこんだのか？」と兄弟は問うた。「その通り、」エジディオは答へた、「牧師は偽りを曰ふはずがない！」そのとき兄弟は彼に、牧師としての牧師と人としての牧師のあひだには區別があり、そして人としての牧師はときとして誤まりもするものであることを教へて、そしてかやうにしてあはれなフラテ・エジディオを慰さめた。

彼がローマを訪れてゐたあひだ、エジディオは毎朝はやくミサを聴聞して、そののち町からかなりはなれた一つの森に赴くことを習はしにした。そこでは彼は一束の薪をあつめて、そしてそれをローマに持つて歸つて、彼のパンやその他の必需品と換へた。ある日一人の貴婦人はその薪賣りがかつて彼女の見た一人の信心な人であることを見たので、彼の乞ふよりも多く與へやうと思つた、けれどエジディオは前の價の半はより多く取ることを拒んだ、「私は貪欲に陥つてはなりません、」と彼は宣べたのであつた。

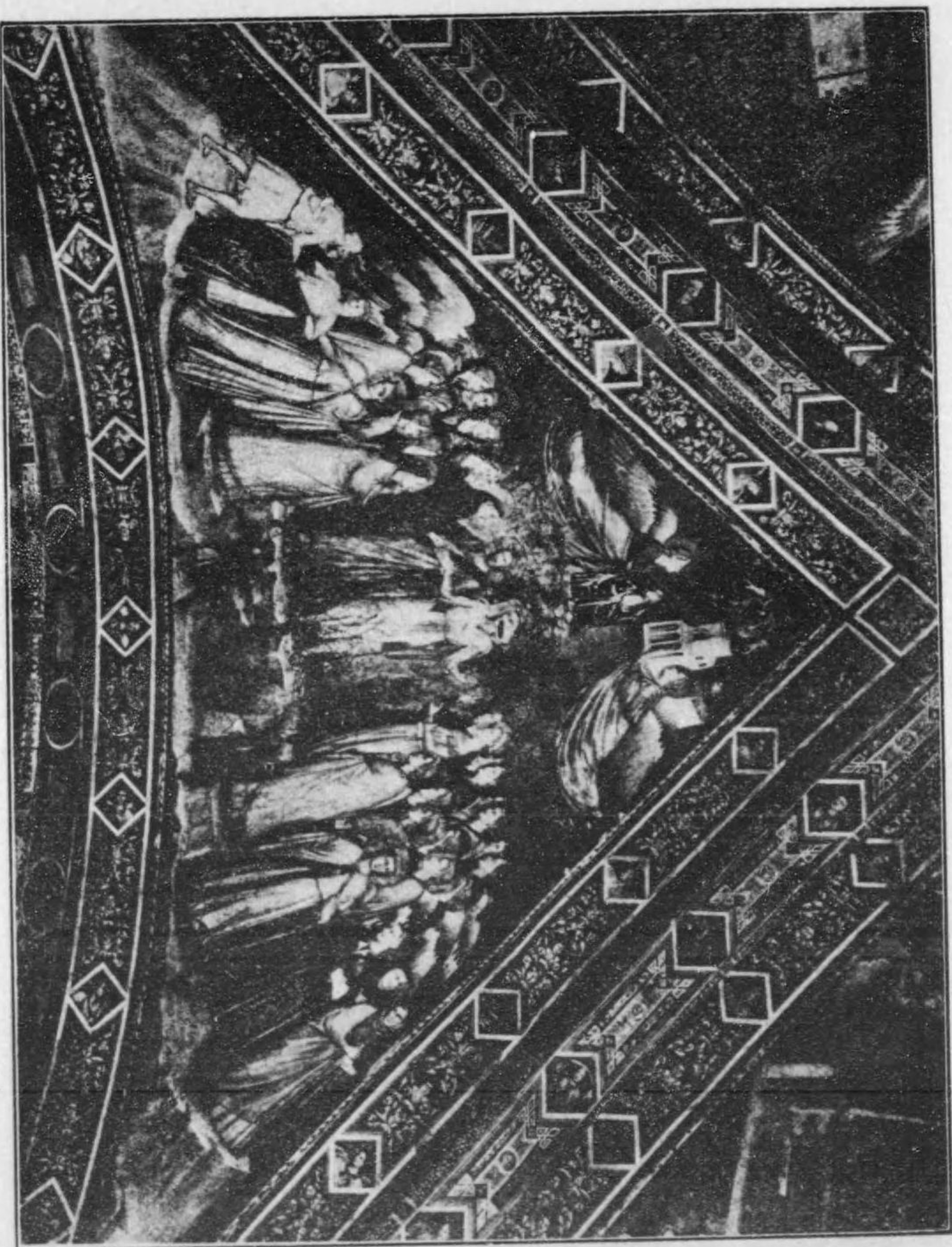
葡萄摘みのときには、彼は摘み取りの手傳ひをした、橄欖の收穫には、彼は橄欖をあつめた。彼は屢ばほかの漂泊者もするやうに野へ出て落穂を拾つた、けれど彼はその多くを他人に與へて、彼はそれを貯へる穀倉をもたないのであるから、と曰つてゐた。ローマの市外のサン・シストの泉を汲んで、彼はサンティ・クアットロ・コロナティの僧院の修道僧らに水を運んできた、そして彼はまたそのほかに僧院の庖厨を手助け



して粉を挽きそしてパンを焼いた。彼は生活をつゞけるためにあらゆる種類の労働をしたのであつた、そして彼はたゞ祈禱書をよむためと黙想するための時間をのこすことを豫め限つてゐた。

この休みなき労働の生活のあひだに彼は一つの深いフランス風の善心を抱いてゐた。あるとき彼はサント・ヤゴ・ディ・コンポステにゆくみちにあつたときに上着の頭巾を裁つて、一人の恵みを乞うた貧しき人に與へた、彼みづからはそののち二十日のあひだ頭巾なしで歩いてゐた。彼がロンバルディアを過ぎたとき、一人の男が彼を手招きした、エジディオは彼が彼に何か與へやうとするのだと思つた、そして近よつたときに、けれどその男は齒を出して笑ひながら、彼の手に二つの骰子を掴ませた。「わが子よ、神は汝を赦して下さいます、」エジディオは謂つて、己れの途を歩んだ。彼がサン・テ・クワットロ・コロナティの修道僧たちのところへ水を運んだとき、彼はアッピアの道で一人の旅人がその瓶から水を飲ませよと求めた。エジディオは拒んだ、それについて男は怒りそして罵りをはじめた。エジディオは答へなかつた、けれど彼が僧院に行くや否や彼は他の瓶をとり出して、それに汲み入れて、男を逐ひかけて彼に飲むことを乞うて、かく曰つた、「怒つてはいけません、私は修道僧たちのところへ人が口をつけた水を持つて行つてはならないと思ひましたから。」

トッスクルムの僧正カルチナレ・ニコロのごとき貴とき人の客となつてゐるときでも、彼は外に出て彼のパンを唄け、そしてそれをカルチナレの家の食卓で食べた、ある日急流のやうに雨がふつて、そしてカル



ジョヴァンニ・バプティスタ・ペーネ作

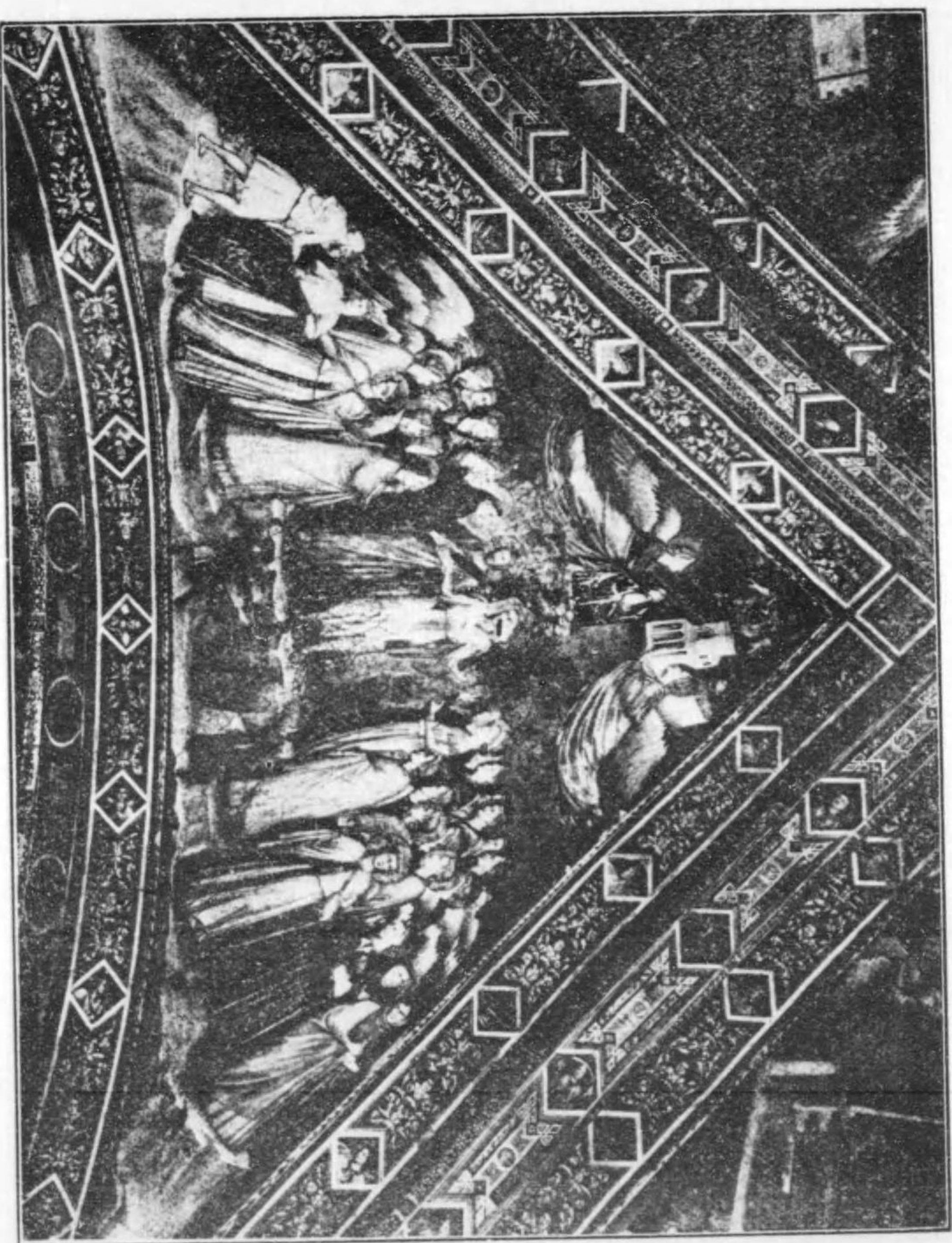
聖ラツラツと貴女「貧し」と結婚



して粉を挽きそしてパンを焼いた。彼は生活をつゞけるためにあらゆる種類の労働をしたのであつた、そして彼はたゞ祈禱書をよむためと黙想するための時間をのこすことを豫め限つてゐた。

この休みなき労働の生活のあひだに彼は一つの深いフランス風の善心を抱いてゐた。あるとき彼はサント・ヤゴ・ディ・コンポステにゆくみちにあつたときに上着の頭巾を裁つて、一人の恵みを乞うた貧しき人に與へた、彼みづからはそののち二十日のあひだ頭巾なしで歩いてゐた。彼がロンバルディアを過ぎたとき、一人の男が彼を手招きした、エジディオは彼が彼に何か與へやうとするのだと思つた、そして近よつたときに、けれどその男は歯を出して笑ひながら、彼の手に二つの骰子を掴ませた。「わが子よ、神は汝を救して下さいます、」エジディオは謂つて、己れの途を歩んだ。彼がサンティ・クワットロ・コロナティの修道僧たちのところへ水を運んだとき、彼はアピアの道で一人の旅人がその瓶から水を飲ませよと求めた。エジディオは拒んだ、それについて男は怒りそして罵りをはじめた。エジディオは答へなかつた、けれど彼が僧院に行くや否や彼は他の瓶をとり出して、それに汲み入れて、男を逐ひかけて彼に飲むことを乞うて、かく曰つた、「怒つてはいけません、私は修道僧たちのところへ人が口をつけた水を持つて行つてはならないと思ひましたから。」

トウスクルムの僧正カルヂナレ・ニコロのごとき貴とき人の客となつてゐるときでも、彼は外に出て彼のパンを贏け、そしてそれをカルヂナレの家の食卓で食べた、ある日急流のやうに雨がふつて、そしてカル



ジョヴァンニ・バプティスタ・カッポ

結婚の「さし貧」女貴とスツランテ



チナレは今日こそはエジディオが彼の設けた食物をたべるであらうと思つて悦んでゐた、そのあひだにフラテ・エジディオは厨に行つた、そしてそこが不潔なのを見たので、彼は料理人に二つのパンの報酬をもつてことを掃除することを申し出た。料理人はそれを承知した、そしてカルデナレは望みを失つた。つぎの日もまた雨がふつたとき、エジディオは家中にあるだけのすべての小刀を研いで二片のパンを受けた。

「フラテ・エジディオの叡智」といふ名のもとに彼の晩年に出たらしき力つよき語録や教訓がいくつか書き記されてある。またかやうな話がある、あるとき二人のカルデナレたちが彼を訪づれて、そして別れを告げるときに恭しく彼の祈りのうちに二人をも薦めむことを請うた。「それは、私があなたがたのために祈りするといふことはたしかに必要なことでございます。わが君たちよ。」エジディオはかやうに答へた、「あなたがたが私よりも多くの信仰と希望をもつていらつしやることは明らかであります。」「それは如何にして？」二人の教會の公候は問うた、駭いて、またフラテ・エジディオが機智に富むことがよく知られてゐたので、いくらかは愛はしくされて。「何故となれば、この世の富みと譽れと榮えをかやうに十分にもつていらつしやるあなたがたはなほ救はれる希望をもち、そしてかやうに貧しく乏しく生きてゐる私は、すべてにかゝらず死後の罰をうけることを恐れてゐるではありませんか！」

死に至るまでフラテ・エジディオは聖フランシスの理想——貧しさ、純潔さ、歡こびを見ずることなく生活してゐた。彼が純潔の徳を讃へてつくつた一つの歌は他の詩の斷片とともに今まで傳はつてゐる——



O santa castitate ! Quanta è la tua bontate !

Vermamente tu se' preziosa, e tale

E tanto souo il tuo ardore

Che chi non ti assaggi, non sa quanto vale.

Impero li stolti non conoscono il tuo valore.

(お、聖なる純潔よ、なんぢの徳の大なることよ、まことになんぢは貴とし、しかしてなんぢの芳はしさはかばかり甘ければ、なんぢを味ひみざるものはこのいかにたふときかを知ることなし。されば愚かなるものはつひになんぢの價をしらざるなり。)

ベルジアなる彼の小さき修道院の庭に於いて彼はやさしく鳴く鳩たちに耳かたむけ、そしてそれらと語つた。そして美しき夏の朝に人は彼が彼の植ゑた花床のあひだを歩きつかへりつして神の讃へを歌ひ、そしてあだかも一つのギオリンを弾くやうに二つの木の枝をとつてたがひに擦りながら遊んでゐるのを見た。

はじめのより古き兄弟らがかやうにおほく己れみづからのために生活してゐたときフランス派の新しきジネレーションは殆どつねにフランスの伴侶として生活してゐた。ことにアッシジの近くのマリニャノに生れたマッセオは師のさまの重要な旅に伴はれた。フランスは「はなはだすがた賤しく、丈ひくく、それ故彼をしらぬ人々からまつたくつまらぬ人のやうに思はれた」のに對して、マッセオは「丈高く、

みめよく、辯舌すぐれて、よく人々と語つた」、二人ともに物乞ひにゆくとときフランスは「パンのきれとまたはすこしの残物、それも乾いたのを」得た、けれどマッセオは「よき大きい片と、そして十分な全たき塊」を得てきた。そしてこの丈高い、みめよき、そして雄辯なマッセオはカルチェリに於いて働らき「戸を守り、施物を受けとり、そして庖厨の世話をする」ことを務めとしなければならなかつた、さうして彼はひとり家中の重荷を負つてゐて、他のフラテラは安らかに祈りや靜思に耽ることができた。そしてあるときは彼フランスに從つて歩んでゐたとき一つの分れ道へきかゝつた、そこからはフィレンゼへも、シエナへも、またアレツオもゆくことができた、そしてフラテ・マッセオは問うた、「父よ、いづれの道を私たちは行きませうか？」フランスは答へた、「神の欲したまふみちへ。」けれどフラテ・マッセオはなほ問うた、「いかにして神の御旨を伺ひませう？」そしてフランスは答へた、「それは今私が示す、聖とき從順の名に於て、私は汝に命ずる、こゝに道の真中で、子供のするやうにぐるぐるまはりをして、そして私が生まれといふまで止まつてはいけない。」フラテ・マッセオは子供のするやうにぐるぐる回りをはじめた、そして彼は眩んでいくたびか倒れた、けれどフランスが何も曰はないうちには彼はまた起つて回つた。つひに彼は大きいなる力をつくして身を回してゐた、フランスは曰つた、「生まれ、そして動かずに！」彼はじつと立ち止つた、フランスは問うた、「何方へ汝の顔は向つてゐるか？」フラテ・マッセオは答へた、「シエナの方へ！」そのときフランスは曰つた、「それでは私たちがけふシエナに行くことが神の御旨である。」



フランスはこの丈の高い立派なフラテ・マッセオにこのほかにもかやうな教訓をしたのでつひに彼は己れを卑しく小さきものと思ふやうになつた。そしてマッセオはまったく深き謙だりに達した、されば彼は日に目にあらゆる徳に於てつよく生ひたちながらも、自らを一人の大いなる罪人と思ひ、もつともよく地獄の苛責を受くべきものと思つてゐた。そしてけれど彼の謙だりは彼をふしぎな内部の光明をもつて満して彼はつねに歡ばしさに充ち満ちてゐた。そして屢ば彼が祈つてゐるとき彼は叫びをあげて悦びを洩した、それは鳩の啼くやうに單調な聲であつた、そしてたのしげな顔と幸ちある心をもつて彼は神の觀照に生きながら、けれど己れは人々のうちもつとも卑しきものであると思つてゐた。けれど彼が老いてからあるとき若いフラテ・ヤコポ・ディ・ファルロネは彼に問うた、何故彼は歡びを語る仕方をかへず、新しき歌を作らないのか？ そのとき彼は大なる悦びをもつて答へた、「何故となれば、あらゆる歡びをたゞ一つのものに見いだす人はたゞ一つよりほかの歌を歌ふべきではない。」<sup>3</sup>

アッシジのフラテ・ルフィノが若い諸弟子のうちにあることは、舊い人々のなかのベルナルド・デ・クィンタヴルレを思ひ出させる。この人のやうに、彼は貴とい家に生れた——彼は貴とい族シフィ（若くはシエフィ）家に屬してゐた。そしてベルナルドのやうに彼は隱者とならうと欲する傾向があつた。その傾向はきはめて強く、そしてつひに彼はある一つの機會が現はれたとき、殆どフランスのもとを離れ去らうとした、その實行的なキリスト教は彼にとつてはむかしの沙漠のなかに棲んだ隱者たちのやうな簡單な禁欲の孤獨の

生活ほどうれしく思はれなかつたのであつた。彼は屢ば祈りと靜思に沈んでゐた、そしてそのとき彼は殆どその深みから呼び起されることはなかつた、そして彼がつひにめざまされたときに、彼の曰ふことにはすこしも聯絡がなかつた。<sup>4</sup>

またこれに對してフラテ・ジネプロはまったくすべて聖フランスの精神をもつてゐた。彼についてはフランスは戯れて曰つた、「このやうなジネプロ（杜松）の木を森を私たちが所有してゐたならば！」これも彼のしたことである。ある日ボルチウンクラの修道院で病に臥してゐた一人の兄弟は、料理した豚の腿をたべたいと願つた、ジネプロは森の中へ驅けて入つて、そこへ擗の實を食ひに行つてゐた豚のなかの頭を捉へて、その脚を截つて、それを料理して病める兄弟に與へた。そのあとから豚の飼主なる農夫はやつてきてフランスに訴へた、その疑ひはたゞちにジネプロにかゝつた。彼は呼ばれたとき、隠さず彼の行ひについて答へた。彼は曰つた、「何故となれば、この豚の足一つのために我々の兄弟はあのやうに快くなくなりました、そして私はそのために百頭の豚の足を截つても後悔いたしませんまい！」やうやくのことでフランスはこのやうにして隣人の所有に加へたことが身勝手な侵害であつたことをジネプロに論じた。「よろしうございます、彼はつひに曰つた、「あの男は私たちを恨んでゐるのでございますか、それでは私は彼に逢つて、なだめて見ませう。」そして彼は足のかぎり走り、そして怒れる農夫を見出して、そして事の始終を話した——病みふしてゐる一人の兄弟が豚の足の煮たのを欲したこと、そして豚は人の養ひと食物となる



ために飼はれてゐること、そして物はみな平等にすべての人のものであること、それはたれも小さな豚のやうなものさへ人の手で作ることとはできない、故にけれどひとり神のみがそれをなし給ふこと、そしてそれ故に彼は病者が甚しく欲しがつてゐたために一つの豚の足をとつたことを――

このことをフラテ・ジネプロは極めて十分にそしてきはめて歡ばしげに、その怒つてゐる農夫に話した、彼はたしかに一頭の豚の足の損害はよく理解されそして免されることと思つてゐた。けれどそれはさうならなかつた、その男はジネプロを罵りはじめた、そして彼を悪者、盗人、剽盜、愚かものとまで呼んだ。「如何したのであらう、彼は私の話がまるで解らなかつたに違ひない、」ジネプロはさう思つて、また新たに話をくりかへして、まへよりもつと臍に落ちるやうに曰つた。そして彼が話の終りまで來たとき、彼は農夫の頸を抱いて、そして叫んだ、「ごらんさい、私はたゞあはれな、病める兄弟のために、彼がよくなるためにしたことです、そしてそれについてあなたは私の助けになつてくれたのです、だからあなたはそれで悲んだり怒つたりすることは止めなければなりません、かへつて私たちは一しよに悦びあつて善き神様にかうして地の實りの、野の牛や羊のむれや、森の獸やさまざまのものを與へて下さつて、そのうへ私たちがみな神の子どもであつて、そしてお互ひに助けあつて兄弟や姉妹のやうに仲よくすることを欲していらいつしやることを感謝しやうではありませんか、さうではありませんか、私の親しい、善き兄弟よ？―そこでフラテ・ジネプロは農夫を胸に抱きそして彼に接吻した、そして農夫はそれについてよく思ひ

あたり、彼の頑なであつた心のために苦い涙をながして神と兄弟らに救しを乞うた、そして彼は去つて一頭の豚を捕へて、これを殺し、料理して、みづからボルチウンクラの修道院に携へてきて兄弟らに贈つた。

このフラテ・ジネプロはあるとき小さい修道院に住んでゐたことがあつた、そしてそこである日他の兄弟らは外に出て各の労働に赴くことゝなつた。そして彼らが出て行くとき、院主なる兄弟はジネプロに教へてかう曰つた、「私たちがするすのあひだよく家を守つてゐてくれ、そして歸つてくるまへに少しばかり食物を用意して置け。」「よろしうございます、」ジネプロは答へた、そして他の人々は出て行つた。

彼は一人のこつたとき、曰はれたことについてよく考へてみた。そして彼は木を割り薪をあつめたりして火を焚きながらひとり謂つた、「かやうにして兄弟の一人は毎日庖厨に居残つて、そこですこしばかりの祈りをするのもできないで時を費さなければならぬといふのは、ほんとうにわけのわからぬ話ではなにか！ 私は、かうしてみよう、けふはそこで食物をどつさりこしらへて置いて、もし兄弟らがもつと多く居やうとも、このさき十分二週間はつづくほどにして置かう。」かやうに考へがきまつたのち、ジネプロは近くの町へ赴いて、そこで澤山の土焼きの壺と、肉と、鳥と、卵と、多量の野菜を買ひ集めた。彼は大きな火を燃やした、そして壺に水を汲んで、そのなかに食物をみな入れてしまつた、小鳥と肉も一しよに羽も除らずに、野菜は洗ひもせず、他のものもおなじやうにした。

兄弟らが歸つてきたときフラテ・ジネプロは眞赤になつて煮炊をしてゐる最中であつた。恐しい大きい焚



火は音をたてゝゐた、そしてジネプロは一つの壺から次の壺に飛びまはつてゐるのが見てゐるのも面白いやうな有様であつた、そしてあまり火がつよくて側によれないので、彼は長い棒で壺のなかを攪きまはしてゐた。つひに彼は食事の鐘を鳴らした、そして仕事と火の熱とで眞紅になつて彼は食物の皿を運び出してそれを集まつた兄弟らのまへに供へた、そして曰ふには、「食べませう、そしてそれから一しよに祈りにまゐりませう！ 私は今日澤山の食物を煮ましたからこのさき二週間はこれで十分に保ちます！」そのあひだ兄弟らの一人としてジネプロが妙へな辯舌で宴でもあるやうに羞めた食物に手を觸れるものはなかつた。そのときフラテ・ジネプロに彼の仕業がどんなものであつたか、明らかにわかつた、彼は兄弟らの足もとに身を倒して、跪いて、胸を打ちながら、かやうに多くの善き食物を無益にしたことの罪を乞うた。

このやうな行爲の底にあるものはつねに純粹なナイーヴテのみではなかつた。時としてフラテ・ジネプロはかやうな諧謔的な方法で他の兄弟らが團體の精神にはなれて行くものに教訓を與へやうと欲した。あるとき彼が野生のロブスカスを食事に供へたとき、兄弟らは珍らしがつてあまり多くの時と興味を庖厨に費した。それに對する譴責は最良の仕方ですらフラテ・ジネプロによつて爲された、夜半になつて彼は一皿の粥の眞中に大きな塊のバタを入れて、それをまへの夕に彼が施しをするのにあまりに熱心であることを責めたところの守人グアルディヤノのフラテに羞めた。

「父よ、」ジネプロは片手に粥の皿を捧げて、片手にともした蠟燭をもつて、戸のまへに立ちながら曰つた、

「今日あなたは私の過まちをお叱りになつたとき、あなたはあまりの御熱心のために聲を哽らして居られましたやうにお見受け致しました。そこで私はあなたのためにこの粥をとゝのへました、これをどうぞ食べて下さい、これは喉と胸の藥になります。」守人はこの時ならぬ親切の心をさとつた、そして彼はつけつけとフラテ・ジネプロにこの馬鹿らしい悪戯をやめて出て往けと命じた。「それでは仕方がございません、」彼は曰つた、「折角つくつた粥ですから食べなければなりません、どうぞ私が食べるあひだ蠟燭をもつてお下下さい。」守人もまたまことのフランシカンであつたので、彼はこの不遜に對する答へとして、フラテ・ジネプロとともに食卓について彼と一しよに粥を分けて食べた。

かやうな特色はフラテ・ジネプロを名高い人にしてしまつた、そして彼が過ぎるところには人々、彼を観るために集まつてきた。あるとき彼はローマに遣はされた、そして幾人かの高貴な人々——絹ずれの音をさせて、香水を匂はせながら、かのカタコムブのなかに殉教者たちの墓を柄附の目鏡でながめて見物してゐる現代の貴婦人たちと同じタイプの——がわざと彼に逢ふために市の門のそとに赴いた。フラテ・ジネプロはそのことを聞いて、ただちに彼らの敬虔の假面をつけた好奇心を弄ぶいたづら考へついた。道の側の原には二人の少年がシーソーをして遊んでゐた、一本の材木を支への上に架けて、各の材木のはしにすはつて互ひ違ひに上つたり下つたりしてゐるのであつた。そこでジネプロはその一人の少年に代つて材木に乗つた、そして高貴な人々がやつてきたときに、それらの人はこの神の人が熱心にシーソーをしてゐ



るのを見て驚いた。けれど彼らはまづ彼に恭しく禮して、そして彼が遊びをやめて彼らのところへ来るのを待つてみた。けれどフラテ・ジネプロは彼らの挨拶や待つてゐることについてはすこしも心にかげなかつた、却つて彼はなほ力をこめてシーソーをしてゐた。そしてつひに人々はかやうにして長いあひだ待たされて、そしてジネプロはいつまでも遊びから離れないので、彼らはつひに彼の謂ゆる尊といフラテはたゞあたりまへの百姓で、鄙しい無學な男だと曰ひあひながら、氣色を損つて立ち去つた。そのあとではじめてフラテ・ジネプロはシーソーをやめて、徐かに、ひとりでローマに向かつた。

ジネプロはフラテ・レオネやリエティのフラテ・アンジェロ・タンクレディと同じく、師の死んだのち擇ばれて聖キアラ(クララ)の友となつた少數のサークルの一人であつた。フラテ・ジネプロは前に曰つた二人とともに聖キアラの臨終を守つた。彼女はこの聖フランシスの忠實なる弟子が彼女の病床のかたはらにあらはれたときにたのしげに彼に「神よりのお知らせは何ごとでございますか？」と問うた、そして彼は彼女のかたはらにすわつて、彼女に「言の葉のもゆる火花」をもつて語つた。

ジネプロとおなじ森に生えた木であるときものは「單純な」フラテ・ジョヴァニであつた、その團體に入つた始終はつぎのごとくに語りつたへられてゐる。

「兄弟らがボルチウンクラに住みて、人數多からざりしころ、聖フランシスはアッシジの近郊なる町々寺院などを巡りて人々に悔い改むべきことを説教し、しかして彼は寺院の塵埃をきよめむためつねに箒を携へ

たり、そは聖フランシスにとりては寺院が彼の欲するほど清からざるを見るときはなほだ悲しかりければなり。されば屢ば彼は説教をやめて、司祭たちを物かげに呼びあつめて、他の人々の聞かざるところにて彼らにたましひの救ひのみちと、殊に寺院と祭壇とまた聖とき神祕の禮拜に用ゐらるゝ諸器具を清むべきことを訓しへたり。

しかしてある日彼はアッシジに近き一つの村に來りて、あらゆる謙だりの徳に於て會堂を掃ききよめはじめたり。されど彼そこきたれりといふ知らせはたゞちにその村ちうにひろまり、しかして畠を耕しみたる一人、農夫もそれを聞きたゞちに來りて、彼が寺院を清むるに忙しきを見たり。名はジョヴァニと曰ひたるこの農夫は彼に曰ひぬ、「兄弟よ、われにその箒を與へたまへ、われは汝を助けむ。」かくいひて彼は箒を執りて力をこめて掃ひをはりたり。そのうち二人はともにすわりて、彼は聖フランシスに曰ひけるは、「兄弟よ、久しきあひだわれは神に仕へむことを願ひぬ、ことになんちとなんちの兄弟らのことを聞きてよりわれはこの願ひにたへざりき、されどいかにしてなんちに逢ふことを得べきかを知らざりき、今神の御心もてわれらを逢はしめたまひぬ、さればわれはなんちに喜しと思はるゝことをすべて爲さむと思ふ。」

聖フランシスかくのごとき熱心なる人を見たるとき、彼は主に於て歡びぬ、ことに彼はこのときいまだ多くの兄弟らを伴はず、またこの單純なる正しき人はよき兄弟となるべきを思ひたればなり。されば彼は彼に曰ひぬ、「兄弟よ、もし汝心にわれらのごとくして生きむことを願はば、汝の自由にあるすべての所有



より離れ、それらをみな貧しきものに、福音のことばに従ひて與へ去らざるべからず、わが兄弟らはみな各の力にしたがひてかく爲しぬ。」

これを開きたるとき彼はたゞちに歸りておのが畠にゆき、鋤につなぎおきたる牡牛の群れを放ち、その一つを牽きて聖フランシスのもとに歸り、曰ひぬ。「兄弟よ、すでに幾年かわれはわが父と家中の人々のために働きたり、それ故われはわが譲り受くべきものとしてこの一頭の牛を取り、しかしてなんちにもつともよしと思はるゝ仕方にてこれを貧しきものに與へむ。」

されど彼の父母、または同胞のみな彼より若きもの、彼が家を去らむとするを聞きたるとき、彼らはいたく歎きてやまざりしかば、聖フランシスは憐れみにうごかされたり、そは彼らいと多數にてしかして何ごとをも爲す能はざりければなり。それ故に彼は彼らに曰ひぬ、「この汝らの子は神に仕へむことを願へりしかしてこのことは汝らをいたますべきことにあらず、むしろ汝らをして悦ばしめむ。されど汝らが慰めらるべきために、われは彼をして汝らにこの牡牛を與へしめむ、彼は聖書の旨にしたがひてこれを他の貧しきものに與へむと欲したるなれど。」そのとき彼らはみな心を安んじたり、聖フランシスがかく曰ひしこと、また彼らが牛を再び得たるためなりき。

フラテ・ジョヴァニニはかくて團體の服を着たり、しかして彼の單純なることはかくのごとくにて、彼はすべて聖フランシスの爲せることをみな爲すべきなりと思ひぬ。されば聖フランシスが會堂のうち、または

他のところにおいて祈りをなすとき、彼はみな彼の作法と態度を模せむために、仔細に彼を見守りたり、しかして聖フランシスが膝を屈め、または手を天にあげ、あるひは唾し、あるひは嘆息するとき、彼はまつたく同じことを爲しぬ。されど聖フランシスこのことを知りたるとき、彼ははたはだたのしげにこのことを責めたり。そのときフラテ・ジョヴァニニは答へぬ、「兄弟よ、われはすべてなんちの爲すことを爲さむと約しぬ、さればあらゆることにつきて汝の眞似するはふさはしきことなり。」<sup>6</sup>

聖フランシスが年少な兄弟のなかで——否、このときのすべての弟子たちのなかでも、最も親しき友とし、特別に信頼したのはアッジの生れのフラテ・レオネであつた、彼はフランシスの懺悔を聞く人として、そして祕書役としてつとめてゐた。フランシスは彼を名づけて、ことさらに彼の獅子レオネといふ名を厭つて、*Fratre peccorella di Dio*(神の小羊なる兄弟)と呼んでゐた。

*Fioretti*(小ざき花)によれば、この兄弟とゞもにフランシスは一たびあるところへ行つたとき、祈りせむとしてそこには一つも祈禱書がなかつた。そして神を讃へつゝ時をすごすために、フランシスはつぎに記す對唱の祈禱のことばを曰ふべきことを命じて謂つた、「われまづ曰ふべし、『おゝフラテ・フランチェスコよ、汝はこゝにこの世に於いてかばかり多くの悪しきことを爲しかばかり多くの罪を犯しぬ、されば汝は地獄にゆくべきものなり。』しかしてレオネよ、汝はかく答へざるべからず、『しかり、まことに汝は地獄のもつとも深きところに値ひすらものなり』と。」



そして鳩のやうに溫和にフラテ・レオネは答へた、「父よ、悦んで命のごとくせむ、神の御名に於て始めたまへ。」

そしてフランシスは謂ひはじめた「おゝ兄弟フランシスよ、汝はこの世にてかばかり多くの悪しきことを爲しかばかり多くの罪を犯したり、されば汝は地獄にゆくべきものなり。」そしてフラテ・レオネは答へた「神は汝によつて多くの善きことを爲したまはむ、されば汝は天の國にゆくべきものなり。」

そのときフランシスは答へた、「フラテ・レオネよ、しかいふこと勿れ、わが『フラテ・フランチェスコよ汝は神のまへに多くの不義を爲したれば、汝は死後の罰を受くべきものなり』といふとき汝はかく答ふべし、『汝はまことに死後の罰あるものゝなかに來るべきなり』と。」

そしてフラテ・レオネは答へた、「父よ、悦んで命のごとくせむ。」

そのときフランシスは歎きかつ泣き、胸を拍つて聲を高めて曰つた、「おゝ主よ、天と地の神よ、われはおんみにむかひてもかばかり多くの不義を犯しかく多くの罪をなしぬ、さればわれは死のゝちに主の罰を受くべきものなり。」そしてフラテ・レオネは答へた、「おゝ兄弟フランシスよ、神は汝に於いて多くの善きことを行ひ給はむ、故に汝はすべての祝福せられたるものにまして祝福せらるべし。」けれどフランシスは何故レオネがこのやうにして、教へられたやうに答へないのかと怪しみながら、彼を叱つて曰ふには「汝は何故にわが曰ふごとくに答へざるか？ 聖とき従順の名に於てわれは汝にこれより教ふることをばをもつて

答ふべきことを命ず。われはかく曰ふ『おゝ汝悪しきフランシスよ、汝は神が汝にあはれみを垂れたまふと思へるか、汝は憐れみの父と慰さめの神にむかひてあまたの罪を犯しぬ、さればいかにしても汝は憐れみを得べき値あらざるなり？』しかし汝はフラテ・レオネよ、神の小羊よ、かく答へよ、『汝はまことにいかにしても憐れみを受くべきものにあらざるなり。』けれどこのあとでフランシスがまた「おゝ汝悪しきフランシスよ」と始めたときに、フラテ・レオネは答へた、「父なる神の憐れみふかきは汝の罪よりも限りなく大いなり、されば彼は汝に大いなる憐れみを示したまひ、しかしてまた汝に多くの恩寵を示しこまはむ。」この答へについてフランシスはかなり氣色を損じ、そしてすこしく平常の彼から離れたやうにレオネに曰つた、「何故に汝はかくわが命を聽かざる、今汝はあまたゝびわが教へたと反對のこのみ答へたるは何故ぞ？」けれどフラテ・レオネは恭しく畏るゝ答へた、「父よ、その度ごとにおんみの教へしごとく答へむとせしことを神は知り給ふ、されど神はわれを強ひて神の欲することく答へしめたまひてわが欲することくになさしめたまはず。」フランシスはこのとについてはなはだ怪んだ、そしてフラテ・レオネに曰つた、「われ汝に愛に於いて請ふ、このたびはわが教へたるごとく答へよ。」フラテ・レオネは答つた、「神の御名に於てわれはまことに汝の欲することく答へむと思ふ。」そして涙とゝもに、フランシスは今日つた、「おゝ汝悪しきフランシスよ、汝は神が汝に憐れみを垂れたまふべしと思へるか？」フラテ・レオネは答へた、「大いなる恩寵を汝は神よりうくべし、しかし彼は汝を高め、汝をあらゆる永しへに榮えしめたまはむ、何故とな



ればみづから己れを卑くするものは高めらるべければなり。しかしてわれはこれよりほかのことを曰ふ能はず、神わが口より語り給へばなり。」

いつも「小<sup>ファイオレット</sup>さき花」に記されたことであるが——これもまたフラテ・レオネと俱にあつたとき、フランシスはある冬の日、ベルーシアからポルチウンクラに行つた、そしてきびしい寒さはことに彼らを苦しめた。そしてフランシスは先に立つてゆくレオネを呼びとめて、そしてかやうに語つた、「フラテ・レオネよ、よく聞き、しかして書き記せ、もし我ら兄弟ら全世界のうへに聖とさと建徳のよき模範となるも、そのなかに決して完全の歡こびはあらざるなり。」そしてフランシスはまたすこしばかり先に行つたときに再び呼んで曰つた、「おゝフラテ・レオネよ、もし我ら兄弟ら盲しひたるものを明らかにし、跛者を癒し、悪鬼を逐ひ聲人を聞くこと能はしめ、躓へたるものを歩ましめ、啞を語らしめ、あるひはなほ進んでは死して四日をすぎたるものを甦らしむるとも、汝よく聽けよ、そのなかに完全の歡こびはあらざるなり。」

彼はすこしく行つて、聲高く呼んだ、「おゝフラテ・レオネよ、もし我ら兄弟らあらゆる邦の言語を知り聖書のあらゆる叡智を盡し、しかして未來を啓き他人の心の祕密を知る力ありとも、汝よく聽けよ、そのなかに完全の歡こびはあらざるなり。」

そしてフランシスはなほすこしくあゆんで、そして高い聲で叫んだ、「フラテ・レオネよ、汝神の小羊よ、たとへ我ら兄弟ら天使らの舌もて語り、星の道と藥草の徳を知り、あらゆる地の實を教へられ、なほ鳥と

獸と魚との性と力を、また人と木と石と根と水の性とを知りつくすとも、されど、これも汝よく聽けよ、そのなかに完全なる歡こびはあらざるなり。」そしてフランシスはなほすこしく先に進んで、そして高き聲で曰つた、「おゝフラテ・レオネよ、たとへ我ら兄弟ら説教を巧みにして、あらゆる邪道のものキリストの信仰に悔い改めしむるとも、されど、汝よく聽けよ、そのなかに完全の歡こびはあらざるなり。」

そしてかやうに語るあひだに道の半ばを過ぎた。けれどつひにフラテ・レオネは怪しみながら問うた、「父よ、神のために、請ふらくは、いづこに完全の歡こびあるかを教へたまへ。」そしてフランシスは彼に答へた、「我らかくてポルチウンクラに到りつき、雨にぬれそぼち、寒さに凍え、泥によこれ、饑ゑにくるしみつゝ我らはかしの戸をおとなふとき、門守は來り怒りて曰ふ、「汝らは何者ぞや？」しかして我ら、「我らは汝らの兄弟二人なり、」しかして彼は曰ふ、「汝は僞はれり、汝らはさまよひあるきて人を欺き、貧しきものより彼らの恵まれたるものを奪ひ去る二人の盜人なり、立ち去れ、」彼はかく曰ふとき戸を開かむと欲せずたゞ我らをそとなる寒きところに雪と雨と饑ゑのなかに立たしめ、しかして夜は落ちきたる、しかしてわれらかくのごとき恥しめの言葉と、かくのごとき誤まりと、かくのごとき取り扱ひを堪へ忍ぶとき、心怒ることなく、彼と争ふことなく忍びて、たゞ謙だりと愛のために思ひて、かの門守る人は我らがまことにたれなるかを知れり、されど人をしてしか曰はしめたまふはこれ神の御旨なりとなすとき——おゝフラテ・レオネよ、よく聽けよ、これぞ完全の歡こひなるを。しかして我らなほ戸を敲きてやまず、しかして彼は



來りて、怒りつゝ、我らを二人の盗人のごとくにあしらひ、我らを悪しき言葉と毆打もて逐ひ、なほ我らに曰ふ、『出でよ、恥をさらざる悪人らよ、癲病者のもとにゆけ、こゝに汝らは食物も一夜の宿りをも許されず、』しかるに我らはこれをも忍耐と樂しさと愛をもて堪へ忍ぶとき——おゝフラテ・レオネよ、よく聽けよ、このうちに完全の歡こひあり。しかしてもし我ら寒さと餓えと夜に逼られて再たび戸を敲きて、彼に熱つき涙をながして、神のためにたゞ鬨のうちに一步だに入れられむことを乞ふに、彼はなほ怒りを増して曰ふ、『汝らはまことに恥をさらざる浮浪人らなり、されど汝らを今似合はしき辛き目は逢はせむ、』彼は節くれたる杖を手にして走り出で、我らの頭巾を捉へて地に投げ倒し、我らを雪のなかに顛して殆ど我らを打ち殺さむとす、しかしてもし我らこのすべてを忍びて、キリスト、讃へられたまふ一人の受難を思ひ、しかして彼を愛するの故に我らいかばかり苦しまざるべからざるかを思ふとき——おゝフラテ・レオネよ、よく聽けよ、このうちに完全の歡こひあることを。

「しかしてこのすべてのことの結論を聞け、フラテ・レオネよ。キリストが彼の友に與へたまふ聖靈のありとある恩寵とたまものすべてよりも優れるは己れに克つことゝ、くるしみとあざけりと苛なみと冤罪を悦んで堪へ忍ぶことゝなり。何となれば神よりの他のたまものはみな、われらこれを自らのものとしてほころ能はず、そは我らのものにあらずしてたゞ神よりのものなればなり、それゆゑに聖使徒は曰はく、『汝受けずして持てるものありや？ されど汝そを神より受けたるならば、何故に汝はそを汝みづからより有

てるがごとくそれについてほころるか？』されど試みと惱みと十字架をばわれらはわれらのものとしてほころを得む、そはまことにわれらのものなればなり、されば聖使徒はまた曰へり、『我は主イエス・キリストの十字架に於てのほか榮えむことを願はず、』と。

エルネスト・ルナンが謂つたやうに、聖とき使徒たちの時代については、福音を實現せむとする力つよき企てはフランスによつて起された運動に於けるにおよぶものはかつてなかつた。さればある敬虔な人がある夜かやうな一つの夢を見たといふこともふしぎなことではない、たとへば、この世に生けるかぎりのすべての人々は盲人となつてボルチウンクラのまはりにあつまり立ち、そして手を合せて、顔を空に向けて、神に彼らの視力を返したまはむことを叫んでゐた。そして彼らがかやうにして立つてゐたとき天は開き、そして大いなる光はボルチウンクラのうへに降り、そしてあたりに立つてゐたまへに盲ひであつた人は彼らのまなこを開き、そして救はれの光を見た。

1. 「完全の鏡」、五、七、十、その他
2. 「小さき花」、三、十六、二十八
3. 「小さき花」、十一、十二、十三、三十二、
4. 「小さき花」、二十九—三十一、
5. 「小さき花」に添へられた「フラテ・ジネプロの傳」を見られよ。
6. 「完全の鏡」、五十六—五十七、
7. 「小さき花」、九、八、その後者は聖フランスの訓戒(Admonitiones) 25. をやらに「ラポレートしたものと見える。



## 五 聖キアラとサンタミアノ

男はしばしは理論を代表するのみで満足しなければならぬときに、實行はしばしすべての理論なしに女の務めとなるものである。もし女が一たびそれを己が手のなかのものとしたときには、たれも彼女よりも完全に一人の男の理論を實現するものはない。

かう曰つたからとてアッシジのフランシスみづからが、彼の説いた福音を實現しなかつたと思つてはならない、それはまつたく反對である。けれどもフランシスカンの生活をすべての無理な附加物や、または他よりの面白からぬ影響をまつたくもたないすがたで眺めやうと欲するならば、人はまづ他のすべてを措いて彼の大いなる女性の弟子、アッシジの聖キアラに向はなければならぬ。彼女みづからも己れをフラテ・フランチェスコの草と呼ぶことを好んだ。彼女はまことに聖フランシス派の花である、そして彼女が棲んだ處々を訪れるものは、七百年のすぎたのちにさへも、ふしぎに淨らかに、そして心にしみ入るこの花の薫りを感じるのである。

キアラ(若しくはクララ)はアッシジで一一九四年の多分七月十一日に生れた。彼女の父はファヴァリノ・ディ・シフィ、母はステルベトに住んでゐたフィウミ家からきたオルトラナであつた。この家は父母のいづれの側

からも貴かつた、そしてシフィ家はアッシジの最も高貴な家々の一つであつた。ファヴァリノはサツ・ロッソの伯爵と稱してゐた。この名はアッシジのうへに高く聳ゆる岩山の名である、そしてこの壁壘をめぐらした住家は今なほ訪れる人に觀せられるが、それはボルタ・ゼッキヤの側らでサンタ・キアラの會堂から遠くない。オルトラナは五人の子を生んだ——一人の男の子はボゾと呼び、そして四人の娘はベネンダ、キアラ、アニエザ、そしてベアトリチエと名づけた。

オルトラナについて語り傳へられてゐることは、彼女は幼いときから善良な信仰の篤い女であつた、そして多くのことのなかにも、危険の多い、道のはるかな順禮の旅を聖地へ、バリ、そしてローマへ企てたといふことである。キアラの生れるに先つて、彼女は祈りしてゐたときに神から、彼女の生む子はやがて全世界のために光となるべきことを約束されたといふ。それにしたがつて生まれた子は洗禮に於てキアラ輝やくものといふ名を興へられた、それは轉じた意味では譽れある女をも意味する。

キアラは彼女の家庭のなかで、一種の理性的な敬虔が養はれるのには適當した繁榮と秩序とのうちに生ひ立つた。道徳上の無秩序は殆どすべて貧困に導くが、けれど神の畏れは「何事につけてもみな有益であり」そして「この世の生活に對しても報いを待つことができる。」たゞ我々の時代に於てのみではなく、「いかにして我はこの世を渡らうか」といふ問ひにむかつての答へは、「神を畏れそしてその命を守れ、」であつた。何となれば、ある程度までは「アポロジストらが誇張してゐるやうに見えるのであるが、彼らが一つの宗教



の優越をその信仰をもつミリオネアの多いことの統計によつて證明せんとするのもまた不當でない。

稚ないキアラは、すでにきはめて若い年ごろからこの普通の十分な信仰の程度を超えて進んだ。その時代に於て汎く愛讀されたものは昔の沙漠の禁欲者たちの列傳——*The pillar* であつた。キアラもはやくからこれらの物語と親んだやうに思はれる、いづれにしても、我々は彼女について、彼女がまだ小さい乙女であつたときにひそかに馬の毛で織つた贖罪の衣を着てわが身を苛んだことや、また彼女が、*Hisoria* *Lansica* にあるフルメの隠者、パウロのやうに、日々多數の祈りを唱へて、その數を小石によつて數へたことなどを聞いてゐる。かやうに彼女がみづから贖罪を爲してゐたとともに、彼女は、中世のすべての敬虔なる人々とおなじく、貧しきものに施すことをつとめた。

かやうにしてキアラは生ひたち、健やかに美しくなつた。十五になつたとき彼女は最初の求婚者たちを得た、その一人は少からず彼女の兩親の心になつた。そして父母が彼について娘に語り聞かせたとき、彼らはここに思ひのほかにも娘の決定した拒絶に逢つた。キアラは嫁入のことは聞き入れようともしなかつた、そして彼女の母がその故を知らうとして追つたとき、娘は、彼女はわが身を神のものとしてきよめたので、男について何も知らうと欲しないと告げた。

これはファヴァリノとオルトラナの心になふより以上の信心深きであつた。簡単な日常生活の基督教は——今日に於けると同じく中世時代にも——「あまり宗教くさい」ことに對する大いなる反感をもつてゐ

た。それゆゑこの時代の歴史に我々はくりかへしくりかへし何たびも父たちや母たちが息子たちや娘たちと、それらの信仰が善良な市民として相應である範圍を超えやうとするのに對して争つたいたましいあらゆるひの證跡を見るのである。

この戦ひを十六歳になつたばかりのキアラ・シフィ嬢はいましてならなくなつた。けれど彼女は幸ひなことには、この争ひに於いてたよる味方をもつてゐた。あたかもこのときにあつて、フランスはローマから説教について法王の免許を得てかへつてきた。その回心はそのときアッシジであのやうに人目を聳てたその人——彼は今、シフィ家の邸宅から間近きサン・ルフィノの説教壇に昇つた。こゝとしてサン・ジョルジオの寺でキアラは彼の言葉を聽いた、そして彼女が彼をはじめて見たそのときから、彼女はかやうな彼の行つてゐることと生活のみちがまた彼女のもでなければならず、そしてこれが彼女について神の欲したまふものであることを明らかに知つた。「小さき兄弟ら」の二人、ルフィノとシルゴストロはともに彼女の族の者であつた、そして彼らが道をひらいて、彼女は一族の一人の女、(傳説はそれにボナ・ゲルフチといふ名を與へた)に伴はれて、フランスに逢ひ、そして彼に彼女の心をうちあけた。フランスもまたすでにキアラについて語られるのをきいてゐた、そして「悪しき浮世からこのやうに貴とき餌を奪ひとつて、それをもつて主を富まさう」と願つてゐた。彼はそれ故彼女にあきらかに勸めて、この世を輕んじ、この世の空しさと無常を見すて、父母が結婚を望むのに従はずして、たゞ彼女の肉體をたゞ神のみの宮として守り



キリストのほかには花婿をもつことなかれと語つた。

今よりはフランススはキアラのたましひの導者であつた、そして彼の指し示すもとに彼女の心にはますます強い意志が高まつて、最後の一步を敢へてして、そしてすべて純粹にそしてまったく神に對する人の義務ではないものから離れやうとした。彼女は父母が欲する故にといふだけのことで一人の男に彼女みづからを與へることがいかにしてもこの義務のうちにあるとは思へなかつた、そして彼女が——それは一二年のレントのあひだのことであつた——サン・ジョルジオの會堂のなかにすわつて、そしてフランススが壇のうへからくすしく妙へに浮世をすてそして贖罪をなすべきこと、みづから擇べる貧しさについて、天つ國の慕はしさについて、そして我らの十字架にかゝりたまへる主イエス・キリストの裸かなりしことについて、そして主の受けた侮辱ともつとも聖とき受難について語るのを聞いたとき、彼女の心は燃えて、彼女はたゞちに出で、美しい衣服をぬぎすて、イエスのやうにそしてフランススのやうに、満足と勞働と祈りと平和とそして歡びのうちに生きむことを願つた。

つひに彼女が一つの新しい生活をしたふ願ひはそのやうに強くなつて、彼女はもはや抑へられなかつた、そして今はたゞ彼女がこれまで導いてきた生活の形式を破らなければならなかつた。フランススは棕櫚のドメニカ日曜日レベネの、ちの夜をもつて彼女がこの世の快樂を主の受難のための喪に見代へるべき限りの時として定めた。キアラはこの祭りの日(一二二二年の三月十八日)を利用してもつとも莊嚴にこの世に別れをつけた。

彼女のもつとも貴とき晴着を着飾つて、彼女は母と姉妹らともにも會堂に詣でた、この日アッシジの女や娘たちのうちに美しい金髪ドメニカのキアラ・シフィ嬢ばかり花やかに輝いてゐたものはなかつた。

棕櫚の日曜日に寺院はキリストがエルザレムに入つた日を祝ふのである。棕櫚の枝によそへた橄欖の枝は牧師によつて清められて、そして會衆に頒たれる、そして彼らは會堂のなかを行列をつくつてめぐりはじめる、そのあひだ歌ひ人らはむかしの美しいアンティフォンをうたふ——*Patri Hebræorum, portantes ramos olivarum, o'viverrunt Domino, clamantes et dicentes: Hosanna in excelsis!*「ヘブライの子らは橄欖の

枝を手にもちて、ゆきて主をむかへぬ、さけびつゝいひけるは、「高きに在ます神に榮えあれ！」

清められた橄欖の枝が分ち與へられ、そしてすべて會堂に集まつた人々は聖餐の卓のまへに進み出てみづからミツサを唱へてゐる僧正ギドーから一枝を受けてゐたとき、たゞ一人退いてゐるものがあつた、そしてこれはキアラ・シフィであつた。さまざまの感動は彼女が今果さむとする大いなる一步のことをいふとききたしかに若い少女心には堪へがたく重かつたのであらう。こゝにこの會堂に彼女は過ぎた年々に幾多の朝を母や小さき姉妹たちと並んですわつて、そしてともにミサを聴きながら、そしていつまでもそれが變ることがあらうとは一たびも考へなかつた——そして今はその最後の一度であつた。この日、けふこそは彼女は彼らに別れをつけるべきこととなつた、とこしへに、そして彼らに知られずに、そしてけふの夕ぐれは彼女が幼なき日と青春の故郷にすごすべき最後の夕である。母のあらゆるやさしさや少なき妹たち



の愛らしさ、いとしさ、互にたよりあつてゐた情愛を思へば、キアラは力無くなる心ちがした、おなじ家のなかに生ひたつすべての人々のまはりに年々がいつとなく心つかぬまに織りそして結んだあまたの優しき、たちがたき絆しは、この嚴そかな時に彼女の心に食ひ入つてそれをせつなくした、そして彼女はまことの女心から泣いた。嫁ぐ人が父と母から別れるときに流す涙をながして泣いた。

僧正ギドーは彼女のうなだれた頭と涙にむせぶ肩に目をとめて、彼女のこゝろを知つた。フランスが彼にこのことについてまへに語つたのはあり得べきことである。彼はやさしい思ひやりをもつて、キアラの受けなかつた橄欖をとりあげて、それをみづから會堂のなかに彼女のすはつてゐるところへ持つて行つてやつた。

キアラはつぎの夜彼の家出を遂げた。後門の戸が一堆の材木で塞がれてゐるのを、彼女は自ら取り除けて、そこから彼女は道に出た、そしてボナ・ゲルフツに伴はれてボルチウクラの道に進んだ。豫め彼女を待つてゐたフランススカンたちは炬火を燃して彼女を迎へた、そしてまもなく彼女は小さい禮拜堂のなかに聖母のみすがたのまへに跪き、「貧しき襤褸に包まれて秣槽に入りたまへる聖とき愛らしき幼児イエスの愛のために」この世にむかつて彼女がしばらくまへに書いた離縁の手紙を興へた。彼女は輝やく衣服を兄弟らの手にあたへ、そしてその代りとして一枚の兄弟らとおなじ粗い毛の衣を受けた。彼女は寶石を飾つた帯を荒い結び節のある繩帯と代へた、そして彼女の黄金色の髪がフランスのうごかす鉄のまへ

に落ちたのち、彼女は高い誇らしい頭巾を地の上に横はるにまかせて、そして彼女の頭を一枚の厚い黒い覆衣に包んだ。祭りのとき會堂に穿いて行つた彼女の穿つた繻ひのある靴のかはりに、彼女は跣足のうへに一足の木靴を穿いた。彼女はその後で修道院の三つの誓ひをして、そしてそのうへに兄弟らと同じやうに、フランスに彼女の長上として命に従ふべきことを約した。この變化が終つて、高貴な生れのキアラ・シフイ嬢がスオーラ・キアラとなつてから、フランス。その夜のうちに彼女をイゾラ・ロマネスカ(今はバスタア)の村に近いサン・パオロのベネディクトゥス派の尼たちの修道院に伴つた、こゝに彼はあらかじめ彼女の住みかを設けたのであつた。

キアラの身のなりゆきが永く知られずにあることはあり得べからざることであつた。ファヴァリノと彼の親族はまもなく彼女のかくれ家を發見した、そして彼らは修道院に赴いて彼女を動かして歸らしめよつとした。けれど十八歳の若い少女は動かすべくもなかつた——懇願も甘言もまた約束も効果がなかつた、そして父や叔父たちが腕力を用ひようとしたときに、彼女は寺院のなかにある祭壇にすがりついて、そして覆衣をはね除けて髪を剪つた頭を示した。なほ幾日かのあひだ家族は手だてをかへて彼女を取り戻さうと計ることをやめなかつた、そしてフランスはつひにキアラを他の修道院、パンツォにあるサンタンジェロの修道院、それもやはりベネディクトゥス派の姉妹の所有になつてゐるところに移すのを最も賢い仕方であると思つた。



ファヴァリノはこれまでは怒りの絶頂にきてゐなかつたとしても、またもや妹娘のアニエザがキアラの家出から十六日のうちに、同じく家を去つてサンタンジエロに行つてそこで姉の生活の仲間に入つたときには、もはや忍ばれぬ激怒に荒れ立つた。この娘については彼は大いなる希望をもつてゐた、彼女は婚約が成りたつてゐて、婚禮はすでに定まつてゐたのであつた、そしていま彼女もまた同じ狂氣にとらはれた！ 彼は憤りと怒りにたへずして彼の弟のモナルドを呼んで、十二人の武装した男を伴つて行つてアニエザを取りかへしてくることを依頼した。

サンタンジエロの修道院にゐた尼たちはそこに向つてきた武装した人々に驚かされてみな引き入つてアニエザを置き去りにしてしまつた。やうやく子供でなくなつたばかりな若い娘ははげしく抵抗した、そして人はつひに暴力の手段をとらなければならなくなつた。打たれたり蹴られたりしたのちに、彼らは彼女の髪を掴んで修道院の外に引き出した。「キアラ、キアラ、来て助けて下さい！」不幸な娘は徒らに叫んだ、そして彼女の髪や着物は引きちぎれて道のかたへの茂みなどにかゝつて残つてゐた。

キアラは彼女の室にゐてこの艱みの時に於て神の助力を乞うた。そしてにはかにふしぎなことが起つた、十二人の力つよい男たちはアニエザの身體を一寸もさきへ動かすことはできなくなつた。彼女はにはかに石でつくつたやうに重くなつた。人々は揺りうごかし、あるひは曳かうとしたけれどみな無効であつた、「こいつは一晚中鉛を食つてやがつたに違へねえ、」とその一人は齒を出して笑ひながら曰ふ。「さうだ、尼さ

んたちは變つた御馳走を食ふからなあ、」ほかの一人はさう答へたであらう。けれどそのとき彼女の叔父のモナルドはこの思ひかけぬ障害に逢つてますく怒つた、彼は重く鎧つた手を振りあげて、一打ちにこの頑なな娘の頭蓋を打ち砕かうとした。けれど彼もまたそのまゝ石のやうになつて、力が脱けて立つてゐた、手は振りあげたまゝ動かすことができなかつた。そのときキアラは場に現はれた、そして半死半生のアニエザは彼女の手にならされた。家族はこれからさき二人の少女が彼らの召された生活に従ふことを妨げるすべての試みを思ひとまつた、のちに第三の娘ベアトリチエもそこに加はつた、そしてファヴァリノの死んだのちに、母のオルトラナもまた行つた。

サンタンジエロの修道院はすべての事情からキアラとアニエザのためにたゞ一時の宿りであつた。二人はベネディクトゥス派の尼ではなかつた、そしてベネディクトゥス派の服も纏はず、聖ベネディクトゥスの掟を受けてゐなかつた。フランシスは彼らのために恰好な修道院を見出すために、昔の恩人、モンテ・スバジオのカモドリテイノたちに赴いた、これらはまへに彼にボルチウンクラを興へ、そして一二二二年の四月二十二日にはアッシジの市に、古くからあるミネルヴの殿堂の今はマリアの寺に變つてゐるのを興へた、これは今も市の市場に残つてゐるのが見られる、そして彼らが今フランシスにサン・ダミアノとその堂に附屬した小さい修道院を興へることを承諾したときの彼の歡びを描くことができようか？ 「いくたりかのわづかなる姉妹ら」ともにキアラはこの建物に移つた、その壁のうちに彼女は四十一年のあひだ――



彼女の傳記を書いた人の曰ふには——「贖ひの鞭もて彼女の肉體の玉の壺を碎き、それによつて教會の家は彼女のたましひの薫りをもつて満たされた。」

何故となれば、こゝにこそは祈りと勞働と、貧しさとたのしさの生活——私がフランスのカニズムの花と呼ぶそれは咲き出たのであつた。キアラの與へた模範は汎く及んだ。そのころの女性のうちには修道院の庵室の白い壁が直接にシムボライズするかの生活——感覺以上に高められたる生活に對する一つのあこがれが眠つてゐたやうに見える。キアラはこの眠れるあこがれを意識的な意志にまでよびました。いまだ浮世に繫累づけられぬ處女たちは彼女と共に生活せむがためにサン・ダミアノに急いだ、そして家庭の束縛がこれを許さないものは、密かに家のなかで能ふかぎり修道院的に生活しようとした。高貴な貴婦人らは持參金をすて、修道院の建立につくし、そしてそこに彼らみづからは粗い衣服を着て灰を塗つて、彼らの過去の生涯の贖ひをするために入つて行つた。結婚は決して障礙をつくらなかつた、何故となれば夫と妻とは各の自らのものにむかつて——夫はフランスに、妻はキアラの許に走つた。

サン・ダミアノに入ることの條件はボルチウンクラに於けると同じく——すべて所有するものを貧民に分ち與へることであつた。修道院みづからは何も受けてはならない、それはキアラがその時代の精神に於いて戰闘的ないひ現はしで言つたごとくに「もつとも高き貧しさの聳えたる壘」でなければならなかつた。姉妹らの生活の支持は兄弟らのそれと同じものであつた——即ち勞働と施物であつた。あるものは留まつ

て勞働をするあひだ、他のものは出て戸ごとに乞うた。

“Forma vivendi”の——フランスが姉妹らのために書いた生活の規則の——章句は殆んどこれらのわづかな規定につくされてゐて、そしてその主要な内容は福音による貧しさをつとめとすることであつた。聖フランスの仲介によつてであらうが、インノケント三世はこの掟に對して、彼が兄弟らの掟を承認したときよりもさらに公式的に承認を與へた。キアラははじめて一二一五年に、聖フランスの嚴命によつてサン・ダミアノの院主になつたのであるから、法王が姉妹らの掟を承認したのをこの年のこととするのは決して無謀な臆測ではない。これまでフランスは二種の團體の首として、導者として立つことができた、けれどローマに對しては、キアラは、フランスが兄弟らの長上であるやうに、姉妹の長上として立たなければならなかつた。インノケント三世は彼親ら筆をとつて、このめづらしい *Privilegium paupertatis* (貧しくあることの特權)——いつも法王廳にねだつてくるさまざまの特權の請求とはまつたく類を異にしてゐるもの——の第一行を書寫して、それによつて彼はキアラと彼女の姉妹に今もまたいつまでも貧しくあるべき權利を確定した。

キアラがフランスと感情を同じうして、貧しさを基督教的な完全の基礎とし、「汝ら神と財とに仕ふる能はず」といふ言葉に於いて一致してゐたやうに、彼女はまた勞働についてもフランスと考へを同じくしてゐた。彼女の院主としての尊嚴を顧みることなく、彼女はおほくは自ら食卓に給仕をしたり、他の姉



妹たちの手に水を濯いだり、彼らの用を足したりした。他の人に何ごとを爲せと命ずることよりも彼女はそれを自ら爲すことを好んだ。彼女は親しく病者たちの看護をし、そしていかなる不潔な仕事をいとはなかつた、他の姉妹たちが外から修道院に歸つてくるとき、彼らの足を洗ふのはキアラであつた。夜には彼女は起き出でて、姉妹たちのうちで寝てゐるあひだに被衣をすべらして冷える恐れのあるのを氣をつけてまた包んでやつたりした。フランスは屢ば病者や衰弱した人々をサンダミアノに送り遣した、そこではキアラが彼らを看護して、屢ば彼らを癒した。もし彼女自らが病めるときにも、彼女は労働を止めなかつた、彼女は寢床のうへに起き直つて、一つの褥を背に宛て、そして祭壇の飾布を刺繡した。かやうにして彼女は、まったく聖フランスその人の心もちで、五十に餘る祭壇の飾布を縫つた、それは *Corpore* といふ種類のもので、彼女はそれを絹の上蔽ひのなかに縫ひあげて、山のうへや平原にあるいくつかの寺院に贈つた。

彼女が労働について他の姉妹たちの先にたつて善行の例を示したやうに、それはまた彼女の信仰の生活についても同じであつた。 *Hora completa* (祈禱書にある一日の祈りの最終のもの) が果てたとき、キアラ一人は永いあひだ留まつて、フランスがかの聲を聞いたのと同じ十字架の像と、祭壇のもつとも聖き聖器のまへに永しへの燈火に夜も日も生きそしてもえる小さな焔とのまへに通夜した。こゝで彼女は救ひ主の苦しみに心をあはさる静想に自らを興へた、こゝで彼女は、*Crucis officium*、フランスが撰びそして



(詳不家畫) ラ ア キ 聖